

近江中山の芋くらべ祭

—映像民俗誌『芋くらべ祭の村—近江中山民俗誌—』の記録—

上野 和男

岩 本 通 弥

橋 本 裕 之

一、問題と方法

- (1) 問題
- (2) 映像民俗誌の意義
- (3) 『芋くらべ祭の村—近江中山民俗誌—』
- (4) 本稿の課題と構成

二、芋くらべ祭の儀礼

- (1) 芋くらべ祭当日の準備
- (2) 熊野神社での儀礼
- (3) 野神山祭場での儀礼
- (4) 芋くらべ祭の儀礼の構造

三、芋くらべ祭の準備

四、芋くらべ祭の周辺

- (1) 祭の社会的背景
 - (2) 芋くらべ祭の日の中山
 - (3) 周辺農村の野神祭
- 五、結論
- 六、芋くらべ祭関係資料

一、問題と方法

(1) 問 題

この報告は国立歴史民俗博物館民俗研究部が、一九八八年度に民俗研究映像のひとつとして制作した『芋くらべ祭の村—近江中山民俗

誌—』、およびこれに関連する映像記録の分析と記録である。民俗研究映像は映像記録によって現代日本の地域社会の民俗誌的記録をめざす映像民俗誌であって、その第一作の対象村落としてわれわれが選定したのが、芋くらべ祭で知られる滋賀県蒲生郡日野町中山である。中山という村落が東西の二組にわかれて、それぞれがその年とれた最も長い芋を選び、その根元から葉先までの長さを野神の前で競べあうのが芋くらべ祭であるが、この映像民俗誌はこの芋くらべ祭を中心に現

在の中山の人々の生活を、できるかぎり全体的にありのままに描こうと試みたものである。本報告は中山の映像民俗誌の制作過程そのものの記録をめざすものではない。この報告の主たる目的は、映像化されたデータをもとにして芋くらべ祭と中山の社会構造を再検討し、さらにこの民俗研究映像の制作過程で得られたさまざまなデータを提示して、これまでの芋くらべ祭の調査報告を補充することにある。さらにこれらに加えて、調査者と被調査者の関係など映像民俗誌制作をめぐるさまざまな問題についてもあわせて考察してみたいと思う。

(2) 映像民俗誌の意義

民俗研究映像は国立歴史民俗博物館民俗研究部が、映像による日本の民俗文化の研究をめざして、研究部の研究事業の一環として一九八八年度から制作を開始した映像記録である。周知のように最近における映画・ビデオなどの映像技術の進歩はきわめて著しく、これを研究方法もしくは調査法として導入しようとする傾向は、さまざまな分野の研究においてますます活発になりつつある。この民俗研究映像は、これまでのような文字を中心としながら、これに静止画像である写真を加える程度にとどまっていた日本の民俗文化の研究に、映像といういわば動的画像を加えることによって、研究にあらたな可能性を開きたいというのがその制作の直接の目的である。一九六〇年代以降、Mead, M. (一九七五)やHockings (一九七五)など多くの人類学者によって提唱されてきた映像人類学 (visual anthropology) や映像民

俗学 (visual folklore) がその背景にあることはいうまでもない。われわれの研究対象には祭礼、民俗芸能や人々の行動様式などとも静止した画像ではとらえきれないものが多く含まれている。これまではこれらについてもわれわれは、写真を撮影してこれを分析するという方法のみを有力な方法として研究を行ってきたが、近年における小型ビデオカメラの普及はこれらの研究方法を一変させることになった。しかしこの民俗研究映像は単に映像を撮るにとどまらず、さらにこれを研究論文と同じようにひとつの完結性をもった作品として制作し、あらたな研究資料として提供しようとするものである。結果としてこの映像記録は現代日本の民俗文化の記録として、将来は歴史的な映像記録の性格をも併せもつことになるのである。

より具体的にいうならこの民俗研究映像の当面の目標は、現代の日本各地の地域社会の映像民俗誌を制作することである。われわれの考える映像民俗誌の基本は以下の三点にある。まず第一は現代の民俗文化についてのありのままの映像記録であることである。民俗の現代的意義についてはこれまでもさまざまな民俗学者による論争があり、民俗を過去の生活の現代的残存物とする考え方もあるが、われわれは現代の民俗は現代に生きており、これはまずもって現代のさまざまな状況のなかで理解されるべきであると考ええる。本稿でとりあげる芋くらべ祭も長い歴史と伝統を持つ祭であるが、過去における意義はともかくとして、われわれにとってはず現代の中山の人々の生活との関連でこの祭を理解することが課題である。現代のさまざまな状況との

関連で理解するためには、まず現代の民俗文化の正確な記録が必要であり、これを映像技術を駆使して試みるのがこの映像民俗誌である。映像記録についてのこうした考え方は、過去にあったと思われる民俗文化の復元的映像化の考え方と著しく対立するものであるが、これはそうした映像記録の制作の意義を否定するものでは必ずしもない。

われわれは現代の民俗文化を映像化する場合、好むと好まざるにかかわらず現代の発達した物質文化に直面せざるをえない。たとえば中山において人々の行為を撮影しようとすれば、人々は現代的な服装や髪型で身をまとっているし、家庭の台所は都市とおなじようにシステムキッチンで装備されているし、また村中には各種の清涼飲料水の自動販売機が氾濫している。可能な限り撮影対象に手を加えずにありのままの姿を映像化しようとすれば、これらが映像に含まれるのは当然である。これに少しでも作為をくわえるなら、現代の正確な記録とはいえなくなる。しかしながら、人々のありのままの姿を映像化したというのはわれわれの基本的な理念の問題であって、この理念は現実的にはさまざまな困難に直面することになる。たとえばありのままの映像とは何かという基本的問題の検討でさえ多くの時間を必要とするであろうし、個々の映像の判断も研究者によって差異が想定されるからである。この理念にしたがいながら中山の映像民俗誌を制作するにあたって、われわれがとりあえず心がけたことは、中山の人々に例年とは異なる特別な祭礼をやらないうちに要請することと、撮影班が村に入ることによって村人に与える影響を最小限にとどめることの二

つであった。ありのままの映像記録こそが、将来にわたる日本の民俗文化の研究資料として重要だとわれわれは考えている。

第二はこの映像が民俗誌的な映像記録であることである。当面制作する民俗研究映像は個々の民俗文化（たとえば民俗芸能、祭、技術など）の個別的な映像記録ではなく、民俗誌的な映像記録である。この意味でわれわれはこれを「映像民俗誌」と規定している。民俗誌とはある地域社会の人々の生活を相互関連的に記述した報告を意味しているが、映像によってこれを記録しようとするのがこの映像民俗誌である。日本の民俗文化の研究にはこうした意味での民俗誌を重視する考え方と、民俗文化は個々のものとして理解すべきであるという民俗誌に消極的な考え方とがあるが、われわれは前者の考え方をここでは選択した。⁽²⁾ また民俗誌は必ずしも人々の生活のすべてにわたって網羅的項目的に記述したものを意味するものではない。民俗誌にとって重要な本質は相互関連的に一定地域の人々の生活を記述することであり、特定の祭や事件、あるいは社会組織などを中心に記述したすぐれた民俗誌も多い。中山の映像民俗誌は、こうした意味で辛くも祭を中心としながら、中山の人々の生活をできるかぎり全体的に記述しようとしてきたものである。さらにいえば、こうした意味での映像民俗誌の制作にはさきに述べた現代的記録の視点が不可欠である。

第三はこの映像記録が研究映像であることである。研究映像の意味はさまざまであるが、まずは研究者自身の手による映像記録であることが重要である。近年、日本各地の祭礼や年中行事、通過儀礼などの

映像制作が、各地の歴史民俗資料館、民俗博物館などの整備によってますます活発になりつつあるが、その多くは研究者が制作した映像ではない。われわれはこうした民俗映像の意義を否定するものではないが、これらは研究者が制作する映像記録とは自ずからさまざまな点で異なるのは当然である。研究者自身の視点をもとにして研究対象を映像化したいというのが、この民俗研究映像の目的である。研究者自身が何をどう撮るかを選択し、研究者自身の手によってそれを編集し、映像記録として完成させるのである。したがって映像民俗誌は美しい映像よりも、研究資料としての意義をより強調した映像であるべきであるとわれわれは考えている。研究者による映像記録の制作はまだ開始されたばかりであるが、牛島巖（一九八二ほか）や大森康宏（一九八四ほか）などの映像人類学者の先駆的な試みに刺激されて、日本⁽³⁾の民俗文化の研究にもこうした研究映像を導入してみたいというのがわれわれの考えである。この意味での民俗研究映像は、われわれがこれまで論文という主として文字媒体によって調査研究の結果を報告してきたものを、映像媒体で表現する試みであるといえる。文字媒体による報告が資料と論文にわかれるのと同様に民俗研究映像にも、研究資料としての映像記録と研究成果を映像によって表現したものがありうる。『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』はいまだ研究資料としての性格が濃厚であるが、われわれはさまざまな経験をとおして、今後は研究資料としての映像記録から、研究成果としての映像記録への展開をはかりたいと考えている。

(3) 『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』

すでに述べたようにこの映像民俗誌の第一作が、坪井洋文の提案による滋賀県蒲生郡日野町中山の民俗誌『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』である。中山は琵琶湖南の日野盆地の西端のやや山あい⁽⁴⁾に位置する戸数約一二〇戸の農村である。中山は少なくとも明治以降は、水田稲作を基盤とする稲作農村であった。ここで現在毎年九月一日に行われる芋くらべ祭は、近江の農村に広く見られる野神祭のひとつとして行われている祭である。中山の芋くらべ祭は一九五七年に滋賀県無形文化財に指定され、現在は宮座を中心とする芋くらべ祭保存会が組織されている。映像民俗誌の対象として中山を選定した第一の理由は、芋くらべ祭の研究が北原真智子（一九五六）、坪井洋文（一九八七）らによってかなりの蓄積があり、これを映像民俗誌として制作する意義が十分に認められることである。

中山の芋くらべ祭はこれまでふたつの点から研究者によって注目されてきた。ひとつは双分制（dual organization, dualism）の視点である。ひとつの社会が東西、南北、里と浦、日向と日影などさまざまな基準で二つに区分されて対立し、かつその上で互酬的に統合される社会システムを一般に双分制とよんでいるが、近江の神社祭祀組織である宮座にはこうした双分制の形態をとるものが多い。この双分制を宮座の本質的要素と規定している研究者もいる。この双分制の視点からいち早く中山の芋くらべ祭を分析したのが北原真智子（一九五六）で

ある。北原真智子是对立と互酬という二つの視点から、中山の社会組織および芋くらべ祭の儀礼を分析し、さらに東西の双分制の歴史的な生成過程についても考察を進めている。結論として北原真智子は中山を日本における双分制の典型的な事例として規定した上で、中山の双分制が西谷を基本としながら、その後の戸数増加によって東谷が分裂して発生したと分析している。

いまひとつは畑作文化の象徴的儀礼としての視点である。芋くらべ祭は水田からの収穫物である稲ではなく、畑の収穫物である芋が比較されるという点に注目し、これを稲作文化に対立する畑作文化の何らかの象徴として分析しようとする視点である。⁽⁴⁾坪井洋文(一九八七)の芋くらべ祭の研究は基本的にこのような視点に立つものであるが、坪井洋文のこれまでの研究は東西の双分制に焦点をあてたものであって、この視点からの分析は今後の課題であった。この意味では坪井洋文の芋くらべ祭研究は、未完のまま終わったといえる。しかし芋が比較されること、および周辺の農村には日野町三十坪のように里芋の茎で鳥居をつくる野神祭が行われていること、さらに滋賀県野洲町三上のように芋茎で御輿をつくる芋茎御輿の祭礼が行われていることなどを含めて考えれば、この祭の畑作文化の象徴としての側面を無視することはできないのである。こうした研究状況をふまえて中山の映像民俗誌では、基本的には東西の双分制に焦点をあてながら、これに畑作文化の象徴としての視点も加えて、映像記録の作成にあたることにした。中山の芋くらべ祭を比較考察するために、三十坪の野神祭や、中

山の分村とされる徳谷の野神祭(芋くらべ祭)をこの映像民俗誌に含めたのはこのためである。

中山の芋くらべ祭を選定した第二の理由は、東西二組の祭の準備や儀礼が同時進行する芋くらべ祭の過程を、これまで人間の目ではなかなかその全体像を把握できなかったことである。われわれはこの映像民俗誌の作成の前に何度か芋くらべ祭を観察調査し、写真撮影もしていたが、東西いずれか一方に視点を置いた観察しかできなかった。また祭場が山上であるという地形的位置から、芋くらべ祭の全体を特別の装置なしに観察し、撮影することはまったく不可能であった。したがって複数のカメラによって芋くらべ祭を撮影し、さらに映像技術を駆使して芋くらべ祭の全体像に接近することは長年の芋くらべ祭研究にとっては念願ともいえるべきものであった。また芋くらべ祭の儀礼、とくに祭場の儀礼は動的に複雑な所作が多く、静止画像記録である写真では充分にとらえることができなかった。これらのことがこの映像民俗誌制作の直接の契機であった。

この映像民俗誌『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』の制作は、一九八八年四月、まず中山の人々へのこの映像民俗誌制作の趣旨説明と依頼から始まった。幸いにして中山の人々の積極的な協力にささえられ、その後三回にわたる予備調査を経て、八月二日から九月二日までわれわれ三人と毎日映画社の撮影スタッフが第一回の長期撮影を行った。映像の撮影と編集にあたってわれわれは、経験のある映画会社の技術的支援を受けることとしたが、全体の企画、撮影や編集の指

示はわれわれが行うこととした。原則として各カメラにわれわれが密着し、細かくいえばカメラの位置や撮影対象、あるいは撮影の臨機応変指示はその場でわれわれが行う体制をとった。われわれは撮影前にかなり詳細な構成案を作成したが、編集は事実上、撮影できた映像をもとに行うこととした。第一回の長期撮影は基本的に一台のカメラで撮影をつづけたが、九月一日の芋くらべ祭の日はこれに四台のカメラを追加し、合わせて五台のカメラを動員して撮影を行った。この期間中に隣接する三十坪の野神祭も併せて撮影した。また第二回の撮影として、九月一〇日に分村とされる徳谷の野神祭の撮影をカメラ一台で行った。撮影はすべてビデオで行ったが、芋くらべ祭の全体像をあますところなく記録しようとしたために、総収録時間は約四〇数時間に及んだ。われわれは編集した作品ばかりでなく、生の映像記録としてのラッシュビデオも研究資料としてきわめて重要であると考えている。したがって本稿は、作品としての映像記録とラッシュビデオの双方を資料として用いた分析と記録である。

このラッシュビデオのすべてを見て何が撮影できたかをまず確認して記録し、その後これを編集して、われわれはこれまでの二年間に以下に掲げる四本の映像記録を作成した。

- ①『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』(二六〇分、一〇〇分)
- ②『中山の芋くらべ祭』(VHSビデオ、一六〇分)
- ③『徳谷の野神祭』(VHSビデオ、三〇分)
- ④『上三十坪の野神祭』(VHSビデオ、二〇分)

この四本のなかで中心となる作品は、映像民俗誌としての『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』である。この映像民俗誌は三部構成であり、その内容の詳細は「資料六」民俗研究映像『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』の構成に示した。第一部「芋くらべ祭の儀礼」は九月一日の芋くらべ祭の主要な儀礼を東西比較を中心として構成したものであり、第二部「芋くらべ祭の準備」は八月二二日のアワセナラシ(東西合同練習)から八月三十一日までの芋くらべ祭の準備状況を網羅したものである。さらに第三部は「芋くらべ祭の周辺」として、芋くらべ祭の歴史的背景や中山の社会構造、および九月一日の中山の全体的状況と周辺農村の野神祭で構成したものである。この映像民俗誌の構成は一般的な祭礼の記録映画とはかなり異なることは明白である。

われわれが意識的にこうした構成をとったのは、その全体像をいまだ誰も見たことのない芋くらべ祭の儀礼の全過程をまず提示し、その後準備過程や中山の社会的歴史的状況を示し、さらに周辺農村の関連する祭礼と比較しようと試みたからである。この映像民俗誌の制作にあたっては、毎年のように繰り返される芋くらべ祭の儀礼的行動のみならず、これをめぐる人々の対立、緊張、競争、喜び、悔しさなどの心理的側面を含めて映像化し、芋くらべ祭をその年々の状況のなかで生成される、いわば生きものとしてとらえようと試みた。『中山の芋くらべ祭』は九月一日の野神山における芋くらべ祭の儀礼のみを、祭の進行と全く同じ時間的経過で記録した映像記録であり、時間の関係上、①では盛り込めなかった芋くらべ祭の全経過がリアルタイムでこ

ここに示されている。『徳谷の野神祭』と『上三十坪の野神祭』はともに、芋くらべ祭に関連する周辺農村の祭礼についての映像記録であり、これもまた①では十分に盛り込むことのできなかつた映像を独立の記録として作成したものである。これらのなかで本報告で中心に取りあげるのは『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』である。

(4) 本稿の課題と構成

本稿の目的は以下の三点に要約できる。第一は動的画像としての映像資料を用いて、芋くらべ祭の儀礼過程をあらためて分析することである。映像資料のすぐれた点は人々の行動を動的にとらえることができることと、これをくりかえし観察することができることである。その過程では、しばしば指摘されるように祭の当日の観察では気づかなかつたことも映像上で確認することができる利点もある。これまでの諸報告のなかで最も詳細に芋くらべ祭の儀礼分析を試みているのは坪井洋文（一九八七）であるが、映像資料を駆使することによって、われわれはさらにあらたな分析を加えることができるであろう。また映像資料を用いた儀礼分析のいまひとつの利点は、儀礼過程における人々の行為や言語表現から、儀礼の形式的構造的側面ばかりでなく、いわば感情的側面にまで接近できることである。われわれはこれまで祭の儀礼を形式的行動としてとらえてこれを分析し、人々がこの儀礼に込める感情を個別的なものとして無視ないし軽視してきた。それには調査の方法論的制約も関連していたが、映像資料による分析はその制

約のある程度打破することを可能にしたのである。とくに芋くらべ祭のように勝負を決しようとする祭の場合はなおさらであるといえる。中山の人々がこの芋くらべ祭に込める感情はわれわれの予測をはるかに越えるものであつた。その分析もこの報告で提示したいと思う。

第二はこの映像民俗誌を制作する段階で得られたさまざまな資料を提示して、これまでの芋くらべ祭の報告を補充することである。今回はいままでの通常の芋くらべ祭の調査とはやや異なつた観点からこの祭に接近したが、その過程で多くのあらたな事実を確認することができた。それはたとえばいままでも必ずしもその詳細が明らかではなかつた祭の準備過程であり、また祭のさまざまな手続きであり、さらに日常生活における東西の対立や周辺農村の芋くらべ祭に関連する祭である。こうした事実もまたこれまでの芋くらべ祭の研究にあらたな知見を加えることになるであろう。

第三はこの映像民俗誌の制作過程を通しての、調査者であるわれわれと被調査者である中山の人々との関係である。両者の関係はあらゆる調査においてしばしば対立・緊張関係と親和的關係が交錯するが、とりわけ映像民俗誌の制作という今回のような特別の調査において、どのような問題があつたかを考察してみたいと思う。このことは結局は参与観察法の問題に帰結する。参与観察法とは調査者が調査対象の社会生活に参加して、その社会を内側から明らかにする調査法であるが、完全な意味での参加はありえないから、参加の問題は常に相対的なものであるといわざるを得ない。この参与観察法は、調査者が調査

対象にできる限り手を加えずに、ありのままの姿を調査するという前提に立っており、われわれもありのままの映像を撮ることをこの映像民俗誌制作の基本にした。このためにわれわれも村人への影響が極小になるようにとめたつもりであるが、映像撮影の場合にその機材の大きさや特別の装置（今回は祭場に特別の撮影台を設置した）、あるいは「映画をとる」ことの村人への心理的影響など無視できない問題も多い。つまり映像撮影の必然性が、ありのままの映像を撮りたいというわれわれの理念とどうかかわっていたかが、ここでの問題なのである。

本稿では映像民俗誌『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』の構成に沿いながら、芋くらべ祭当日の準備と儀礼をまず分析し、そのちに芋くらべ祭の準備過程の分析とこの過程での映像制作をめぐる諸問題について検討し、さらに中山の社会構造、周辺農村の関連する祭祀など芋くらべ祭をめぐる周辺の問題について考察をすすめていきたいと思う。また付属資料として、この報告における芋くらべ祭の分析に関連する資料を加えた。本文のうち一、二、五は上野和男、三は橋本裕之、四は岩本通弥が分担して執筆した。全体の構成や内容は三人の共作であるが、分担分については基本的には各執筆者の責任で執筆したことを、ここであらかじめ断っておきたい。

なお映像民俗誌『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』およびこれに関連する映像記録の制作にあたっては、中山をはじめとして徳谷、三十坪の村の方々、および芋くらべ祭保存会、日野町教育委員会に大変なご協力とご支援をいただいたことを記して、厚く感謝したいと思

う。とりわけ中山の一九八八年の神主・高岡新治氏、副神主・小西善一氏をはじめとして二人の宮座の方々、勝手・山若・山子の方々、そして徳谷区長・瀬川富三氏、神主・望主勝二氏、および上三十坪区長・村島宇多男氏に厚く御礼申しあげる次第である。さらにこの映像民俗誌の編集段階でも格別のご協力・ご助言をいただいた、中山の郷土史研究者で『近江中山の芋くらべ祭り』の著者・岡本信男氏にかさねて厚く感謝する。

註

- (1) 民俗の歴史性と現代性をめぐる議論については、関敬吾（一九四九）、平山敏治郎（一九五一）などを参照。
- (2) 民俗誌の重要性をとりわけ強調したのは大間知篤三であった。大間知篤三（一九五八）参照。
- (3) 映像人類学をめぐる理論的、技術的な諸問題については牛島巖（一九八七）、大森康宏（一九八二、一九八四）などを参照。牛島巖には「脇野沢の夏祭り」（一九八二）、「下北大畑の祭り」（一九八五）、「大川の鮭漁」（一九八六）などの作品がある。また大森康宏には「私の人生・ジブシー・マヌーシュ」（一九七七）、「道祖神祭」（一九八三）などの作品がある。このほか民俗学的な映像記録の試みとして国学院大学日本文化研究所の制作した「見付の裸祭り」がある。
- (4) 坪井洋文（一九八二）では、中山は新年と八月十五夜に儀礼食としての芋を食べる村の事例としてとりあげられているのみである。坪井洋文（一九八七）における芋くらべ祭の報告においても、中山の芋くらべ祭調査の目的として、「芋くらべ祭を中心とした東西両谷の民俗誌的研究を通して、日本民俗文化の分析を目的とする意図を持った問題意識にもとづくものであった」と述べているのみであって、坪井洋文はこれを畑作文化の象徴として理解しようとする視点を明言しているわけではない。杉山晃一（一九六〇）は芋くらべ祭について「これは稲作儀礼としての

二、芋くらべ祭の儀礼

性格を持っているが、八月十五夜と同じく、矢張り芋そのものの収穫儀礼でもあったのではなからうか」とのべている。

(上野和男)

二、芋くらべ祭の儀礼

一九八八年の芋くらべ祭は八月二日から準備が開始され、数多くの準備を経て九月一日に芋くらべ祭当日の儀礼が行われた。九月一日までの準備過程については次節で分析するので、本節では九月一日の芋くらべ祭当日の準備と儀礼について、一九八八年の例に即して分析したいと思う。ここでは東谷と西谷のさまざまな差異と、この祭に対する村人の態度に注目しながら分析を試みたいと思う。なお芋くらべ祭の供物、用具、儀礼などについては、映像民俗誌撮影の関係上、一九八八年の写真がないので「資料七」の一九八〇年の芋くらべ祭写真記録を参照されたい。

(1) 芋くらべ祭当日の準備

九月一日朝に行われる祭の準備は、山若(若者、一九八八年は東は七人、西は六人。一番尉以下の序列がある。)を中心とした芋の掘り出しと飾りつけ、宮座(大老人・オトナ、東西六人、計十二人)と勝手(山若を終えた者。山若の補佐役、東西一人ずつ)による熊野神社での供物の準備および野神山祭場の準備、および宮座、山若、山子(子供、東一人、西一人)などの家庭における供物などの準備の

三つに大きく分けることができる。ここでは芋の飾りつけと供物と祭場の準備を中心に、芋くらべ祭直前の準備状況を分析したいと思う。

芋くらべ祭は中山の村をあげての祭礼であるが、祭の中心は宮座、勝手、山若、山子であって、当日も農作業に従事して祭にかかわらない村人も多かった。一般の村人が祭に直接参加するひとつは、野神山祭場での儀礼の観客になることであるが、毎年同じ儀礼がくりかえされるため、例年その数はきわめて少ない。ちなみにいえば観客の多くは村外の観光客である。芋くらべ祭が滋賀県無形文化財に指定されて以後、日野観光協会は芋くらべ祭の観光宣伝にも力を入れてからである。宮座組織を基盤とする近江の多くの祭礼がそうであるように、芋くらべ祭も宮座が中心となり、勝手・山若・山子の協力を得て、村人を代表して神を祀るという性格がきわめて強いといえよう。

① 芋の飾りつけ

山若による芋の飾りつけの準備は、まず早朝の芋の掘り出しから始まる。山若全員がそろって前日に目星をつけておいた芋を掘り出す。その際にはかならず所有者の許可を得ることになっている。芋くらべ祭の芋に選ばれることは、所有者にとってはたいへん名誉なことなので、これを断ることはまずない。芋は東西とも二本ずつ掘り出す。一番長い芋を一番芋、二番目に長い芋を二番芋とよぶ。祭場で競べられるのは一番芋であるが、二番芋は一番芋にキズその他の不都合があった時のための予備である。しかし一番芋、二番芋ともに芋くらべ祭の帳面に書きとどめられて長く記録される。西谷の場合、掘り出した芋

は途中の洗い場で洗ったのちに、会所の近くの作業場に運ばれ飾りつけが始まる。洗うときには、親芋だけ残して子芋はすべて取る。

飾りつけは山若と大人の手で行われ、勝手は参加しない（勝手は宮座とともに、熊野神社社務所での供物の準備や、祭場の準備にあたる）。芋の飾りつけとは、前日のうちに山若が熊野神社裏の竹林から切ってきて、山子たちが時間をかけて磨いた太い孟宗竹（これを芋竹という）に、芋をくくりつけてさまざまな飾りをつける作業である。この飾りつけは微妙な細工の部分もあるので、宮座のメンバー以外の経験ある大人が指導しながら行う。西谷ではまず芋を太い縄で三カ所孟宗竹にくくりつけ、その三カ所にそれぞれ縄のかたまりを入れて玉をつくる。そのあと根元から芋の葉先にかけて、紙を巻いて作った飾りをつける。芋には祭場ではかりやすいように、あらかじめ丈尺（祭場で芋をはかる時にものさしの役割を果たす）で印をつける。これでもいいその年の芋の長さがわかる。これが終わると芋の長さが他人にわからぬようにするために、芋全体を数枚の芋の葉で覆う。飾りつけの最後には、丈尺を水引をつかって芋の根元にくくりつける。これで芋の飾りつけは完成である。東谷でも芋の飾りつけの作業が同時に行われるが、西谷と異なるのは丈尺を水引ではなく縄で芋にくくりつけることと、紙飾りが根元の縄の玉の部分だけにつけられることである（東谷の芋については、安井吉史一九五八、二〇頁参照）。芋の飾りつけが終わった芋は会所の奥に移されて、午後の祭の開始を待つことになる。山若はいったん家に帰って家で準備を行う。家で準備とは風呂に入り、

昼食をとって袴姿の正装に着替えることである。

芋の飾りつけの作業中にしばしば村人が様子を見にくる。この村人たちが相手の組の芋の長さの情報をもたしたり、また相手に情報を伝えることもあり、この面で緊張することもある。西谷で芋の飾りつけ作業中、ある村人がやってきて芋をながめわたした後、「東の芋が長いな」と言うと、作業を手伝っていた大人が、「東が長い。かほうか。西は一〇本ある」と答えるというやりとりがあった。このとき山若たちの間で一瞬緊張が走った。負けたかも知れない、という重苦しい雰囲気があったのである。このころから芋くらべ祭は、俄然現実的な競争の気配を濃厚に持ち始めることになった。

芋の飾りつけが終わった段階で、東西の山若三番尉どうして芋の長さについての情報交換が行われる。この年は芋の飾りつけの終了時と、午後一時の祭礼開始直前の二回にわたって情報交換が電話で行われた。最初は芋打ち（芋をはかること）の回数の打ち合わせで、東の三番尉が「四回でいいんちゃう、四回で勝ち負けをいう」と提案した。これは東の方が長いことを前提として、芋をはかる回数を四回で決着させようという提案であり、東が主導権をにぎろうとする動きであった。しかしこの時は話し合いがつかなかった。主導権争いの微妙な駆け引きが始まったのである。やむなく東の山若が「あとでもう一度電話してこい」といって、このときの電話連絡は終わった。午後一時前、こんどは西の山若三番尉が東に電話をかけて、つぎのようだった。「さっきのこと、どうなんの。ぼくらが長いんよ。もう一度はかりなおし

たらよ、もうちょっと長かったんよ。いや三〇⁽³⁾を越えたんよ、ほんま。やっぱり負けとうないしよ。東の方、計つてな。三一やろ。こっちのが長いんよ。ほんま」。おそらく午前の打ち合わせとは逆に、西の方が長いといはじめたのである。今度は西が主導権を握ろうとしたのである。このときも結局話し合いの決着がつかなかったが、西の山若が「宮さんで……」と喋って電話を切ったから、このあと熊野神社での儀礼の際に何らかの話し合いが行われたと考えられる。このように事前の打ち合わせにおける主導権争いの激しさは、この芋くらべ祭が単なる儀礼的な芋の長さの比較でないことをよく示しているといえよう。

② 供物と祭場の準備

熊野神社社務所と祭場では朝八時からオトナ（宮座）と勝手によって、供物と祭場の準備が始められた。この準備ではオトナと勝手に役割分担が決まっており、それぞれが役割にしたがった分業の形で作業が順調にすすめられる。この役割は社務所の掲示板にあらかじめ張り出される。一九八八年の場合は「祭例当日役割」として、山の放送準備・椅子・荷持、放送、警備、お宮、台所の五つの役割が書かれていた。山の放送準備・椅子・荷持は勝手と下位のオトナの役割で、放送、警備は下位から中位のオトナ、お宮は神主と副神主と上位のオトナの役割であった。また台所は今年オトナになったばかりの最下位のオトナの役割であって、この役のオトナは一日給仕役をつとめる。たとえば準備の途中でオトナはうどんを昼食に食べるが、これを用意するのも台所の役割である。放送とは芋くらべ祭の儀礼を解説したもので、

野神山でスピーカーを使って流されるものである。これは村外の観光客向けのサービスである。オトナの間で役割分担は宮座内部の年齢階梯的な序列にしたがっており、下位のオトナほど給仕や力仕事などの雑用が割り当てられている。

供物はこの日までにほとんどはあらかじめ用意されている。まず餅は八月三〇日に神主宅に宮座が集合して掲き終わっているし、カワセノハンギリ（祭場で東西間で交換される贈物。ハンギリに歌舞伎や昔話の場面を人形などで再現したもの）やセンバ、カモウリ、ササゲなどの煮物はオトナと山若の間で分担して用意した。これらはこの朝、それぞれ社務所に届けられる。したがってこの日社務所でつくった供物はブト（伏兎）のみであった。ブトはハンギリに芋の葉を敷いて、その上に水で解いた米の粉を厚さ一センチメートル程度のぼしてつく。できあがると短冊状に線をいれる。またオトナ、山若、山子の各家では供物として御鯉（米の粉でつくった魚の形をしたもの）がつくられ、この朝社務所にとどけられる。このほか祭場で使う神箸、神の膳、山若・山子の膳などが、この朝社務所に集められる。これらは観客に見えるように午前中、社務所の前面に並べられる。この時、『芋くらべ祭報告書』や芋くらべ祭のパンフレット、日野町の観光案内、記念スタンプ、御鯉の型（八台）もあわせてならべられる。またここの神饌などの受け付けも行われる。一二時近くなると、これらの供物と椅子などの祭の用具は勝手やオトナの手によって、自動車と天秤棒をつかって野神山の祭場に運びあげられる。

一方、神主は一二時近くになると白袴に黒烏帽子の正装に着替え、オトナをひとり従えて熊野神社本殿に参拝する。⁽⁹⁾この日、本殿にも酒そのほかの供物が供えられる。参拝のあと御神酒をさげる。この御神酒が午後の熊野神社社務所での儀礼に使われる。これで芋くらべ祭のすべての準備が整ったことになる。

(2) 熊野神社での儀礼

午後一時、東西の会所でオトナのたたく太鼓を合図に東西の芋が、山若、山子の手によってそれぞれ会所から熊野神社に運び込まれ、神前に供えられたのち、社務所で最初の儀礼が行われる。現在、社務所で行われている儀礼は、かつては東西それぞれの山若一番尉の家を当屋として別々に行われていた(坪井洋文一九八七)。したがって東西の当屋でこの儀礼を行っていた時代には、当屋から直接野神山の祭場に直行したのである。

西谷の場合、芋の行列は山若一番尉、二番尉を先頭にして、五、六人の山子が担ぐ芋とその他の山若、山子、勝手がつづく。このときには山子の「ソーライ、ワーライ」の掛け声はない。このとき山若一番尉は黒の素袍袴に烏帽子姿で、手には御幣と笏を持つ。これは明らかに神主の服装である。この着物は紋などの違いを除けば東西でほぼ同じであるが、山若一番尉の持つ笏は東西で異なる。東の笏は表に蝋、裏に百足が描かれ、西の笏は表に剣、裏に百足が描かれている。また西の笏は東にくらべて細く長い。西の山若は麻袴を着て、腰に大小の

刀を差し、印籠を下げ、足は黒足袋に黒い鼻緒の下駄を履く。これに対して東の山若の足は白足袋に白鼻緒の草履であり、両者の服装は対照的である。山子の服装は東西とも紺の着物でほぼ同じであるが、足は東が藁草履、西は下駄と異なる。帯は自由である。山若・山子の服装の限りでは、東は白、西は黒のカラーシンボリズムが認められる。

これに対して勝手の服装は、東西とも紋付・袴姿、黒足袋に黒鼻緒の下駄とまったく同じである。東西の会所から出た芋の行列は熊野神社に着くとそれぞれ拝殿の東側と西側を通って、本殿の東西の脇にそれぞれ供えられる。そののち山若・勝手は東西それぞれの作法で本殿を参拝する。山子たちはこのあとそのまま本殿にとどまって、芋の番をする。山若・勝手は社務所での儀礼に向かう。

社務所での儀礼は、図1に示すように、宮座(オトナ)の神主・副神主、山若・勝手および三人の区長(中山東、中山西、徳谷)が所定の位置に着いたあと始められる。社務所には数居を挟んで二つの部屋があり、それぞれに東西の参加者が着座する。神主と副神主が東西の端に向かい合うように座り、山若は一番尉と他の山若が向かい合う形となる。この位置は野神山の祭場での着座位置とほぼ同じである。

まず神主がさきに本殿から下げてきた御神酒を東西の銚子に酒を注ぐ。そののちこの年の儀礼の進行を司る西の山若二番尉が、「われわれの三三九度の盃をしてはいかがでござるか」と発声し、東の山若二番尉が「いかによろし」と受けて、それぞれの山若に順次いっぎをする。いっぎが終わると東西の最下位の山若(東は七番尉、西は

二、芋くらべ祭の儀礼

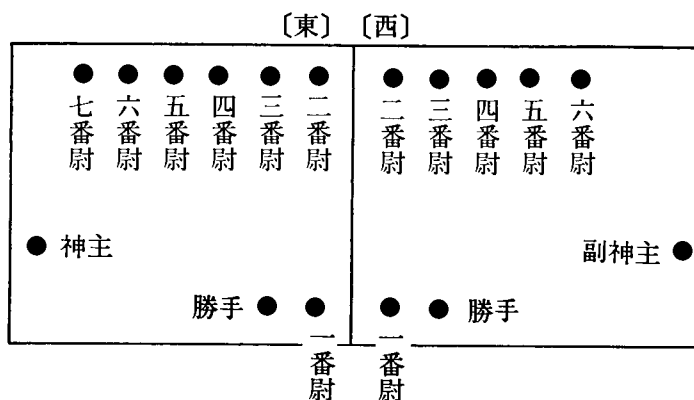


図1 社務所での着座（1988年）

六番尉）が銚子と三方に載せた盃をもって、それぞれ一番尉から順に山若全員に酒を注いでまわる。東の六番尉と西の五番尉は、この給仕役に酒を追加する役をする。この儀礼では東西それぞれの所作がやや異なるとともに、少しずつ時間をずらしてこれを行うのが特徴となっている。この儀礼は現在は熊野神社の祭神との直会の形式をとっているが、かつて東西の当屋で行われた時代には、東西のそれぞれの山若だけの直会の意味であったと考えてよいであろう。

社務所での儀礼はこの三三九度の盃のみであって、これが終了するとただちに芋の行列は野神山に出発する。その際にはオトナが観客に御神酒をふるまう。神主・副神主・台所などの役のオトナは野神山には登らず、社務所で待機して祭場での儀礼の終了を待つことになる⁽¹⁰⁾。

東西の芋の行列は本殿を出て、来たときと同じように拝殿のそれぞれの側を通って神社を出て、東西それ

ぞれの村の道を経て野神山に向かう。野神山への道は東の方が平らな道で短いのに対して、西は道のりも長く坂も急である。野神山への行列でも先頭は山若一番尉である。芋を担ぐ山子がこれにつづくが、行列の順序は厳格ではなく、行列中にまちまちになることもある。山子にとっては芋は重いので、肩にタオルをあてながら交代で芋を担ぐ。野神山が近くなると「ソーライ、ワーライ」の掛け声を何度もかけながら山に登る。西谷の野神山の坂はとくに急であって、雨あがりの時の芋くらべ祭では大変である。芋くらべ祭の祭場は高さ五〇メートルほどの野神山の頂上にあり、東西、南北それぞれ二〇メートル程度の狭い空間である。祭場は木々に囲まれ、小石が敷きつめられており、祭場にふさわしい空間となっている。八月二一日からの準備で、祭場はすっかり整えられている。野神山に到着すると菱垣で囲まれた祭場のそれぞれの入り口から芋が運びこまれ、神木に近い木にそのまま立てかけられる。芋が入ると祭場の入口は閉鎖され、山若・山子は履物を脱いで、所定の位置に着座して祭の開始を待つ。

(3) 野神山祭場での儀礼

① 野神山祭場の構造

一九八八年の野神山祭場での儀礼は午後二時一五分すぎに開始され、四時四〇分頃まで延々二時間半近くにわたって行われた。普通の年はほぼ二時間で終わるが、この年は芋くらべの勝負がなかなかつかずに長時間を費やした。

られている。祭場全体は神聖な祭祀空間であり、関係者以外は準備の段階から立ち入ることができないばかりでなく、芋くらべ祭の儀礼の際にも祭場内に入る者はすべて、履物を脱いで祭場に入らなければならない。女性は祭場内に立ち入ることはできない。観客は菱垣の外側から芋くらべ祭を見る。祭場の奥の左右には、運びこまれた東西の芋が木に立てかけられている。祭場中央には芋石とよばれる五〇センチ

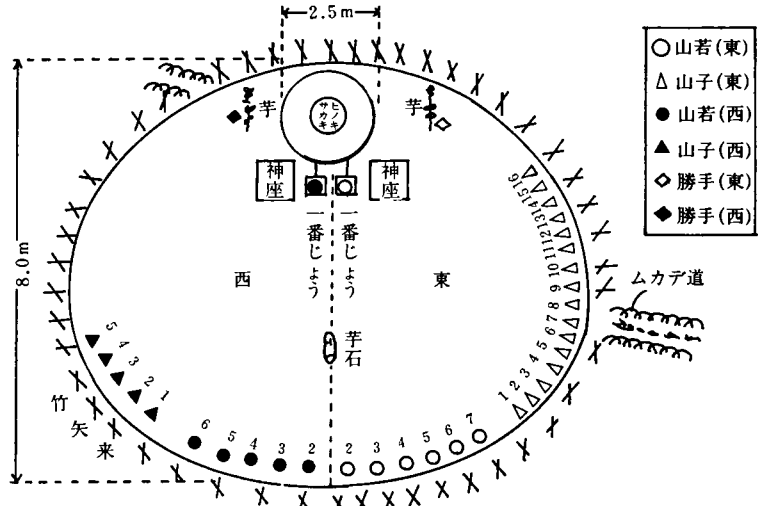


図2 野神山祭場の略図(坪井洋文1987 篠原徹作図)

野神山の祭場における山若、山子、勝手などの着座位置と神座などの位置は図2に示すとおりである。菱垣で囲まれた祭場は正面にヒノキとヒモロギの神木があり、祭場の中心はこの神木である。この神木の周囲はこんもりと小石が積みあげられ、また祭場内部には石が美しく敷きつめ

ほどのやや大きめの石がおかれている。この石は東西の芋を競べる際に、それぞれの芋を合わせる石であって、東西の境界のシンボルでもある。この芋石を境に祭場は東西に明確に区分されている。方角でいえば正面は北にあたるから、左が西谷、右が東谷と東西の方角にあわせてそれぞれの区域が設定されている。この東西の境界線はきわめて重要であって、八月末から始まった祭場の準備でもこの境界は絶対に越えてはならないとされている。また祭場の東西の境界の延長が地理的にも、中山の集落の東谷と西谷の境界になっている。

正面の神木の前の左右には東西の神座がある。東西とも野神をここに迎えて芋くらべ祭を行うのである。神座は東西とも平らな石を約五〇センチの高さに四角く積み上げ、その上の四隅に樫の木を立てて、天には竹で編んだ棚がおかれている。東は女神、西は男神であるという観念から、東の神座の棚は篠竹(女竹)を使い、西は真竹(男竹)を使って作る(安井吉史一九五八)。棚の四隅には東はサカキ、アセビ、ビシヤコ、フラスウの枝が差され、西はアセビ、ビシヤコ、フラスウを一束にしたものが差されている。ここでも東西は差をみせるのである。神座の天の棚からはそれぞれ金石(カナイシ)、もしくは吊り石とよばれる約二〇センチほどの大きさの石が吊り下げられている。この吊り石の意味は明らかではないが、神の存在がこれによって象徴されているようにも考えられる。⁽¹⁾ 神座の内側に東西の一番尉の座るひとまわり大きい石がある。これが一番尉の座である。一番尉は神座の脇に、他の山若や山子と対座する形で座ることになる。⁽²⁾ この座

席の位置はこの芋くらべ祭における一番尉の位置と役割を象徴しているように思われる。すなわち一番尉は野神に向かつては、村人や山若の代表であり、逆に山若や村人に向かつては野神の代理なのである。

一番尉に向かい合う形で他の山若・山子がそれぞれの石の上に座る。

山若の座る石は大きく、中央の境界線に近い方から順に二番尉、三番尉、四番尉と座る。したがって東西の二番尉が隣り合せになることになる。

一九八八年の山若の数は、東は七人であったが、西は一人少なく六人であった。数え年一六歳以上の若者が六人しかいなかったからである。⁽¹³⁾ 山若につづいて山子がやはり一番尉から順に座る。山子の座

る石は山若に比べて小さめである。この年の東の山子は一人、西は一

〇人であった。勝手や祭場で儀礼の進行を補佐するオトナは神座に近い奥まったところに控える。ここには午前中に運び込まれた供物や道具なども置かれている。

一九八八年の芋くらべ祭では、普段の年を上回る多くの観客で菱垣の外側は埋まり、普通の年の芋くらべ祭には見られない活気が祭場に満ちていた。これは観光客が多かったこともあったが、「映画をとる」ということで中山の村人の観客が多かったことが、最も大きな要因のように思われた。そのほかわれわれのスタッフ以外にも、琵琶湖放送(BBC)などテレビ局や京都新聞、読売新聞などの新聞社の取材も多かった。なかにはNHK教育テレビの子供番組の取材もあった。

②祭場での儀礼

二時すぎから始まった芋くらべ祭の儀礼は決められた順序にしたが

って行われる。祭場の儀礼については、これまでの芋くらべ祭の諸報告に詳しく述べられているので、ここでは一九八八年の芋くらべ祭が実際にどう行われたかを中心に分析したいと思う。一九八八年の芋くらべ祭における儀礼単位の順序は以下の通りであった。これは各儀礼の開始に先立っていつぎが行われるものをひとつの独立した儀礼単位として考え、その順序を示したものである。

〔1〕水廻しをすること

〔2〕神を拝すること

〔3〕芋を供えること

〔4〕神を拝すること

〔5〕神の膳を供えること

〔6〕神を拝すること

〔7〕神の三三九度の盃をすること

〔8〕神を拝すること

〔9〕われわれの膳を出すこと

〔10〕カワセノハンギリを出すこと

〔11〕神を拝すること

〔12〕神の膳を下げること

〔13〕神を拝すること

〔14〕われわれの膳を下げること

〔15〕われわれの三三九度の盃をすること

〔16〕一番一番の酒肴を出すこと(東谷)、一番二番の流れ盃をする

こと(西谷)

〔17〕芋打ちの酒肴を出すこと

〔18〕吊り石を切ること

〔19〕神の角力を取る

〔20〕芋を出すこと

〔21〕芋を打つこと

〔22〕東西の芋を取りかえること

〔23〕神を拝すること

〔24〕山をおりること

祭場の儀礼は東西の二番尉の進行で行われる。毎年交代でどちらかが進行役となって儀礼が進められる。一九八八年は西二番尉の進行で行われた。儀礼はすでに記したように二四の儀礼単位に分かれており、ひとつひとつの儀礼は西二番尉の発声で行われる。「○○をしてはいかがでござるか」と西二番尉が発声すると、東二番尉が「いかによろし」とこれを了承し、東西それぞれの山若全員に儀礼を行うことをいいつぐ。そのあとそれぞれの儀礼の役割を割り当てられた山若が祭場の中央に出て、儀礼をとり行うのである。次の儀礼の前にはいったん全員がもとの席に着座したあと、また西二番尉の発声でつぎの儀礼が行われるのである。儀礼における勝手の役割は、それぞれの儀礼が円滑にすすむよう供物を整えたり、道具の準備を行うことである。オトナは祭場の儀礼では中心的な役割を果たすことはまったくない。ここでの儀礼の主役はあくまでも山若である。ここでは個々の儀礼がど

う行われ、何を意味するかを分析してみよう。

〔1〕水廻しをすること

水廻しとはこれからの儀礼に先だって口をすすぎ身体を清める儀礼である。まず西二番尉が「水廻しをしてはいかがでござるか」と発すると、東二番尉が「いかによろし」と答える。すると東西の二番尉が正面に向かって大声で「水廻しをすること」と言う。これは山若一番尉に儀礼の開始を告げているものとみられる。こののち隣の三番尉に「水廻しをすること」と同じことを言う。これがいいつぎの開始で、このあとつぎつぎにいいつぎ、山若全員に儀礼の開始を周知させる。最下位の山若は隣の山若がいいつぎと、軽くうなずいて、これでいいつぎが終わる。いいつぎのやり方は以後の儀礼でもまったく同じである。いいつぎが終わると一番下位の山若が前に出て、左手に盃を載せた三方、右手に水差しをもって、まず中央の芋石付近で対面したあと、それぞれ山若一番尉に水を注ぎに行く。山若一番尉の前では蹲居して、三方を一番尉の前に置き、両手を大きく広げ右手で水を注ぐ。一番尉が終わるとひるがえって二番尉以下の山若に水をつぎつぎに注いで行くが、東西はやや時間をずらして行う。東谷では水を注がれると、各山若は軽く口をつけ、盃に残った水は石の上にこぼして盃を三方にもどすが、西谷は口に入れた水ですすいだあと、水を石の上に吐き出す。ここには女性的な東谷と、男性的な西谷の差が認められる。最下位の山若の水廻しの給仕はそのすぐ上の山若が行う。

二、芋くらべ祭の儀礼

〔2〕神を拝すること

神を拝するとは文字通り、野神に参拝することである。この所作は祭場の儀礼の重要な区切りごとに行われる。西二番尉がまず「神を拝してはいかがでござるか」というと、東二番尉が「いかにもよろし」と答えて始まる。いいつぎの方法はすべて水廻しと同じであるので、以下では記述を省略する。いいつぎが終わると一番尉を含めた東西の山若全員が神前に進み出て、わずかに後ずさりするように三步足踏みしたあと、蹲居し、東西それぞれの方法で参拝する。東谷は蹲居して扇子を前に置き、柏手を二度打ったあと一礼して参るのに対して、西谷はややうしろに蹲居したのち扇子を前におき、両手を広げて大きく後ろ回しするのみである。これで神を拝するのである。終わると東西とも扇子を取って、もとの位置に着座する。一九八八年の芋くらべ祭では、この「神を拝すること」の儀礼があわせて七回行われたが、すべてこの形式であった。

〔3〕芋を供えること

芋を供える儀礼は祭場に運び込んだ東西の芋を、あらためて神前に供えることである。西二番尉がまず「芋を供えてはいかがでござるか」というと、東二番尉が「いかにもよろし」と答えて始まる。いいつぎが終わると山若三番尉以下が出て、祭場の奥の木に立てかけてあった芋から、丈尺と芋全体を覆っていた芋の葉をとりのぞいて一番芋だけが見えるようにする。これは東西とも同じである。このとき芋の根元につくった玉を解くことになっているが、これは映像では確認できな

かった。つぎに丈尺を持った東西の三番尉が対面して、両手で持った丈尺を高く頭上に掲げたのち、神座の前に進み出る。神座の前で三步下がったのち、手を大きく広げてまず後ろ回しにし、つぎに前回しにしたあと、神座の棚の上にそれぞれの丈尺を供える。供えたあとは両手を後ろ回しにしてこの儀礼を終わり、もとの席にもどる。このとき芋の位置はまったく動かさない。したがって芋の全体を神に見せることと、丈尺を供えることが芋を供える意味であると思われる。

〔4〕神を拝すること

この儀礼は〔2〕神を拝すること、とまったく同じ所作をくりかえす。

〔5〕神の膳を供えること

これは用意した竹の膳、箸などの用具とブト、餅、センバ、カモウリ、ササゲ、シロモチ、御鯉などの供物を神に供えることである。西二番尉がまず「神の膳を供えてはいかがでござるか」というと、東二番尉が「いかにもよろし」と答えて始まる。このあと山若全員が祭場中央に進み出て神に膳を供える。山若たちはそれぞれ半々に分かれて向かい合い、神座のうしろから勝手が差しだすひとつひとつの供物を、手渡しでつぎつぎに渡し（これをチドリという。詳細は坪井洋文一九八七参照）、最後は一番尉が神座の棚に供える。手渡しする所作は東西でわずかに異なる。東谷では、まず膳は各山若が両手で目よりやや上の位置で持って次の山若に渡していく。渡すとき双方の山若が一歩ずつ左右に身体を動かして渡す所作に東谷の特徴がある。最後は一番尉が神座に進み出て三步下がったのち、右手をはじめは後ろに回し、

つぎは前に回したあと神座の棚の上に膳を供える。供え終わったあとは両手を大きく広げて一回後ろ回しにする。つづいて同じように手渡しされてきたハンギリに入った餅を両手に持って手渡ししたあと、一番尉が神前でさきほどと同じ所作をし、箸で（実際には手でつかんで）棚の上の膳に供える。こうしてつぎつぎに供物を供える。

一方、西谷もまず膳と箸、つぎに餅を供え、そのあとさまざまな供物を供える。西も供物を目の上の高さで両手に持って渡していくが、東とちがって渡す方の山若が少し進み出るのみで、受け取る山若は動かずに受け取る。神に供えるときの一番尉の所作は東とはほぼ同じで、とくに男性的な所作ではない。ただしハンギリも持ち方は東が両手で持つのに対して、西は肩にのせて渡していく。このときの供物の順序については映像では確認できない。

〔6〕神を拝すること

この儀礼もまた〔2〕神を拝すること、とまったく同じ所作をくりかえす。

〔7〕神の三三九度の盃をすること

これは神に酒を献ずる儀礼である。この儀礼は西二番尉がまず「神の三三九度の盃をしてはいかがでござるか」というと、東二番尉が「いかにもよろし」と答えて始まる。いいつぎが終わると、東西の山若の一番から三番までが祭場に出てこの儀礼を行う。東西の山若一番尉が芋石を挟んで背中あわせに立つ形となり、東ではまず三人の山若がそろって祭場中央に進み出る。手に三枚の盃を持った一番尉が反転

して二番尉と対面し、柄杓のついた銚子を持った二番尉から酒を注がれる。二番尉は三步足を踏んだのち、右手で銚子を持ちながら手を大きく二回広げたあと（この所作をリキマという）、一番尉に酒を注ぐ。釣柄の銚子を持った三番尉も二番尉の動きにあわせて同じ所作をする。二番尉はこの所作を二回くりかえしたあと、後退して三番尉と向かい合い、手を広げる所作をしたのち三番尉から酒を注いでもらう。そののち二番尉は前と同じ所作ののち、一番尉に酒を注ぐ。一番尉はこうして二番尉から三回酒を注がれた後にはじめて神座に向かい、後退ぎみに三步足を踏んだのち、右手をはじめは後ろから前に、つぎに前から後ろに回したあと神座に酒を掛ける。酒を掛けたあと一番尉は右手を後ろから前へ一度回す所作をする。これで一回目の神への盃は終了する。このあと一番尉は反転して、ふたたび二番尉と向かい合い、酒を注いでもらう。そして前と同じ所作を繰り返す。結局このような所作を三回くりかえして行う。すなわち東では二番尉が一番尉に酒を注ぐのは合計九回であるが、一番尉が神座に酒を掛けるのはわずかに三回だけとなる。

一方、西谷では最初、一番尉は祭場中央に盃を持たずに立つ。二番尉と三番尉はそろって一番尉の前に進み出て、まず三方に載せた盃を一番尉に渡す。そのあと二番尉が柄杓のついた銚子を左から右に振り、一番尉に酒を注ぐ。すると一番尉は神座に向かい、後退ぎみに三步足を踏んだのち、右手をはじめは後ろから前に、つぎは前から後ろに回したあと神座に酒を掛ける。この所作は東と同じである。西では二番

尉から酒を注がれるたびに一番尉は神座に酒を掛けに行く。掛け終わると一番尉はふたたび二番尉と対面して、また酒を三度注いでもらう。

注ぎ終わると、ふたたび神座に酒を掛ける。この間釣柄の銚子を持った三番尉はそのまま動かない。そのうち二番尉は反転して三番尉と向かい合い、双方が銚子を左右に振る所作をしたのち、三番尉から酒を受ける。すると二番尉はふたたび反転して一番尉に酒を注ぎ、そして一番尉は神座に三回目の酒を掛ける。さらにこの後、一番尉はあわせて六回、二番尉から酒を受けて、それを神座に掛ける。西谷では一番尉が合計九回、二番尉から酒を受け、そのたびごとに神座に掛けるから、全部で九回神座に酒を掛けることになる。東の方が早くこの儀礼を終了すると、西が終わるのを待たずして山若は席にもどる。やがて西もこの儀礼が終わって席にもどる。これでこの儀礼は終了する。この時点で祭場の礼儀が始まってから、すでに三〇分を経過した。この儀礼では一番尉は神に酒を供える役であり、二番尉、三番尉はその給仕役である。

〔8〕神を拝すること

ここでの神を拝する儀礼もまた〔2〕神を拝すること、とまったく同じ内容である。

〔9〕われわれの膳を出すこと

これは山若、山子の膳を出す儀礼である。すでに神には膳が出されているから、これで神と村人とは共食の直会を行うと考えられる。この儀礼もいいつぎで始まる。西二番尉がまず「われわれの膳を出してはいかがでござるか」というと、東二番尉が「いかにもよろし」

と答え、山若全員にいいつがれる。われわれの膳を出すのは東は四番

尉、五番尉、六番尉の三人、西は五番尉、六番尉の二人である。まず膳を山若全員に配ることから儀礼が始まる。東西の山若がひとりずつ膳を一枚、目の高さに持って出て祭場の東西の端で向かい合い一緒に祭場中央に進み出て、まず一番尉の前に進む。一番尉の面前に進むと、例によって三步下がりが気味に足を踏んだあとと蹲居する。ここまでは東西とも同じ所作であるが、ここからはやや異なる。東は蹲居したあと膳を一番尉の前に置き、両手を大きく広げて後ろから前にまわすが、西は左膝をつき左手で膳を差し出し、右手を後ろ回しに一回まわしたのち、前のめりになるように両膝をつく。つぎに二番尉にも同じようにして膳を配り、さらにつぎつぎに山若全員に膳を配る。前のめりになるような西谷の所作がここでは目立つ。膳を配り終わると、つぎに箸を全員に配る。この際も左手に箸を持った東西の山若が芋石付近で対面し、まず一番尉に箸を配る。このとき両者は一番尉の前進んで三步足を踏んだのち、蹲居して右手を後ろから大きく前に回す。つぎに手を前から後ろにまわしたあと、一番尉の膳の上に箸を載せる。載せ終わると両者とも再び右手を後ろ回しに大きく回すが、西だけはさらに前回しにもう一度手をまわす。つづいて二番尉以下に同じような所作をして箸を配る。

このあとはいよいよ神の膳に供えたものと同じ餅・御鯉・ブト・ササゲ・カモウリ・センバが山若に配られる。最初に餅が配られるのは東西とも一緒であるが、そのあとは東が御鯉であるのに対して、西は

ブトが配られ、東西で順序が異なるが、すべての順序については映像では確認できない。このときの所作も箸を配るときの所作とまったく同じであって、配り終わったあとの所作が東西でやや異なり、西谷は前のめりになるような姿勢で食物を配る。また西谷の所作はやや荒々しく、配り終わった膳は食物が膳から飛び出すものもあるなど、乱れがちである。山若全員に膳を配り終わるまでに時間がかかるので、この間勝手が山子たちの膳を出す。山子にも山若と同じ物が配られる。しかしながら、こうして出された食物は祭場では食べられることはなく、また食べる所作も行わない。

[10] カワセノハンギリを出すこと

カワセとは中山では交換を意味するから、カワセノハンギリとはハンギリに入れた贈物の交換の儀礼である。またこの儀礼では相手から贈られたハンギリに載せられた御鯉を、山若たちに配り合う儀礼でもある。つまりこれは東西の山若どうしの共食の直会を意味すると考えられる。いままで東西は別々に儀礼を進めてきたが、この儀礼は東西が関係するはじめての儀礼でもある。例によって西二番尉がまず「カワセノハンギリを出してはいかがでござるか」というと、東二番尉が「いかにもよろし」と答え、山若全員に「カワセノハンギリを出すこと」といいつがれる。この儀礼を行うのは東西の山若四番尉と五番尉である。まず東西の四人の山若が祭場の東西の端に扇子を前に置いて蹲居する。一九八八年には最初に西谷から東谷にハンギリが贈られた。これはこの年が西谷が主役となって祭が行われる年にあたっていたか

らであり、これは一年交代で代わる。

西谷の勝手が祭場に出したハンギリを、西の二人の山若が前後に振りながら東西の境界線を越えて東の山若の前まで持って行く。境界線を越えるときには軽く頭を下げて会釈をする。東の山若と向き合い三歩足踏みをしたのちハンギリをその前に置いて蹲居し、四人の山若が両手を大きく広げて後ろ回しに一回まわす所作をする。これはハンギリの受け渡しの儀礼的所作と考えられる。このうち西の山若はふたたび境界線を越えて、西に戻る。このときは境界線を越えても会釈はしない。つまり西の山若は相手の領域に入り込むときに会釈をするのである。ハンギリを受け取った東の山若はこれを東の一番尉の前に持って行っていったん置き、みずからもそこで蹲居し両手を後ろから回す所作をする。東一番尉は西のハンギリをながめて、「みごとにできましてござる」と褒めたたえる。東の山若はふたたびこれを二人で持って、勝手のところに運ぶ。勝手はハンギリに載せてある御鯉を重箱に移すと、この重箱を山若二人が持って東の山若全員に御鯉を配る。配るときの所作は、われわれの膳を出すときの所作とまったく同じである。配り終わると、東の山若二人が空になったハンギリを持って境界を越えて西に行き、西の山若の前まで持って行く。境界線を越えるときはかなり深く頭を下げる。そのあと前とおなじように三歩足踏みをしたのち、ハンギリを西の山若の前に置いて蹲居し、そのあと両手を大きく後ろから前にまわす。このとき東の山若二人は右手に扇子を持ち、その扇子を左足の前に突き立てるような所作をする。これはいま

までになかった所作である。これは西に対するお礼の意味であると理解できる。これを終えると東の山若は東に戻る。返されたハンギリは西の山若の手で下げられる。

つぎに東から西へのハンギリの贈与があるが、これは西から東への贈与と同じような順序と所作で行われる。少し異なるのは東の山若が西にハンギリを運ぶとき、西の山若の前に蹲居し、両手を後ろ回しにする所作をするが、そのとき東の山若は右手に持った扇子をつきたてのような所作をすることである。この所作は西のハンギリを返しに行くときにも行われており、このような場合の東の山若の定型的な所作と考えられる。カワセノハンギリが終わった時点で、時刻はすでに開始から一時間が経過している。

〔11〕神を拝すること

この饗礼もまた〔2〕神を拝すること、とまったく同じ所作をくりかえす。

〔12〕神の膳を下げる

これは神と山若・山子との共食が終わったので、山若全員でまず神の膳を下げる饗礼である。西二番尉がまず「神の膳を下げてはいかがでござるか」と発すると、東二番尉が「いかにもよろし」と答え、山若全員に「神の膳を下げる」といいつぐ。いいつぎが終わると、さきに神の膳を出したときと同じように山若全員が祭場中央に出て並ぶ。山若一番尉が神座の前に進み、両手を大きく広げて後ろ回しに一回、前回しに一回まわしたあと、神座の棚の上の神の膳を下げる。そして

それを前と同じように、山若の間につきつぎに手渡して下げる。この饗礼はきわめて短時間のうちに簡単に終わる。

〔13〕神を拝すること

この饗礼もまた〔2〕神を拝すること、とまったく同じ所作をくりかえす。

〔14〕われわれの膳を下げる

これは神の膳を下げたあとの山若・山子の膳を下げる饗礼である。まず西二番尉が「われわれの膳を下げてはいかがでござるか」と発すると、東二番尉が「いかにもよろし」と答え、山若全員に「われわれの膳を下げる」といいつぐ。これは東西の山若五番尉と六番尉が行う。東西の山若が芋石の近くで対面したあと、いずれもまず一番尉の前に進み、例によって三歩足踏みをしたのち、東は両手を大きく広げて後ろ回しに一回、前回しに一回まわしたあと、両手で一番尉の膳を持ち上げて撤する。これに対して西は左手を膝の前につき、右手だけを後ろから前に一回まわしたあと、両膝をつき前のめりになるような形で両手で膳をもちあげて下げる。こうして東西とも二人の山若が交互に山若全員の膳を撤する。下げられた膳は勝手のところ運ばれ、勝手がそれを風呂敷に包む。山子もそれぞれ自分で持参した風呂敷で膳を包んで、祭が終わったあと各自が持ち帰る。

〔15〕われわれの三三九度の盃をすること

これは熊野神社社務所でも行われた山若たちの酒宴の饗礼である。膳を撤したあとの酒宴は一見奇異に思えるが、芋くらべ祭では膳を撤

したのちに三三九度の盃が交わされる。ここでは共食と酒宴は別の概念でとらえられているのかも知れない。まず例によって西一番尉が「われわれの三三九度の盃をしてはいかがでござるか」と発すると、東二番尉が「いかにもよろし」と答え、山若全員に「われわれの三三九度の盃をすること」といいつぐ。この儀礼もまた東西の山若五番尉と六番尉の給仕で行われる。盃を受けるのはそれぞれの一番尉と二番尉である。東西の五番尉が盃を載せた三方を左手に、柄杓のついた銚子を右手にもって、例によって対面したのち一番尉の前に進む。このとき六番尉も銚子を持って祭場にでるが、しばらくの間は中央で蹲居して待機する。一番尉の前に進んで山若五番尉は三步足踏みしたあと、三方を一番尉の前に置き、柄杓を振ったあと一番尉に酒を注ぐ。このとき東の山若は両手を大きく広げたあと酌をするが（これをリキマという）、西の山若は銚子を左右に振るだけである。また東は蹲居のまま酒を注ぐが、西は左膝をついて注ぐ。双方ともこれを二回くりかえす。二回目が注ぎ終わると山若五番尉は立って反転し、それぞれ六番尉と向かいあって六番尉から酒を注いでもらう。

このときの所作も東西で異なる。東は立ったまま向かいあって両者が三步足踏みをしたのち蹲居し、五番尉・六番尉とも二度、両手を広げたのち酒を注ぐ。注ぎ終わったあとは両者とも、一回両手を広げる所作をする。これに対して西は蹲居したまま向かい合い、五番尉・六番尉とも左膝をついた姿勢で酒を注ぐ。酒を注がれた五番尉はふたたび一番尉の前に出て、前と同じように酒を注ぐ。東の一番尉はこのとき

はじめて盃の酒を飲むのに対して、西の一番尉は注がれるたびにこれを飲む。飲み終わると三方を前に差出し、それを五番尉が左手で持ち上げ、つぎに反転して二番尉に酒を注ぎに行く。二番尉に対しても一番尉と同じ所作で酒を注ぐ。二番尉もまた東は三回酒を注がれたところでこれを飲むが、西は毎回飲む。このあとふたたび双方とも一番尉と同様に酒を注ぎ、終わると二番尉に酒を注ぐ。さらにもう一度同じ所作をくりかえす。これで合計三回一番尉と二番尉に酒を注ぐことになる。これが三三九度の盃である。一番尉二番尉への三三九度の盃が終わると、三番尉以下の山若に対しても一度ずつ酒が注がれ、これを各山若がのむ。これでわれわれの三三九度の盃の儀礼は終了する。この間の所作を通じて、いくぶん西谷の方が荒々しい気配であり、酒を石の上にこぼしたりするが、東はそのようなことはない。この儀礼が終了した時点で、祭場での儀礼開始以来すでに一時間半が経過した。

〔16〕一番二番の酒肴を出すこと（東谷）、一番二番の流れ盃をする

こと（西谷）

この儀礼は山若の酒宴の儀礼のひとつであり、東西の山若一番尉、二番尉に酒と肴をふるまう儀礼である。直前の「われわれの三三九度の盃」も一番尉、二番尉中心に酒が出されたが、この儀礼も同様である。「野神の所在（一名芋競べノ神事）ノ例祭ノ情況」なる文書によれば（岡本信男一九八九）かつては一番尉、二番尉は神事掛とされ上座につき素袍大紋袴すがたであったとされ、一番尉、二番尉は他の山若とは別格の位置におかれていた。現在はこれが一番尉だけになってい

るが、この儀礼はかつての一番尉、二番尉の特権的地位を象徴する儀礼であると考えられる。まず西二番尉が例によって「一番二番の流れ盃をしてはいかがでござるか」と発すると、東二番尉が「いかにもよろし」と答え、山若全員にいつぐ。しかしここではいままでのいつぎと異なり、東と西では違ったことばでいつがれることが注目される。西は発声とおなじように「一番二番の流れ盃をすること」といつがれるのに対して、東は「一番二番の酒肴を出すこと」といつがれるのである。発声と西のいつぎが一緒になったのは、この年が西の主役で儀礼が行われたからである。東が主役であれば、東のことばで発声も行われるのである。このようにいつぎの言葉が東西で異なるのはこの儀礼だけである。

いつぎが終わると東西の三番尉、四番尉が中央に出て給仕役となり、酒と肴を一番尉、二番尉にふるまう。まず東西の三番尉が長い柄杓のついた銚子を右手に、盃を載せた三方を左手に持って、まず中央の芋石付近で対面したあと一番尉の前に進み出る。肴である重箱の入ったササゲを盛った四番尉がこれにつづく。一番尉の前まで進むと三歩足踏みしたあとと蹲居して、三方を一番尉の前に置き、酒を一番尉に注ぐ。四番尉も目の高さに重箱を上げて、顔を伏せながら、三番尉の後ろに蹲居して待機する。酒を継ぐときの所作が東西で異なるが、その差はわれわれの三三九度の盃の場合とまったく同じである。つまり東は蹲居のままキマという両手を大きくまわす所作をするのに対して、西は左膝をつきながら銚子を振って酒を注ぐのである。また東は

一番尉が一度酒を口に入れたあと、一番尉が扇子でコンコンと三方の縁をたたくと、ササゲを持った四番尉が蹲居の姿勢のまますばやく一番尉のところまできて、右手を最初は後ろ回し、つぎは前回しにしたあとササゲを箸でとって三方の上に載せる。終わったあと一度右手を後ろ回しにして、もとの位置に戻る。一番尉がこのササゲを食べることはない。これが終わると反転して二番尉のところに向かい同じ所作をくりかえす。

これに対して西は三番尉が一番尉に二度酒を注いだあと、一番尉が三方をたたく。すると東と同じようにササゲを持った四番尉が一番尉の前に進み出て、右手を最初は後ろ回し、つぎは前回しにしたあとササゲを箸でとって三方の上に載せる。終わったあとまた右手を二度まわして、もとの位置に戻る。そのあとさらに三番尉が一番尉にもう一度酒を注ぐ。これが終わると、つぎは二番尉のところに行って同じ所作をくりかえす。この儀礼では酒を注ぐ度数と所作、および肴を出したあとの四番尉の所作が東西で異なっている。また四番尉が蹲居したまま肴を出す所作はこの儀礼に独特の所作である。

〔17〕芋打ちの酒肴を出すこと

これは芋を打つ山若三番尉に酒をふるまう儀礼である。この儀礼は山若の酒宴が終わって、いよいよ芋くらべ祭のクライマックスである芋打ちの開始を告げる儀礼である。儀礼開始からすでに一時間三〇分を経過してようやく、芋打ちが始まるのである。延々とつづく儀礼にやや飽きてきた観客や山子の間にもいよいよ本番の緊張が走る。

まず西二番尉が「芋打ちの酒肴を出してはいかがでござるか」と発すると、東二番尉が「いかにもよろし」と答え、山若全員に「芋打ちの酒肴を出すこと」といいつぐ。三番尉に酒を注ぐ役は東は四番尉、西は六番尉である。給仕役の山若が三方に入れた盃と銚子をもって中央の芋石に向かって進み、対面したあとそれぞれの三番尉の前に進み出る。三方をよく見ると、東の三方には紙が敷かれて上に盃が載せられているが、西には紙がなく、じかに盃が載せられているという違いがある。酒を注ぐ所作はわれわれの三三九度やこの儀礼の直前の一番二番の酒肴を出すことと全く同じである。すなわち東は三番尉に盃を差し出したのち、四番尉が両手を大きく広げたあと両手を後ろ回しに一回まわし、さらに両手を大きく広げた(リキマの所作)あと三番尉に酒を注ぐ。注ぎ終わるとまた両手を大きく広げて後ろ回しに一回まわす。この所作が終わると三番尉が盃を口に運んで酒をのむ。このとき肴は何もない。⁽¹⁴⁾のみ終わったあと盃をやや前に押し出すと、四番尉が二回目の酒を注ぐ。こうした所作が東では八回くりかえされる。最後の方では三番尉が押し戻した三方を四番尉がさらに前に押し出して、三番尉に酒をすすめていた。三番尉が三方を押し戻す所作が「もう酒はいらない」という意思表示であると思われる。一方、西では左膝をつきながら銚子を振って注ぐが、西ではこのとき一四回酒が注がれた途中で酒が足りなくなり、勝手が二回ほど酒を銚子に追加した。注ぐ所作は西の方がやはりやや荒々しく、酒が盃からこぼれ落ちることもしばしばであった。

〔18〕吊り石を切ること

これは東西の神座に吊してある石を切り落とす儀礼である。まず西二番尉が「吊り石を切ってはいかがでござるか」と発すると、東二番尉が「いかにもよろし」と答え、山若全員に「吊り石を切ること」といいつぐ。吊り石を切るのは東西の四番尉の役割である。この二人の山若は祭場中央に進み出て芋石のところで対面したあと、それぞれの神座に向かう。神座の前で三歩下がりがぎみに足踏みしたあと、両手を大きく広げてまず後ろ回しに一回、前回しに一回まわす。そののち神座の四隅の上方につけてある木枝のうちひとつだけを残して取り、小刀を取り出して吊り石を吊ってある紐を切る。このあと山若は両手を後ろ回しに一回まわして神座を去る。切り落とされた吊り石は、東西の山子の四番尉が神座にかけよってこれを取り、座に持ち帰る。この吊り石が何を象徴し、この時点でなぜ切り落とすのか、またその際、神座の四隅の木枝のうちなぜひとつだけを残すのかなど、この儀礼にはまだその意味が明らかでない部分が多い。

〔19〕神の角力を取る

これは山子の角力を神に奉納する儀礼である。行司役をつとめるのは東西とも山若三番尉である。まず西二番尉が例によって「神の角力を取ってはいかがでござるか」と発すると、東二番尉が「いかにもよろし」と答え、山若全員に「神の角力を取る」といいつぐ。いづきが終わると東西の山若三番尉が祭場に進み、芋石をはさんで対面したあとそれぞれの神座に向かう。神座の前で三歩さがりぎみに足踏

みしたあと、両手を大きく広げて後ろ回しに一回まわす。これは神に角力の開始を告げる意味であると考えられる。角力は東西とも三番行われる。角力を取るのには東西ともに山子六人ずつである。

まず山若三番尉が祭場の中央に出て、山子二人ずつを呼び寄せる。

この年の角力は西から始まった。神座に背を向ける形で山若三番尉が扇を持って立ち、その両脇に両手を膝につけて前かがみの姿勢になった山子がつく。山若が扇を広げて頭上高く掲げ、「これが今日の神の角力、大角力始まり、大手よし、勝ーち一番、今度の勝負で突き倒せ」と大声を発する。この間三回、左足を半歩前に出して、両手を前かがみに水平に大きく広げる所作をする。この山若の所作にあわせて、山子も同じように左足を半歩前に出して、両手を前かがみに水平に大きく広げる。このとき山子どしは山若をはさんで向かい合う形となる。この角力では山子が実際に組み合い勝負を決することはない。西の一番目の角力が終わると、つぎは東の角力が行われる。これを交互に三回くりかえす。東西の角力の所作はまったく同じであるが、山若の掛け声が異なる。以下の掛け声はつぎの通りである。

東一番「これが今日の神の角力、大角力始まり、大手よし。勝ーち一番。今度の勝負で突き倒せ」

西二番「これが今日の関脇の角力、大角力始まり、大手よし。勝ーち一番。今度の勝負で打ち倒せ」

東二番「これが今日の関脇の角力。紅葉山に花車。勝ーち一番。今度の勝負で打ち倒せ」

西三番「これが今日の関の角力。片や谷風、片や小野川。勝ーち一番。今度の勝負で振倒せ」

東三番「これが今日の関の角力。片や谷風、片や小野川。勝ーち一番。今度の勝負で振倒せ」

東西とも三番が終わると山若は扇を頭上に掲げたまま、身体を振るうにして半回転させて神座の方に向く。そのまま神座の前に進んで、角力が始まる前と同じように三步下がりがみに足踏みしたあと、両手を大きく広げて後ろ回しに一回まわして、神座に挨拶をしてこの儀礼は終了する。この神の角力では東西の所作に差異はない。

〔20〕芋を出すこと

これは芋打ちを前にして、神座の奥の木に立てかけておいた芋を祭場中央に出すことである。これもいづつぎから始まる。例によって西二番尉が「芋を出してはいかがでござるか」と発すると、東二番尉が「いかにもよろし」と答え、山若全員に「芋を出すこと」といいつぐ。いづつぎが終わると三番尉以下の山若全員が祭場に進み出る。まず山若のなかから東西の三番尉のみが祭場の中央に出て芋石付近で対面したあと、それぞれの神座に向かい、例によって三步さがりがみに足踏みしたあと、両手を大きく広げてまず後ろ回しに一回、つぎに前回しに一回まわし、神座の棚の上に供えた丈尺を取る。取ったあとにはまた両手を後ろ回しに一回まわす。丈尺を取り終わった三番尉はただちに芋のある神座の奥で他の山若に合流し、勝手の手伝いを得て袴の裾をまくるなど、芋打ちがしやすいように服装を整える。つぎにそれぞれ

の四番尉以下の山若全員で芋を祭場中央に出す。芋石付近で一度、芋をおいたあと、山若たちの「尋常、尋常、尋常」の掛け声に合わせて芋石を挟む形で、双方の芋を対峙させる。このとき三番尉は奥に控えたままである。芋の先頭を芋石につけ、後ろの部分は二、三人の山若が肩にかけて持つ。この形で芋打ちが行われる。したがってこのとき所定の石に着座している山若は一番尉、二番尉のみである。

「21」芋を打つこと

祭場の芋の準備が整うといよいよ野神山祭場の儀礼の中心である芋打ちが行われる。このときすでに儀礼開始から一時間五〇分が経過し、時間は四時を過ぎていた。芋打ちを行うのは、さきほど酒を飲んだ東西の山若三番尉である。芋打ちもまずいづきから始まる。このときのいづきはまず西二番尉が「芋を打ってはいかがでござるか」というと、東二番尉が「いかにもよろし」と答え、「芋を打つこと」と一度いうのみである。三番尉以下の山若がすでに祭場に出ているからである。このあと丈尺を改め、さまざまな所作をしながら何度か双方の芋を計り、基本的にはそのたびごとに長さを確認したのち、最終的に勝敗を決めるのが芋打ちである。

いづきが終わると丈尺をまず改める。丈尺を改めるとは、ものさしとなる丈尺が東西でまったく同じ長さであるかどうかを確認することである。東西の三番尉が祭場の左右で両手で丈尺を挟むようにして頭上高く掲げながら、二、三回ゆるする所作をする。これを「しごき」という。しごきが終わると両手を身体の前で左右に振りながら祭場中

央に出て、芋石を挟んで、ちょうど対角線上に両者が対面し、片膝をつきながら芋石にそれぞれの丈尺を載せる。西三番尉が「丈尺を改めましょう」といい、東三番尉が「いかにも」と了承したあと、この年は西三番尉が東の丈尺も受け取って、ふたつの丈尺の腹をあわせ、丈尺の天地を一度ずつ芋石につけて長さを確認する。まったく同じ長さであるとの確認が終わると西三番尉が「同じ木がふたつに」といい、これを受けて東三番尉が「みごとに」と答えて、丈尺改めが終わる。

丈尺改めが終わると、西二番尉は「芋打ち、いざ立って打ちたまえ」と声をかけ、芋打ちが始まる。芋打ちには芋をはかることでもあり、この場合芋をはかる山若三番尉をも芋打ちと呼ぶ。山若三番尉はさきほどと同じ位置にもどって、しごきの所作をしたのち芋打ちの位置に着く。東は神座に背を向ける形になるが、西は神座に向かう位置に着く。それぞれの三番尉は芋の全体をながめまわして、あらかじめ芋につけておいた目盛を確認する。芋打ちの補助役は四番尉がとめる。四番尉は三番尉がはかりやすいように芋の目盛の節に扇をあてる。芋打ちの三番尉は芋から約一メートル離れた位置でしごきの所作をし、丈尺を両手で持ったまま、四番尉の示す目盛をめがけて飛ばすようにして丈尺を芋につける。つけ終わったあとは手を左右にゆすりながら、足を交互に踏みしめる所作をする。これをドンジョフミと呼ぶ。しごきからドンジョフミまでが芋打ちのひと区切りの所作である。この所作は東西とも同じである。これを目盛の数だけ繰り返すので、芋打ちには延々と時間をかけて行われる。芋打ちには芋の根元から始めて葉先

に進む。第一回目の芋打ちでは双方とも一〇回ずつ芋を打った。この時点では儀礼上は東西の長さには差はないと見られる。芋打ちのあと三番尉は芋の根元から目盛の数だけ、こんどはドンジョフミだけをくりかえし行う。このときには右手で丈尺を頭上に掲げながら、身体を一回転させる。

芋打ちが終わるとそのたびごとに、東西の芋の長さの確認が行司役をつとめる山若二番尉をまじえて行われる。三番尉はもとの位置でしごきの所作をしたのち、丈尺改めと同じように、片膝をついて丈尺を芋石にのせる。しかし第一回目のこのときには、双方の芋の長さの申告は実は行われなかった。西二番尉の「双方打たっしゃったか」の問いに答えて、三番尉が声を合わせて「打ちましてござる」といったのみである。これを受けて西二番尉が「双方打ったと申されますけど、神事の芋の儀なれば、たがいに長い短いを争う次第、芋打ち立ちかわって改めさせてはいかがでござるか」というと、東二番尉が「いかによろし」とこれに答え、西二番尉が芋打ちに「芋打ち立ち替わって改めよ」と命じて、第二回目の芋打ちが行われる。

第二回目の芋打ちには「立ち替わって」と命じられたように互いに相手側の芋を打つ。しごきの所作のあと東西の境界を越えて相手側に入って芋打ちを行うのである。境界線を越えるときにはカワセノハンギリの時と同じように芋打ちの山若が頭を軽く下げて会釈をする。第二回目の芋打ちもドンジョフミを含めてさきほどの芋打ちと全く同じ方法で行われる。このとき芋打ちは東西で替わるが、補助役の四番尉は

そのままである。この芋打ちが終わると第二回目の確認がまた芋石のところで行われる。この時の状況は、まず西二番尉が「打たっしゃったか」と問うと、三番尉が声を合わせて「打ちましてござる」と答える。西二番尉がさらに「何と打たっしゃったか」と問うと、双方の芋打ちは、「貴殿には」「貴公には」と譲りあう。これも一種のかけひきである。さらに西三番尉が「貴君には」というと、やむなく東三番尉が「西の芋より東の芋は七、八尺も、九尺も、一〇二丈も三、四丈も五、六丈も長ごう打ちましてござる」といって、東の芋の方が長いと主張する。これに対して西三番尉も「東の芋より西の芋は七、八尺も、九尺も、一〇二丈も三、四丈も五、六丈も長ごう打ちましてござる」と西の方が長いと主張して譲らない。これを受けて西二番尉が「双方長い長いと申されますが、互いに欲目もあること、芋打ちも一度改めさせてはいかがでござるか」というと、東二番尉が「いかによろし」とこれに答え、「芋打ちもう一度改めよ」と三番尉に三回目の芋打ちを命令する。

このあと三回目の芋打ちが行われる。今度は双方自分の芋を打つ。

このときの所作もまったく前と同じである。そのあとと同じく芋石に丈尺を立てて、三回目の長さの確認が行われる。二回目と同じようにまず西二番尉が「打たっしゃったか」と問うと、三番尉が声を合わせて「打ちましてござる」と答える。つづいて西二番尉がさらに「何と打たっしゃったか」と問うと、今度は東西全く譲らず、同時に「西(東)の芋より東(西)の芋は七、八尺も、九尺も、一〇二丈も三、

四丈も五、六丈も長こう打ちましてござる」と大声をはりあげる。このとき譲らないのは、先に声を発した方が勝ちとされるからである。

つまりこの時点では双方とも勝ちを主張しているのである。芋打ちもいよいよ本番となり、何回計って決着させるかと事前に電話で行った駆け引きが、この頃より現実のものとなるのである。双方とも譲らないので、第二回目と同じように西二番尉が「双方長い長いと申されまするが、互いに欲目もあること、芋打ちもう一度改めさせてはいかがでござるか」と東二番尉にいうと、東二番尉が「いかにもよろし」とこれに答え、「芋打ちもう一度改めよ」とさらにもう一度計りなおすよう三番尉に命令する。

四回目の芋打ちも前とまったく同じように行われる。芋打ちが終わってドンジョフミのあと四回目の芋の長さの確認が例によって芋石のところで行われる。このときも三回目とまったく同時に言葉を掛け合って譲らず、今回の芋打ちは例年になく時間がかかることになった。そこで西二番尉はさらに「双方長い長いと申されますが、互いに欲目もあること、芋打ちもう一度改めさせてはいかがでござるか」と東二番尉に提案し、東二番尉が「いかにもよろし」とこれに答え、「芋打ちもう一度改めよ」とさらにもう一度計りなおすよう三番尉に命令する。五回目の芋打ちも前とまったく同じように行われる。そしてその結果もまたまた双方譲らず、やむなく西二番尉は六回目の芋打ちを命令する。西二番尉が「双方長い長いと申されますが、互いに欲目もあること、芋打ち立ち替わって改めさせてはいかがでござるか」と

いうと、東二番尉が「いかにもよろし」とこれに答え、「芋打ち立ち替わって改めよ」と命じるのである。

この指示を受けて三番尉は二回目の芋打ちとまったく同じように、相手側の芋を打つ。この頃になると芋打ちの山若にも疲れが見え、また額からは汗がしたり落ちる。芋打ちのあと、また芋石に丈尺を立てて長さの確認が行われる。まず西二番尉が「打たっしゃったか」と問うと、東西の三番尉が声を合わせて「打ちましてござる」と答える。つづいて西二番尉がさらに「何と打たっしゃったか」と問うと、今度は東の三番尉が先に発声して「西の芋より東の芋は七、八尺も、九尺も、一丈も二丈も三、四丈も五、六丈も長いかと思いましたが、ただいまの儀につきまして、僅か一尺ばかり長こう打ちましてござる」とすばやく大声をはりあげて東が長いと主張する。東が先手を取って勝ち名乗りをあげたのである。これを受けて西三番尉はやむなく、「東の芋より西の芋は七、八尺も、九尺も、一丈も二丈も三、四丈も五、六丈も長いかと思いましたが、ただいまの儀につきまして、僅か一分ばかり短こう打ちましてござる」と短かったことを認める。これで勝負は決した。この年は接戦の末、東が勝ったのである。ちなみにこの年の芋の長さは東が七尺六寸七分、西が七尺六寸六分で、その差は文字通りわずかに一分であった。これで三〇分以上を要した芋打ちもようやくくにして終了となったのである。

〔22〕東西の芋を取りかえること

これは芋打ちが終わって東西の芋を交換する儀礼であり、〔10〕カワ

セノハンギリと同じ意味をもつ東西の贈物の交換である。この儀礼もいつぎから始まる。まず西二番尉が「芋の長短も相分かりますれば、例年の通り芋を取り替えてはいかがでござるか」と発すると、東二番尉が「いかによろし」と答える。すると西二番尉が「芋打ち、尋常に芋を取り替えよ」と命ずる。このときの山若が芋打ちのときの配置のままである。この指示に依えて、三番尉以下の山若が芋を持ち、「尋常、尋常、尋常」と三度声をかけながら芋を交換する。先頭を芋石につけていた芋を少しずらして、約一メートルほど相手側に入れるのである。このときには山若は相手側の領域にわずかに入ることになる。このあと東西の山若三番尉が例によって対面してしごきの所作をしたあと、それぞれの神座に向かい、神座の前で三步足踏みし両手を二回前後にまわしたのち、丈尺を神座の棚の上にふたたび乗せる。このあと両手を後ろ回しにまわして、神座の前を去る。これで芋打ちの儀礼はすべて終了し、山若たちは所定の位置に着座する。

〔23〕神を拝すること

これは最後の神を拝することであるが、所作は〔2〕とまったく同じである。この儀礼をもって野神山祭場でのすべての儀礼は終了する。この年一九八八年の芋くらべ祭では、野神山祭場の儀礼がすべて終わったのは四時四〇分頃で、開始後実に二時間二〇分を経過していた。東西の芋の長さが接近し駆け引きがさかんに行われたことが、時間のかかった最大の要因であったと考えられる。

〔24〕山をおりること

野神山祭場の儀礼が終わると東西は相手の芋を持って山をくだる。西二番尉が「まずは祭礼もとどこおりなく相済み、これにてお別れいたしてはいかがでござるか」と発すると、東二番尉がこれに「いかによろし」と答えたあと、山若全員に「山をおりること」といいつぐ。いつぎが終わると山若・山子は席を立ち、相手の芋を山子たちがかついで、登って来た道と同じ道をたどって山をくだる。このときは山子の「ソーライ、ワーライ」の掛け声はない。惜しくも負けた西の山子からは「正確に計っていたら、勝てたのに……」と、くやしさをいっばいに込めた言葉が聞かれた。

山子たちは芋をそれぞれの神主もしくは副神主宅に届ける。届け先では山子たちに御礼を出す。一方山若たちはそのまま熊野神社社務所に向かい、社務所での直会に出席する。このとき山若が熊野神社本社に参拝することはない。社務所での直会は神主・副神主以下の宮座の全員と、勝手・山若が参加して行われる。神主・副神主はこのとき白装束に着替える。全員が疲れた表情である。午後一時からの社務所での儀礼とはほ同じように着座したあと、まず宮座の大人によって茶が全員に配られる。つぎに神主が東西の山若一番尉に礼金と酒一升を配る。このあと神主は簡単な挨拶をして、直会は終了する。この直会では飲み食いすることはない、わずかな時間で終わる。直会が終わるとそれぞれが家に帰る。このあと山若たちが東西それぞれに集まっつてのむことはあるが、特別の儀礼はまったくない。

熊野神社での直会は、宮座が芋くらべ祭の主役を担った山若たちをねぎらうとともに、山若にとっては芋打ちの結果を宮座に報告する意味がある。中山の芋くらべ祭は宮座の総括的な管理のもとで、山若が主役となって実行するという構造をもつが、礼金と酒にこのことがよく示されている。芋打ちの結果は東西の二番芋の長さとともに宮座の帳面に記録される。芋くらべ祭の儀礼はこれですべて終了する。

(4) 芋くらべ祭の儀礼の構造

これまで芋くらべ祭当日の儀礼を早朝の芋掘りから、夕方の直会まで個々にその過程を記述してきたが、ここでは当日の儀礼の全体的な構造と東西の対立と連帯、および芋打ちの勝敗の意義、などの問題について検討したいと思う。芋くらべ祭全体を通しての東西の差異と対立については、またのちに分析する。

① 儀礼の構造

芋くらべ祭当日の行事を大きく区分すれば、午前中の準備、熊野神社での儀礼、野神山祭場での儀礼の三つに分けることができる。午前中の準備は八月下旬から始まる芋くらべ祭の準備の総仕上げであり、その中心は芋の飾りつけである。またこの段階で行われる東西の山若どうしの駆け引きはかなり熾烈であり、これはこの祭礼に対する村人の態度の問題に関連して注目される事実である。

熊野神社社務所での儀礼に関連した最近の変化は、社務所で儀礼が行われるようになったことと、ダイサイ(大祭)とよばれる熊野神社

本殿に関係者が参拝する儀礼が簡略化されたことである。社務所での儀礼は以前、東西の山若一番尉の家を当屋として行われていたことについてはすでに述べた。芋くらべ祭は野神の祭であり、本来は熊野神社とは何ら関係しない祭であるが、これが熊野神社に関係をもったのは、一九〇八年の神社合祀が関係しているとされる(安井吉史編一九五八)。芋くらべ祭それ自体は熊野神社には関係しないが、熊野神社の祭を中心に組織されていた宮座がこの芋くらべ祭にも関係していたことが、この変化にかかわっていたと考えられる。合祀以前は現在よりもさらに東西の独自性が強く、宮座も別々に組織され、したがって野神山祭場での儀礼までは熊野神社に関係なく東西それぞれで儀礼が行われ、直接野神山の祭場に向かっていた。東西の山若の家を当屋として行われていた儀礼もその一部であるが、そこで具体的にどのような儀礼が行われていたかは明らかでない。現在でも宮座内部にはまだ東西の独自性がかなり保持されているが、神社合祀によって宮座も一元化され、祭礼自体も急速に一元化が進んだものとみられる。そのひとつがこの社務所での儀礼であり、これにともなう一時的であるにせよ芋を熊野神社に奉納するなどの儀礼が付随することとなったと考えられる。社務所で行われる具体的な儀礼は「われわれの三三九度」の儀礼であるが、社務所でこの儀礼を行わなければならない必然性はないと考えてよいから、これは新しい変化である。したがって芋くらべ祭への熊野神社のかかわりかたとしては、芋くらべ祭に先立って宮座や氏子、および村の関係者が熊野神社本殿に参拝していたダイサイ

二、芋くらべ祭の儀礼

表1 芋くらべ祭儀礼の構造

性 格	時 間	儀 礼 単 位	山 若	給仕など	山 子
準備	二：一七	1 水廻しをすること		六番尉	
供物の供進		2 神を拝すること 3 芋を供えること 4 神を拝すること 5 神の膳を供えること	全員 全員 全員	 三番尉以下 	
神と山若の直会	二：四七 三：二〇	6 神を拝すること 7 神の三三九度の盃をすること 8 神を拝すること 9 われわれの膳を出すこと 10 カワセノハンギリを出すこと 11 神を拝すること 12 神の膳を下げること	全員 全員 全員	 一〇三番尉 四〇六番尉(東) 五〇六番尉(西) 四〇五番尉	
山若の直会	三：三七	13 神を拝すること 14 われわれの膳を下げること 15 われわれの三三九度の盃をすること 16 一番二番の酒肴を出すこと(東谷) 一番二番の流れ盃をすること(西谷)	全員 一〇二番尉 一〇二番尉	 五〇六番尉 五〇六番尉 三〇四番尉 三〇四番尉	
芋打ち	四：〇〇 四：〇七	17 芋打ちの酒肴を出すこと 18 吊り石を切ること 19 神の角力を取る 20 芋を出すこと 21 芋を打つこと 22 東西の芋を取りかえること	三番尉 三番尉 三番尉 三番尉以下 三番尉以下 全員	 四番尉(東) 六番尉(西) 三番尉 	四番尉 六人
山をおりる	四：四一	23 神を拝すること 24 山をおりること	全員 全員	 	

の方がむしろ自然であると考えられる。ダイサイは現在は神主だけの参拝に簡略化されている。このダイサイにはもともと山若・山子は参加しなかった。

野神山祭場の儀礼はこの年、二時間半以上かかって行われたが、この儀礼の構成は一見きわめて奇妙である。神を拝する儀礼がところどころで何回も行われたり、神の膳を儀礼半ばで撤してしまったり、また山若たちの盃事のときにはすでに山若の膳も下げられたりしている。しかしもう少しこの儀礼を細かく分析すれば、ある程度までこの儀礼の構造が明らかになると考えられる。そこでここでは個々の儀礼の開始を告げる「いいつぎ」が行われる儀礼を一区切り（これをここでは儀礼単位とよぶ）としてとらえ、一連の儀礼を分析したいと思う。

野神山祭場の儀礼を順序にしたがってその性格、時間、担当者などを見たのが表1である。これによれば祭場の儀礼は二四の儀礼単位によって構成されている。このうち七つは繰り返し行われる神を拝する儀礼単位である。ここで注目されることは儀礼単位のなかには前後に神を拝する儀礼が行われるものと、行われないものがあることである。行われるものをさらに詳細にみると、芋の供進、神の膳の上げ下げ、神の三三九度など野神に直接関係をもつ儀礼単位であることがわかる。つまり祭場での儀礼は神に直接かわる儀礼とそうでない儀礼の二つに大きく区分できることである。この区分と儀礼の順序の二つから解釈すれば、祭場での儀礼の全体は、準備、神への供物供進、神と山若の直会、東西の山若の直会、芋打ち、および後始末に区分でき

る。つまり祭場の儀礼は神に供物を供え、神と盃をかわしたあと、東西の山若どうしの直会があり、そのあとに中心の儀礼である芋打ちが行われるという極めて合理的な順序であると解釈できる。東西の山若の直会で注目すべきことは、カワセノハンギリという贈物を相互に交換したのちに、これが行われることである。つまりここでは分離対立する東西の山若の連帯が認められるのである。祭場の儀礼の最後の芋の交換もまた東西の山若の連帯に関連していると考えることができ。また祭場の儀礼についての先に示したふたつの区分が妥当であると考えれば、吊り石を切る儀礼にも新しい解釈が可能のように思われる。吊り石については野神の象徴であるというのが従来の一般的解釈であったが、この儀礼の前後には神を拝する儀礼が付随していないから、これは神とは直接かわらないという解釈である。つまり、吊り石を野神の象徴と考えるには、儀礼掲成上無理があるのではないかという見解である。その上で吊り石の意味がさらに検討されなければならない。

②東西の対立と連帯

すでに「問題と方法」にも述べたように芋くらべ祭の著しい特徴のひとつは、この祭を通して東西両谷の対立と連帯がみられることである。対立は東西のさまざまな差異や競争心に表現され、連帯は儀礼的贈物の交換によって表象されている。ここではこのような対立と連帯の様相を整理しておきたい。

表2は芋くらべ祭における東西のさまざまな差異を表で示したものである。東西の差異についてはこれまでにも坪井洋文（一九八七）、

表2 東谷と西谷の差異

祭具	事項	〔東谷〕		〔西谷〕	
芋飾り	笏	表は腹、裏は百足 細く長い		表は剣、裏は百足 太く短い	
	神座の棚 神座の枝葉 神の膳 神の箸 銚子の水引 銚子の蝶型 盃	真竹の身を上にして編む サカキ、アセビ、ビシヤコフ クラソウを四隅に 篠竹（女竹） 柄の部分を残して皮をむく 金銀の水引 雌 三方に紙を敷いてのせる		真竹の皮を上にして編む サカキ、アセビ、ビシヤコ フクラソウを一束にして四隅に 真竹（男竹） 柄の部分を紙で巻く 紅白の水引 雄 三方にそのままのせる	
服装	丈尺 紙かざり	縄で竹にしはる 根元のみにつける		水引で竹にしはる 芋全体につける	
	一番尉の紋 山若 山子	上下対鶴 白足袋、白い鼻緒の草履 藁草履		東ね敷斗 黒足袋、黒い鼻緒の下駄 下駄	
饗礼	水回し 神を拝する 神の膳を供える 神の三三九度 我々の膳を出す 一番二番の酒肴 吊り石	水を軽く口に含む 二度拍手、一礼 受け渡しの双方が一步動く ハンギリを両手で持つ 神座に三回酒をかける リキマの所作 一番二番の酒肴を出す 酒を飲むたびに肴を要求 山子の家の神棚で保存		口に入れた水を吐き出す 両手を広げて後ろ回しにする 渡す山若だけが動く ハンギリを肩に載せる 神座に九回酒をかける 片膝をつき前のめりの所作 一番二番の流れ盃 二杯飲んだあと肴を要求 草むらに隠す	

（注）東西のさまざまな違いについてはすでに、安井吉史（一九五八）、坪井洋文（一九八七）、岡本信男（一九八九）に詳しく記述されているので、それらは簡単に記述し、ここではいままでも触れられていない違いを中心に比較した。

岡本信男（一九八九）などで詳細に記述されているので、ここではこれまで注目されなかった差異を中心に示した。このなかには今回、映像民俗誌の分析によってはじめて明らかになった差異もかなり含まれている。これらを見ると芋くらべ祭には東西の差異をことさらに強調する傾向を認めることができる。何ごとにつけても東西の差をつけようとする志向性である。総じていえば、東は女性であり、しとやかな所作であり、白いイメージが強調されるのに対して、西は男性であり、荒々しく、黒いイメージが強調されている。つまりここには東—女性—白と、西—男性—黒の対立がある。これらの差異を強調しながら、東西は激しく対立する。その中心は芋くらべの競争であり、これに付随したさまざまな対抗関係が発生している。その境界を象徴的に示すのが、野神山祭場の芋石である。しかしながら東西は差異や対立のみならず、連帯する様相も認められる。その中心は野神山祭場における贈物交換である。芋くらべ祭で交換されるのは、カワセノハンギリと芋である。どちらも食物の交換であり、とりわけカワセノハンギリの交換は食物を交換し、それを相手の山若全

員に配布することに重要な意味があると思われる。つまりこれは東西の山若どうしの共食を意味している。

芋くらべ祭における東西の対立と連帯は、芋くらべ祭以外の中山の村落生活の諸側面においても顕著にみとめられる。中山という村落社会は、区の組織、年齢集団組織、会所、宮座など村落生活の広い分野にわたって双分制原理がきわめて顕著な村落と規定することができるのである。ことばをかえていえば、中山における東西の対立と連帯は芋くらべ祭の儀礼的行動のなかにみられるばかりでなく、人々の日常生活や意識のなかにも深く浸透しているのである。北原真智子（一九五六）は、中山の双分制が歴史的にみて西谷から東谷が分離していく過程で形成されたと結論しているが、このような発生的考察はひとまず置くとしても、現代の中山はこのような双分制原理の自己再生産の過程にあり、これに中心的な役割を果たしているのがこの芋くらべ祭なのである。したがって毎年九月一日に行われる芋くらべ祭は一年に一度、中山の人々に双分制を再認識させ、かつこれを再生産するというきわめて積極的な役割を村落生活のなかで果たしているのである。

③芋打ちの勝敗の意義

芋くらべ祭の中心は、野神山祭場で最後に行われる東西の芋の長さの比較である。この芋くらべによって東西のいずれかが勝つことになるが、この勝敗の意味がどこにあるかを考察することは、芋くらべ祭の性格を明らかにする上で重要である。勝敗の意義の第一は、この結果が稲の豊凶を占うことになるという解釈である。これは坪井洋文

（一九八七）でも触れられているし、岡本信男（一九八九）でも詳細に検討が試みられている。これはつまり東が勝てば稲は不作、西が勝てば稲は豊作という占いである。これは地形的に東谷が西谷より高い位置にあり、また芋は稲よりも水を好むという性格の二つをからめた占いである。すなわち東が勝つ年は雨が多いから不作、西が勝てば雨が少ないので豊作だというのである。経験的には西が勝つことが多いという確率の上で、こうした占いが成立していると考えられるが、ここで無視できないのは畑作物である芋をとおして、水田作物である稲の豊凶が占われているという事実である。このことは芋くらべ祭を純粹に畑作儀礼として、また畑作文化の象徴として理解してよいかという問題にかかわっている。この点から見れば、芋くらべ祭は近江の多くの村落で正月に小豆粥でその年の豊凶を占うのとよく似ているといえる。⁽¹⁵⁾こうした事実を考慮すれば、少なくとも芋くらべ祭を純粹に畑作儀礼として、また畑作文化の象徴として理解することは問題が多いように思われる。むしろ、稲作儀礼に付随する儀礼であるという解釈の方が妥当するように思われる。

勝敗の第二の側面は、これが経済的な権利に関連していたという事実である。岡本信男（一九八九）によれば、かつては勝った方に村の畦草を刈る権利や、共有原野の草刈りの権利が与えられたという。つまり芋くらべ祭の勝敗は、実生活にかかわるこのような経済的な利害にも関連していたのである。かつて芋打ちをめぐる東西でさまざまな争いがあったことも、こうした事実に関連させればよく理解できる。

こうした事実もまた近江の宮座ではかつてはかなり認められたことであり、宮座の無視できない重要な側面であった。芋くらべ祭の勝敗は単に儀礼的な意味にとどまらなかったのである。しかしながら現在では勝った方の一番芋、二番芋には御神酒、金一封、餅が贈られるだけであって、こうした側面はまったく失われている。

しかしながら現在はいくつした経済的な側面が失われたにもかかわらず、なお中山の人々は勝敗にかなりこだわっていることこそ、注目すべき事実といえる。このことは芋打ちの第三の側面として、心理的な意味が重要であることを示している。心理的意味とは相手に負けたくないという競争心である。一九八八年の芋くらべ祭においても、祭の準備が進行するにしたがって、人々のこうした心理は日ごとに増大していったように思われる。別の表現をすれば、この心理こそが現在中山の芋くらべ祭を支えている大きなエネルギーなのである。これを示すいくつかの事実をあげるなら、まず何よりも芋くらべ祭当日の祭礼前における東西の山若三番尉どうしの駆け引きの激しさである。この年の場合は、最初は東が主導権を握って芋打ちの回数を決めようとしたが、午後の祭礼直前になって西が巻き返しをはかろうとしたことである。山若のやりとりのなかにも、はっきりと「負けとうないしよ」という言葉も聞かれた。この年の芋打ちが異例とも思えるほど六回も繰り返されたことも、勝敗にこだわっていた何よりの事実である。また祭場での儀礼が終わったあと、負けた西の山子のひとりが「正確に計っていたら、勝っていたのに……」とつぶやいた言葉にもよくあらわれて

いる。さらに加えていえば、映像民俗誌「芋くらべ祭の村」の現地試写会を中山の東西の会所で開催したときも、負けた西谷よりも勝った東谷の方が格段に参集者が多かったことも、こうした対抗心のあらわれであった。どちらかといえば戸数が少ない西谷にこの競争心が強烈であるように思われる。この心理的側面に即していえば、中山の芋くらべ祭の分析においては、単に祭や儀礼という形式的行動の側面だけではなく、祭に込める人々の感情も極めて重要であるといえよう。

註

(5) 最近では山若と山子の数人が熊野神社の裏の竹林に取りに行く。きりだした竹は会所に運び、山子が時間をかけて米糠を袋に入れたもので磨く。このとき山子には一節ずつが割り当てられ、山子の一番尉がいいというまで磨く。このときの様子には山子の年齢階梯制は竹の節に象徴されていて、印象的であった(写真2参照)。

(6) この一〇本という意味は丈尺で一〇本分という意味と思われる。

(7) 一九八〇年の芋くらべ祭では、山若が実際に相手側に出かけていって、相手の芋の長さを確認していた。

(8) この三〇本、三一本という表現はさきの一〇本という表現とは基準がちがうようであるが、何を意味するのかわからなかった。

(9) 坪井洋文(一九八七)によれば、かつては一二時に神主、オトナ、区長などが出席して熊野神社本殿で神職を呼んでダイサイ(大祭)が行われたようであるが、現在はこれはまったく行われていない。神主が代表して参拝する形式に変化したものと考えられる。

(10) 芋くらべの勝負がつかず争いになったときはオトナが山にのぼって仲裁に入るといふ(岡本信男一九八九)。

(11) 野神の象徴と考える場合、この吊り石が東西の芋の長さを競べあう芋打ちが始まる前に撤去されてしまう意味がわからなくなる。芋打ちが神がいない状況で行われることになってしまっているからである。

- (12) かつては一番尉だけでなく二番尉も、三番尉以下と向かいあう形で着座したという。また「野神の所在ノ例祭ノ情况」によれば、服装もかつては一番尉と同じ、素袍大紋袴であった(岡本信男一九八九)。つまりかつて二番尉は一番尉と同じように神と人を媒介する役割をはたしたのである。
- (13) 西は東に比べて戸数が半数近くと少なく、最近の人口減少によってしばしばこのような事態が生ずる、山子の数が少ないのもこのためである。
- (14) 坪井洋文(一九八七)には肴としてササゲが出されると記されているが、現在はこれはない。
- (15) 中山の近くの三十坪の野神祭(第四節参照)では、芋茎で鳥居が作られるが、この鳥居にも稲の穂が三束かけられる。したがって三十坪の野神祭も純粹に芋に関連する畑作儀礼ではなく、稲作に関連する儀礼でもあるといえよう。

(上野和男)

三、芋くらべ祭の準備

芋くらべ祭の撮影は、現地に到着した一九八八年(昭和六三)八月二日から早速はじめられた。以下では、九月一日の芋くらべ祭にいたるまで行われた準備の過程を撮影の手順にしたがいがら、日を追って再現することを試みたい。なお、ここでの記述は、すべて昭和六三年のばあいを対象としている。今回の撮影が現地に与える影響は最小限に食いとめるように心がけたが、それでも結果的には、例年とは若干の異同が生じたことを指摘しておきたい。

とりわけ日時は、ある程度の目安はあるものの、それほど厳密に決められていないのが現状であり、毎年の事情によって比較的自由に変

更されている。それでも、順序が前後することはないようである。また、準備の段階では東西を同時に撮影することができなかったので、記述にかなり精粗が生じている。あらかじめ断っておかなければならない。

八月二日(日)

アワセのチラシ(東西の山若)

例年にはないことだが、この日の午後八時すぎから、東西の山若が平服のまま西の会所に集まって、はじめてアワセのナラシを行った。

九月一日に野神山でくりひろげられる芋くらべ祭のための稽古をナラシと称して、とくに東西の山若が合同で行うばあいをアワセのナラシと呼んでいる。このたびは、撮影に備えての例外的な措置であったものと推察される。通常は八月三十一日の一回のみ予定されているという。

初回という事情もあるのか、東谷の山若は着座のたびに足をたたみ、口数も少なく神妙にしていたから、総じて生真面目なものに見える。これに対して、西谷の山若は各人各様であり、東谷とくらべると自由奔放にふるまっていた。もちろんおとなしくしている者もいるのだが、同席したオトナの注意に対して「時代が変わってん」「あほらし」「わけのわからんことを……」といった発言をくりかえす者や、退屈そうに寝転がったり足を投げ出したりする者もいる。

これについて、東谷の二番尉はつぎのように話してくれた。彼は

中山に婿入りした養子で、ほかの山若とくらべるとはるかに年長である。「みんないやがってますよ。義務感でやれやれって言われるからやってるだけです。昔はどっちが長いか争ったらしいけど、今はもう早くやめよ、あほらしいって感じですね。みんな現代っ子で、あきらめが早いんでしょう。」

どちらかというと率直に内心を表明している西谷だけではなく、生真面目に見える東谷でも、実情はこんなところなのだろうか。ところが後述するように、批判的な言動をしきりとくりかえしている者にかぎって、儀礼の所作を細かいところまでじつによく覚えていたりして、伝承の今日的形態に興味をそえられる。それでも、山若の稽古にもものたりないものを感じるのか、ときおりはオトナが実際に指導に当たっていた。当事者であるはずの山若よりも、むしろ彼らのほうが楽しんでいる風情がうかがわれる。

また西谷の山若からは、撮影のために使用した照明について早々と「照明が熱い」といった苦情が出されてしまい、こちらとしては恐縮することしきりであった。期せずして、カメラが異物であることを思い知らされる結果になったようである。とくに山若の面々は明らかにカメラの存在を意識しているが、この日は話しかけられることもなく終わる。

ナラシが終わると山若だけが残り、用意しておいたジュースと菓子をついで談笑したのち、しばらくして帰宅する。この日からほぼ連日、それぞれの会所で別々にナラシが行われる。日程は山若のなかだけで

決定されることになっているので、各人の予定にあわせて比較的柔軟に変更されるならわしになっているようであった。

この日には、すでに東西の山子が八月三日の地蔵盆に向けて、準備にとりかかっている。どうやら山子にとっては一連の行事として認識されているらしいが、芋くらべ祭と直接には関係しないので、ここでの論述からは割愛することにした。

八月二日（月）

この日は、東西ともにナラシは行われなかった。東谷は予定していたらしいが、人数が揃わないので中止、西谷は最初から会所に姿を見せなかった。この日以来、撮影のスケジュールを立てるための情報収集に苦勞する毎日が連続する。

八月三日（火）

この日は、近くの上三十坪で野神祭があった。中山では、終日におたつて地蔵盆に付随する行事が続く。ただし、芋くらべ祭に関係することは何も行われなかった。地蔵盆が無事に終わると、中山は本格的に芋くらべ祭の準備期間に入ることになる。

八月二四日（水）

石めぐり（西谷の山子）

前日の地蔵盆をすませた東西の山子は、この日から別々に芋くらべ

祭の準備にとりかかる。早朝の午前六時半、西谷のグラウンドに集合した西谷の山子は、ラジオ体操を終えるとそのまま野神山に登り、石めくりをはじめ。石めくりとは、前年に野神山の祭場一面に敷きつめられた石をいったんとり除き、祭場を清掃する作業である。芋くらべ祭が九月一日に行われていたころは、九月一日が石めくりの日であったという。

祭場の整備は本来ならば山子の仕事であるが、西谷ではオトナも積極的に手伝うことになっている。オトナはこの年に新たに追加する石をあらかじめ野神山の麓に用意しておくばかりではなく、山子がいっただいで祭場に到着するのを待たずして、すでに作業服に長靴といっただいでたちで石めくりを進めていた。祭場の中央奥にある神木と、ほぼ中心に置かれた芋石を結んだ線上には、小石が一行にならべられており、それが東西の儀礼空間を隔てる境界線になっている。西谷の山子は、それぞれの儀礼空間に敷きつめられた石をめくっては祭場中央にある盛り土の塚に向けて乱暴に放り投げ、大雑把に石を山積みにする。割れてしまう石もあるぐらいで、危険きわまりない。

ところがしばらく見てみると、山子はほとんど何もしていないことがわかる。石めくりのほかにも、祭場の周囲に生えている雑草や前年に設置したヒシガキ（祭場の周囲に張りめぐらされた竹矢来のこと）をとり除くなど、作業の多くはオトナがやってしまい、山子はずっと眺めているだけであった。それどころか、「カメラに写ったらあかんぞー」などといいながら撮影班のカメラに向かってしきりにピース・サ

インを突き出してくる者、オトナを相手にして病気のために出てくることができない山子について噂している者もいる。

いずれにせよ、全体にやらされている感じが強く、どうもあまり乗り気ではなさそうである。オトナのひとりが「もうみんなにひとりずつ給料三〇〇円をつつんである」といつていたところからすると、どうやらこの日の労働に対する賃金が支払われるらしい。作業が終わるとそれぞれに休憩する。オトナはお茶を飲みながら、改修する前の祭場のことを話したりしている。撮影班に対しても、「冷たいお茶どうですか」などと気づかってくれるのがうれしい。山子は祭場の石に座って休憩していたが、オトナのひとりが例の給料をまとめて手渡すと、分配についてあれこれと相談していた。

これからのち、西谷の山子は二七、二九日に一日中準備をするが、それ以外の日には何もない。なお、野神山での作業を通じて、東西の山子は相手側の儀礼空間に越境することを禁じられており、もしその禁を犯したときは体罰を甘んじて受けなければならない。ただし、双方とも山子の一番と二番（以下、①②……と表記する）については例外とする。この伝承によく示されるように、儀礼空間を二分する境界は中山の人々に強く意識されており、祭場に向かうときにもそれぞれ別の道を利用することになっている。この時点で神座の中央にミョウガが供えてあったが、詳細は不明である。

石めくり（東谷の山子）

午前中に地藏盆の片づけをすませた山子は、午後一時半から野神山

の祭場で石めくりをはじめ。驚いたことに、このときには山子が四人しかいなかった。軍手をつけた東谷の山子は、めくった石をひとつづつ中央の塚に丁寧に積みあげてゆく。作業は蟬の鳴き声だけが聞こえるなか、山子のみによって黙々と進められる。つねに目覚まし時計をかたわらに置いていたあたり、東谷の山子の几帳面さをよく物語っており、西谷の山子とは対照的である。この作業は、遅いばあいには午後六時や七時にもなると聞いた。

間もなく、山子の①を先頭にして、そのほかの山子が登ってくる。

山子の①と②は、荷台に積んであったゴザを敷いて、菓子やアイス・クリームを食べたり、トランプに興じている。山子間の序列が明確になる局面である。これを見た年少の者は一様にうらめしそうな顔つきになり、とくに山子の③などは「ずるい……」とささやいていた。山子の①と②は作業の期間中を通じて、このように「監督」するという。午後五時半、撮影班が再び野神山に出むいたときには、降り出した雨が強くなってきたせいだろうか、山子はすでに姿を消していたが、作業は中途のままになっており、翌日に持ち越した模様であった。

なお、撮影したいは地藏盆のときからはじめられていたにもかかわらず、この時点では彼らの撮影班に対する態度はきわめてかたくなであったことをつけくわえておく。

ナラシ（東谷の山若）

東谷のナラシを撮影するために、午後八時に東谷の会所に向向いたが、人数が四人しか揃わないので、撮影は困るとのこと。ここでも東

谷の几帳面な性格が垣間見られる。東谷のナラシは準備期間を通じて、やや出席率が悪かったように思う。しかし、ナラシたいは人数が少なくても行われる。この日は終了後、清涼飲料水を口にしながら、静かに談笑していた。東谷のナラシには、オトナも出席するばあいが多く、しばしば細かい所作にまで口出しする。

ナラシ（西谷の山若）

引き続き、西谷のナラシの撮影に向かう。この日は一転して、細かいところまで確認しながら、きわめて真剣な表情で行っていた。前回しばしば不平を洩らしていた者は、じつは細かい所作までよく覚えていたことが判明した。ただし、彼はやはり「時代が変わったんや」「普通でえーやん、何でも普通にやろ」と口走ってみたり、寝転がったりすることはやめようとしなない。

撮影にさいして興味をひかれた光景について簡単に記しておく。西谷の山若たちは、本番で芋を括りつける竹の代わりに、この日は帯を用いていた。また、不明の箇所を確認するために、そのつど、押し入れから持ち出した芋くらべ祭保存会発行の『芋くらべ祭調査報告書』を参考にしていたのは興味深い。お茶の用意をするのはいつも四番尉であり、勝手役として位置づけられているものと思われる。

ナラシが一通り終了すると、小宴会になった。早速、会所に備えつけのテレビにかじりつく者もいる。どうしてもあまり熱心には見えないうが、それでも出席率そのものはよいから不思議である。宴会の様子はどうか撮影されたくないと思えて、山若の面々から「終わりまし

た」と告げられてしまったので、この日は引きあげることにした。西谷のばあい、オトナは出席しないのが通常であるため、ナラシは終始うちとけた雰囲気の中に進められる。

八月二五日（木）

八朔祭（東谷の山若）

午前六時、東谷の山若とオトナ数人が、お神酒を持って野神山の祭場に現われる。山若のひとり遅刻してきた。それぞれ塚のところに神酒をふりかけてから、二つ拍手して通常の方法で拝礼する。このときには、塚の東谷側にミョウガが供えてあったが、詳細は不明である。撮影班が到着する前にすでに神主が到着していたから、彼が供えたのかもしれない。このときには、東谷在住の郷土史家、岡本信男氏も調査のために姿を見せていた。

八朔祭（西谷の山若）

引き続いて、西谷の山若が祭場に現われる。西谷は山若のみ、全員一緒に野神山に登ってきた。持参したミョウガを塚のところに置いてから、横一列にならぶ。まず前進、つぎに右足・左足・右足の順に後退し、蹲居の姿勢をとって、両手を背後から大きく前にまわし、指先を膝の上に立てる。西谷はこれをもって拝礼としている。

石めくり（続き）と掃除（東谷の山子）

午前九時、東谷の山子は野神山に集合し、前日から持ち越していた石めくりの続きをする。一面に落ちた松葉の掃除も、あわせて行う。

やはり①および②がいばっており、年下の山子にイガグリを投げつけたり、背中をかきながら年下の者をののしったりしている。「はよやってこい」だの「何やってねん、こらあほ」だの「やれ、こら」といったぐあいに、である。

ここで印象的な会話を紹介しよう。湯をわかすためにくべる木の枝を集めさせられていた③が、おずおずと「あと何本ぐらい？」と尋ねる。それに対して②は、「あとか？あと三、六〇〇本や」と冷たく返答する。もちろんちょっとした冗談なのだが、③は「そんなにないで」と弱々しく応じるのみであった。しかし、このやりとりをいわゆる「いじめ」あるいは「しごき」の光景として捉えてしまってもよいものだろうか。

こうした関係は、東谷の山子の間で代々にわたって継承されてきたものにちがいない。「いじめ」ている者もかつては「いじめ」られていたはずだし、「いじめ」られている者もいつか「いじめ」る側にまわる日を夢見ているのだろう。それは、学校のクラブ活動にどこ似たところがある。ただし、撮影がはじまると何もなかったようにふるまうあたり、こちらをよく観察している。東谷の山子はこの時点でも、撮影班に対してまだ拒絶の姿勢を崩していない。

昼食（東谷の山子）

この日からは、正午になると、野神山で南瓜と小豆を甘く煮こんだものを食べる。あいにくこの日は激しい雨に見舞われたために、山子は午前一一時半ごろから、野神山の麓にある民家の作業場で昼食をと

八月二六日（金）

ヒシガキの竹集め（東谷の山子）

午前五時、夜も明けぬうちから東谷の会所前に集まった山子が、道具袋を肩にかけてヒシガキの竹集めに出かける。①と②は自転車に乗って登場した。①は家人に自動車で送ってもらったために、早速からかわれていた。この竹集めは、ヒシガキを作るために行われる。山出と下出の二組にわかれた山子が各戸をまわって竹を貰い受けることになっているが、代わりに五〇〇円程度のお金を出す家も少なくない。「ヒシガキの竹おくん、ヒシガキの竹おくん、なー」のかけ声とともに、寝静まった家々を訪問するのである。撮影班は山出をまわる組を追跡することにした。

ところが、山子が勢いよく走ってゆくために、カメラを担いだ撮影班はついてゆくのがやつとのありさま。たちまち息も絶え絶えの状態に陥ってしまったのであった。なお、ここで目撃した興味深い出来事について記しておきたい。ある山子が山若のいる家を訪問した。ところが、山若の家はヒシガキの竹集めの対象外になっているらしく、起きてきた家人にたしなめられる一幕を眼にすることができたのであった。このようにして集まったお金は、例によって①と②が管理する。竹のほうは会所前まで運んでおく。すっかり明るくなった午前六時ごろ、山子は竹を集め終わって解散した。

草刈り（続き）（東谷の山子）

この日も前日に引き続いて、野神山の道に生い茂った草を刈り取る。午前九時から。

ナラシ（東谷の山若）

この日のナラシは午後八時すぎからはじまった。この日に会所にやってきたオトナは、神主を含めて三人。ナラシは厳格な雰囲気なのか、儀礼の次第を通して行われる。細かい所作や芋のとり扱いなどをめぐって、オトナとの間で真剣なやりとりがかわされるひとこまも見られた。こちら東谷では、細部を確認するためのテクストとして、故坪井洋文氏の報告「芋くらべ祭——滋賀県蒲生郡日野町中山——」が参照されている。

ところで、終了後はじめて、山若とあれこれ談笑する機会に恵まれた。通常は午後一時ぐらいまで、ジュース二本と菓子で雑談しているという。この日は結局、午後一時半まで話しこんでしまった。こうして双方が親密さを増してくるとともに、撮影班の間では山若や山子にニックネームをつけることがやはりはじめた。一例をあげておくと、当時のアイドル歌手であったシブガキ隊のメンバーにちなんで、ヤクンやフクンといったあだ名をつけられた者もいたように記憶している。そういえば、東谷の山若には美男子がことのほか多い。

八月二七日（土）

女竹切り（東谷の山子）

午前九時すぎ、会所に集合した東谷の山子は女竹切りに出かける。

道中の間ずっと、年長の者は年少の者を追い立てていた。撮影班の追跡をふりきるためとも思われたが、どうやら年少の者を走らせるのが目的であるらしい。本人たちにはっきりとした自覚があるわけではないが、一種のしごきと見なせるかもしれない。しかし、この日も山子の①がいないので、年少の山子はいくらか自由にふるまっていたようである。

東谷の会所から、池のあるシャバ谷を経て、水道施設が設置されているところまで行く。この女竹は、神座の棚に供える神の膳を作るために用いられるものである。会所を出発するさいに、たまたま出くわしたあるひとが、山子の②がひとりだけ自転車に乗っていたのを見て、叱りつけていた。悪い（と彼が思った）習慣が続くことを懸念していることであるらしい。

なお、準備の作業を通じて、山子は親と子の関係を構成している。①と②はのかぎりではないが、③―⑪、④―⑩、⑤―⑨、⑥―⑦・⑧が、それぞれペアになっている。山子は水道施設の屋根に寝転がったり、遊びに出かけたりして、作業は一向にはかどらない。午後一時半すぎになって、ようやく予定の本数である一二〇本を切り出して、会所に運ぶ。

準備全般（西谷）

西谷の準備は、現在では集落総出で行われる。午後一時すぎ、会所に集まった西谷の人々は、ヒシガキの竹や神の膳を作りはじめる。一方、野神山では、婦人を中心にして草刈りが進められる。オトナの

何人かは、神座を組み立てている。山子たちは早くも石ならべにとりかかっている。いったんとり除いた石を再びならべることを、このように呼びならわしている。まだ東谷の山子が姿を現わしていないのを幸い、越境を許されている①と②が東谷のところから形のよい石を無断で拝借してくる光景も見られた。

オトナの協力を得て、山子の作業は談笑をまじえながらにぎやかに進められてゆく。カメラに向かってピース・サインを送る者は、依然としてあとを絶たない。また、同時刻に祭場のすぐ下で食事をとっている東谷の山子のことが気になるらしく、様子をうかがう者も少なくなかった。西谷の山子はいかなるときにも南瓜と小豆の煮物を食べることをしない。このならわしは、あくまで東谷の山子にかぎられている。

午後三時に全員がいったん休憩したのち、午後三時半からオトナと婦人を中心にしてヒシガキを設置し、引き続き神座の整備、吊り石と呼ばれる石のとりつけ、石ならべなどにとりかかる。西谷の準備は、集落総出で終日行われるため、二七日中にはほとんど終わってしまう。神座については、竹の皮を上に乗せて編んだ棚をのせて、四隅にアセビ・ビシヤコ・フクラソウの三種を一束にしてさしておく。そしてこのころになると、山子はやはり仕事らしい仕事もしないで、祭場の石に座って談笑しているのである。

ところで今回の撮影は、当初の理念とは異なって、結果的にはさまざまなかたちで現地に影響をおよぼしてしまったように思われる。カ

メラという異物はそれじたいで、やはり現地に対して予想以上に大きな影響を与えるものなのかもしれない。じっさい撮影を進めてゆくなかで、そのことをしばしば思い知らされたのである。撮影によって生じた問題はじつにさまざまであったが、きわめて現実的な次元に属していたために、眼に見えるかたちで表面化したばあいもないわけではない。その好例として、ここではヒシガキを立てる位置をめぐる顛末について記しておきたい。

芋くらべ祭が行われる野神山の祭場は立ち入り禁止になっているために、これまで一切の撮影は原則としてヒシガキの外側からにかざられていた。しかし、一般に奇祭として知られている芋くらべ祭は、滋賀県無形民俗文化財に指定されていることもあって、毎年多くのカメラマンを集めており、その間をぬって撮影を敢行するのはきわめて困難であると予想された。しかも当方としては、九月一日に行われる儀礼の次第について、できるだけ漏れなく、しかもさまざまな角度から撮影したいとの方針を固めていたので、ぜひともカメラを自由に移動させうるだけのスペースを確保しなければならなかったわけである。

そこで、事前に数回にわたって芋くらべ祭保存会の方々と話しあった結果、この問題に関する全面的な協力をとりつけたのであった。具体的には、下記の方法で専用のスペースを設けていただいたのだが、それは要するに、「特別扱い」をしてもらうということにほかならない。もちろん、こうした処遇を現地との間で形成された信頼関係の賜

物であると思なして、楽観的に構えるむきもなかったわけではない。しかしながら、ことの経緯をあらためてふりかえってみると、反省することしきりである。

すなわち、当初は現地への影響を最小限に食いとめることを心がけていたにもかかわらず、じっさいに撮影を進めてゆく過程で、そのような理念はしだいに非現実的な色あいを帯びていった。そもそも、撮影のために用いられるカメラじたいが現地にとっては巨大な異物として意識されてしまうのだから、当初の理念を貫徹するのは至難のわざであった。それどころか、撮影にさいしては現地の全面的な協力を依頼しているのである。こうした事態を前提としていながら、できあがった映像を現地に対してほとんど影響を与えずして撮影されたものであるかのように見せかける。それはいわば映像の魔術として説明されるべき何ものかであるにちがいない。

しかし、事前に現地との間で入念な交渉を行い、こちらの意図を実現するための諸条件を満たしておかないと、撮影じたいが成立しないのもまた事実である。やはり当面は、影響を「最小限に食いとめる」といったところで妥協するよりほかにないのかもしれない。民俗誌的記述をめぐる議論にもつながってゆくと思われるこのアポリアをめぐる、今回は撮影および編集の段階でいくつかの対処療法的措置を試みている。しかしながら、それはいまだに大きな課題として残されたままである。

こうして、例年ならば祭場の周囲をとりまく石のすぐ外側にヒシガ

キを立てることになっているところを、今回のみやや後方にずらしていただき、カメラが自由に移動しうるスペースを確保することに成功したのであった。この日、西谷のオトナおよび婦人によって作られたヒシガキは、撮影班の希望を十二分に満たしていた。そして翌日、東谷のヒシガキもこれにならって作られている。

草刈り（続き）（東谷の山子）

午後二時ごろ、東谷の山子は山頂近くで弁当を食べる。西谷が総出で準備に当たっているのを見て、ある山子が「あいっら、頭があほやから自分でけへんねん」とつぶやいていた。双方の対抗的な関係がしのばれよう。午後三時半になると、休憩をとって南瓜と小豆の煮物を食べる。どうやら山子にとって南瓜と小豆の煮物は相当に負担であるらしく、しきりに撮影班に食べてくれるよう懇願する山子も現われた。こちらとしては、喜んで協力した次第である。そのあとしばらくは木登りに興じて、再び草刈りを夕刻まで続ける。

ここでちょっとしたエピソードを紹介しておこう。山子の③から「おっさん、こんなんだけへんやろー、ここまでおいで」といわれた報告者が、撮影の合間であったのを幸い、彼らのあとを追いかけて雑木に登ってみせた。案の定すり傷だらけになってしまい、山子に馬鹿にされる始末だったのだが、これだけならば他愛のないやりとりとして忘れ去られてしまったかもしれない。ところが驚くべきことに、そののち山子の態度は見事なまでに豹変し、撮影班に対して過剰なまでに好意的な態度を示すようになったのである。撮影もいろいろと大変

であると思うことしきり。

ナラシ（東西の山若）

この日も、東西の会所でナラシが行われている。撮影班のうちの二人は、西谷の会所で今後のスケジュールを聞き出したのち、東谷の会所に向かった。ここで、ようやくナラシを終えた東谷の山若と談笑する機会を持つことに成功する。とくに三番尉と四番尉は、撮影班のメンバーに対して強い関心を示していたように思う。当方だけは午後一時に会所を引きあげたのだが、それからしばらくして、山若のほぼ全員が撮影班の宿舎までやってきた。

彼らは撮影班の大歓迎にあい、そのままなんと午前五時まで、硬軟とりまぜた話題で延々と盛りあがった。たがいにそれぞれを認知するようになってくると、撮影をはじめたころには総じて生真面目に見えた彼らにもさまざまな横顔が備わっていることに気づかされる。それとともに、山若のなかで形成されている微妙な人間関係が明らかになってきた。東谷の山若のばあい、どうやら三番尉が相当な人望を集めており、リーダーシップをとっているように思われる。いずれにせよ、徐々に親密さが増してくるのが感じられたこの夜のできごとではあった。

八月二八日（日）

竹切り（東谷の山若）

午前八時、会所に集合した東谷の山若は、熊野神社裏まで、芋を括

りつける孟宗竹をとりに行く。これを芋竹と称している。前日の夜ふかしがたたって、山若はやや疲れ気味である。出かける前に撮影班の宿舎を訪ねてくれたそうだが、こちらも熟睡しており気づかなかったようである。最初に切り倒した竹が少し曲がっていたため、やり直すのに時間が余計にかかってしまい、午前九時半になって、ようやく竹を会所まで運び終わった。蚊が多くて、悲鳴をあげながらの作業であった。

草刈り（続き）と石ならべ（東谷の山子）

午後一時に野神山に集まった東谷の山子は、前日までに終わっていなかった草刈りを引き続き行い、午後二時から石ならべをはじめ、①と②は姿を見えていない。適当な石が少なかったため、よそから新たに運ばってきた石を、集落の者にも協力してもらって祭場に運びこむ。祭場のすぐ下に到着した軽トラクの荷台から祭場まで、一〇数人が一列にならんでバケツ・リレーよろしく石を運びこむさまは、まことに壮観であった。最後に山若の点検を受けて若干の修正を行い、午後五時までに石ならべは完了した。

準備全般（東谷の山若・東谷）

東谷の山若はいったん解散したのち、午前一〇時に再び会所に集合し、縄をなうために必要な藁を調達しに出かける。できあがった縄は、芋を孟宗竹に括りつけるために用いられることになっている。午前一時ごろ、一番尉から三番尉までは、午後の作業に必要な水引などを買うために近くの水口町まで出かけるが、間もなく戻ってくる。

正午すぎから、山若は会所で芋の飾りつけにとりかかる。飾りを作るさいに扇風機を利用するアイデアには、撮影班の一同も感心することしきりであった。午後一時からは、山子の親も作業にくわわって、野神山への道を掃除する。午後二時五〇分、東谷の会所では山若の五番尉と六番尉が杓子の柄に紙を巻いたり、蠟を用いて水引に細工を施した飾り物を作っている。その表情はいずれも真剣そのものであった。また、残った者のうち、三番尉・四番尉・七番尉は、器械を用いて藁打ちに精を出している。

午後三時から、山子の親をはじめとした集落の者が野神山にやってきて、神の膳に必要な箸を作りはじめる。間もなく、山若が現われて祭場の周囲にヒシガキを設置、これを集落の者が手伝う。彼らは引き続いて、山頂近くの道にも竹垣を埋めこんでゆく。これらの作業に用いられる竹は、あらかじめ山子の親が作っておいたようである。午後四時すぎ、早くも集落の者が中心になって神座を作りはじめる。このときに、吊り石を神座にとりつけてしまう。それに備えて、あらかじめ山子の④が自宅の神棚に供えてあった吊り石を持ってきた。

午後五時前、準備がほぼ完了した祭場では、石のならべ方のことで、山若が山子に注意を与えている。同じころ、会所では山子の親をはじめとする集落の者が縄をなう作業を続けている。

米かし（オトナ）

午後三時近くになってから、神主宅で米かし（米をとぐこと）がはじまる。これは餅つきに備えてのことであるので、糯米が用いられる。

当初は午後一時からはじまる予定だったが、西谷のオトナ二名が大幅に遅れたために、この時刻にずれこんだのである。時間を持てあました残りの四人は、午後二時二〇分ごろから、この年の芋くらべ祭について記録する帳面を作りはじめていた。

ナラシ（東谷）

この日は、会所を訪問して今後の予定を聞いたのち、すぐに宿舎に戻ったので、ナラシの様子は不明である。同時刻に西谷でもナラシがあったらしい。二八日、二九日、三〇日（アワセ）の三日間にかぎって、東西ともナラシに山子の①⑥が参加すると聞いたが、詳細については確認していない。このとき撮影班は、東谷の山若から三〇日に行われるアワセのナラシのあとに予定されている簡単な宴会に招待された。

八月二十九日（月）

石洗い（東西の山子）

午前九時から平服の東西の山子が、前日に野神山に敷きつめた石、ならびに芋くらべ祭のさいに山子が座ることになっている石を丹念に洗う。祭場のすぐ下に引かれた水道の水を用いて、作業は双方ともに端から境界線へと進められる。山子はそれぞれ、自宅からバケツとたわしと雑巾を持参している。東谷の山子①は、この日も自転車に乗って現われた。この石洗いについては、西谷も山子のみで行い、ほかの者の手を借りることはない。東西の山子が同時刻に野神山の祭場に出

くわしたのは、準備の期間を通じてはじめてのことである。

おりしも、西谷のオトナで保存会長を勤める岡崎直次氏が現われた。山子の応対がうかがわれて興味が尽きないので、しばらく両者の会話に耳を傾けてみよう。

岡崎氏「肺炎で病院に行ってた山子、今日から来るのでみな仲間に入れてやれ」

西谷の山子①「わかってるわ」

西谷の山子②「それ言いに来たんか」

岡崎氏「小さい子どもに働かせて、大きい子どもは何してんねん」

西谷の山子「……」（無言）

岡崎氏「大きい子どもは見てるのん」

西谷の山子「……」（やはり無言）

岡崎氏「東の子おは、今年もあの、かぼちゃを炊いてもらって食べるのか」

東谷の山子「……」（無視）

そのうちに、西谷の山子①が境界線を越えて、東谷の山子①と何事か会話をはじめた。しばらく緊迫した雰囲気が流れる。東谷の山子①はいつものように、到着したときから年少の山子にむかって、「お前ら、何しとんねん、こら」といった罵声を浴びせかけていたが、やがて②とともに東谷の山子のなかでも年少の二名に制裁をくわえはじめた。どうやら、ふたりともまちがって境界線を越えてしまったらしい。ひとりはまず、正座した膝の上に大きな石を七、八個も積み重ねら

れてゆく。続いて、石をひとつ持たされて、その腕を水平に伸ばすように強要されていた。手が下がると、たちまち蹴りが入ったり、小石をぶつけられたり、木の枝で叩かれたりしたから、彼は耐えきれなくなって泣き出した。しかし、①はそんなことを意に介する気配もなく、つぎのように続けている。「下がってきたなあ。はい、一個増やそうか。」

もうひとりも、ほぼ同じ仕打ちを受ける羽目に陥っている。彼のばあい、大きな石をふたつも持たされて、その腕を水平に伸ばすよう強要された。ほどなく腕が下がってくると、今度は②が木の枝で彼の腕を叩く。石を落としたら、もう一度やり直しである。しくしく泣き出した彼を見て、たまらず岡崎氏が「許してやれ」と告げたようである。そのせいもあったのだろうか、ようやく制裁は終わった。

撮影班も思わず止めに入りかけたのだが、じつはこのような仕打ちは、山子の間で代々にわたって継承されていたのであった。その意味では、この制裁はいわゆる「いじめ」とは異なり、山子の間で共有されている形式的な行動であると思なせるのかもしれない。こうした推測を裏づけるかのように、手厳しい仕打ちを受けたにもかかわらず、当の山子たちは反論もせず、解放されるとまた黙々と石洗いを続けていた。午前一〇時半、石洗いの作業が終わると、正午にあらためて会所に集合することを確認して下山し、いったん帰宅する。

縄をなう（東谷の山若）

前日に縄が完成しなかったため、この日も午前一〇時すぎから、東

谷の会所前で山若の三番尉・四番尉・七番尉ほかによって、縄をなう作業が続けられる。午前一一時前、大型の鉄で細かいところを整えてから、三人の山若がほぼ完成した縄を火であぶる。なおこのときに、神座にのせる竹編みの棚はすでに用意されていた。一番尉がこれを作ることになっているが、じっさいには家人が作ったものであるらしい。この棚は東谷のばあい、真竹の身を上に皮を下にして編むが、西谷のばあいは逆に、皮を上、身を下にして編まれることになっている。

石つき（東谷の山子）

それぞれの家では、石つきのために山子に持たせる寿司とおかずを調理している。⑪の家では、彼が帰宅したときには、母親が稲荷寿司を重箱に詰めている最中であつた。野神山を下りた山子は、正午になると再び会所に集合し、石つきをはじめ。石つきの本義はよくわからなくなっているが、いまでは山子が寿司とおかずを持ち寄って食事をすることを意味するようになっていいる。会所での着座順は左図の通り。

①②は間もなく平服に着替えるが、はじめはいずれも紺の着物を着ている。①が「見せにこい」と告げると、③④⑤は席を立て、持参した寿司を①と②に見てもらふ。ざっと寿司の内

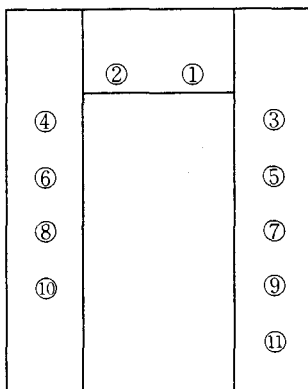


図 3



写真2 カメラに群がる東谷の山子

容を検閲した①と②は、神主と一番尉の家にとれを届けるかを決定するのである。山子の間で「新さん」と呼ばれている神主の家と一番尉の家に、①が見つかった寿司を届けるのは、④の役目である。④は「あほ役」と呼ばれており、これは山若の四番尉も同じであった。

④が神主の家を訪れると、応対に出てきた夫人は「こんにちは、そんなんごっつおう（ごちそう）くれはるの、ちょっと待っててや」といい残して裏に引っこみ、しばらくすると半紙（？）を持って出てきた。続いて④は一番尉宅を訪問する。ここでは、空になった重箱にお礼を入れて手渡していた。無事に寿司を届けた④は、速やかにほかの者が待つ会所に戻る。

山子は一二時半になると、持ち寄った寿司とおかずをおたがいに交換して食事をとりはじめたので、撮影班も宿舎で用意してもらった弁当を食べることにした。①と②にかぎって、食事の前に平服に着替えている。ほかの重箱に箸を伸ばす者もいるが、料理は大量に用意されている。とても全

部は食べられないだろう、などと余計なことに気をまわしてしまう。機材をそのままにしていると、食事をすませた山子が徐々に集まってきた。当初は冷やかだった山子は、ここにいたって完全にうちけたかのである。カメラのレンズをのぞきこんだり、退屈しのぎに報告者が教えたヨガのポーズに夢中になったり（これはしばらくの間、爆発的に流行した）、親しげに話しかけたりするなど、その豹変ぶりには目を見張るばかりであった。撮影班との距離は当初とはくらべものにならないくらい近くなったが、一方で今後の撮影に支障をきたすのでは、と心配になってくる。

ホコモトの紙集め（東谷の山子）

午後一時半になると、二組にわかれて「ホコモトの紙おくんない」のかけ声とともに、御幣を作る紙や芋を集めてまわる。これをホコモトの紙集めと呼んでいる。一時間ほどで集落をまわり、会所に戻ってくる。ホコモトの紙集めも、ヒシガキの竹集めと同じく、紙の代わりに金を渡す家がほとんどである。だいたい三〇〇円が相場といったところか。山子としては「紙なんかいらん、金が欲しいわ」ということになる。

それにしても、カメラが捉えた山子は、午前中よりもはるかにリラックスしている。カメラに顔を近づけてふざける者、ピース・サインを送る者、さきほどのヨガのポーズが気に入ったのか、しきりにやってみせる者……。ホコモトの紙集めにまわっている最中にも、「ほら、一〇〇円玉写したろ、アップで」といいながらカメラに接近してきた

り、「ホコモトの紙おくんない」の代わりに「ホコモトの紙ちょうだい」と叫んだりするなど、当初とくらべるとカメラの前でもじつに生き生きとした表情を見せるようになった。

同じころに西谷の山子もホコモトの紙集めに出かけたものと思われるが、撮影することができなかった。したがって、詳しいことは不明としなければならない。

竹拭き（東谷の山子）

そののち、会所に据え置かれた芋竹を米糠の入った袋で拭く。午後二時二〇分の撮影時には、②が監督するなか、③がひとりで竹拭きを行っていた。コウビルの前後を利用して、断続的に行われた模様である。

コウビル（東谷の山子）

午後三時になると、山子はコウビル（小屋）と称して、再び食事をとる。昼食のさいに残った寿司を食べるのである。食後しばらくは休憩時間になり、山子たちは会所のなかでさまざまな遊びに興じている。⑨などは、コウビルの間も覚えたてのヨガのポーズに熱中している。

ナラシ（東西の山若）

それぞれの会所で別々に行われるナラシは、この日が最後になる。撮影には出かけなかったので、詳細については不明。

八月三〇日（火）

餅つき（オトナ）

神主宅で餅つきを行う。午前八時以降、オトナが徐々に神主宅に集

まりはじめる。全員が揃ったところでお神酒を飲み、午前中を餅つきに当てる。このとき神主と副神主は、あわせて御幣を切る作業にとりかかる。なお、餅つきの過程を通じて、東谷のオトナのひとりである岡本幹雄氏が強力なリーダーシップをとっていたことをつくくわえておきたい。昼食は午後三時から、東谷の仕出し屋からとり寄せた料理を食べながら、にぎやかに行われる。

ところで午後四時半からは、今回の撮影に触発されてとくに東谷の仕出し屋が作ったシイラ酒も宴会の席に出されたが、これはどうやら不評のようであった。シイラ酒とはシイラという魚を酒に漬けたもので、かつて芋くらべ祭にさいして用いられていたことが記録に出ている。

竹拭き（続き）（東谷の山子）

午前九時に東谷の山子は会所に集合して、午前中を通して竹拭きにとりかかる。光沢が出てくるまで、丹念に行われる。作業は翌日も朝から引き続き行われた。

竹拭き（西谷の山子）

西谷の山子は、西谷の会所前に据え置かれた芋竹を丹念に拭いて、祭の当日に備える。ほぼ年令の順番にならんで一本の竹を全員で拭く光景は、山子の間で形成される人間関係のありようをよく物語っている。なお撮影時は、午後二時二〇分であった。

餅食い（東西の山子）

午前一一時四五分、神主宅に東西の山子三名ずつ（①～③）が訪問

して、餅のふるまいを受ける。小豆の餡がたっぷりついた餡ころ餅は、かつてならともかく、現在ではまったく人気がない。六名とも餡をとり除いて食べていたが、あまりおいしそうな顔はしていなかった。なおこのときに、オトナから小遣いをもらうことがある。分配の方法は、①が三、〇〇〇円、②と③が三、〇〇〇円となっている。

準備全般（続き）（西谷の山若）

西谷の会所に山若たちが集まり、午前九時ごろから夕刻までかかって、準備を一気に行う。芋竹を切り出すこと、定尺を作ること、水引や小刀の飾りつけを新しいものにとり替えることなどが、ここでの主たる作業であった。一同は、はじめのころのナラシの態度とはうって変わって、真剣な表情でとりくんでいる。芋くらべ祭の当日が近づくとつれて、緊張感が高まってくるのがよくわかる。

ところで、芋くらべの勝負を決するさいに用いられる定尺は、アワセが行われる日の昼間に、東西が毎年交代で作ることになっている。撮影が行われた一九八八年（昭和六三）は西谷の担当だったが、三番尉と四番尉が切ってきた木の種類がちがっていたために出直したり、なかなか適当なものが見つからなかったりして、ずいぶん手間どっていたようである。そのうちに、ようやく六番尉が定尺を作るために必要な樫の木をとってきた。午後三時半、三番尉が樫の木をふたつに割ってカンナをかける。こうして作られた定尺のうち、ひとつはこの日のうちに東谷の山若に届けられる。

なお、真剣な表情には変わりがないが、ちょっとした時間を利用し

て勉強している者もいたこともつけくわえておきたい。

御鯉（オリ）を作る（一般）

この日あるいは前日の二九日に、一般の家庭では御鯉と呼ばれる供え物を作る。午後二時前、撮影班はオトナのひとりである久保孝三氏の家を訪れた。ちょうど夫人たち二名が型押しの方法で御鯉の生地をとりだして、筵の上にならべているところであった。再び久保氏宅にうかがったのは午後四時前のことであったが、乾燥させた生地に葉鶏頭の葉をしぼって作った汁で彩色を施していた。

アワセのナラシ（東西の山若・山子）

午後八時すぎから東西の山若と山子が西谷の会所に集合し、神主・副神主をはじめとするオトナ数人が列席するなか、合同でナラシを行う。この日のナラシは、芋くらべ祭の次第をすべて網羅するかたちで行われた。いわば「通し稽古」に相当するものと捉えておいてよいのではないだろうか。はじめに山子に関わる部分（「吊り石を切る」と）と「神の相撲をとること」をすませて、山子をさきに帰らせたのち、午後一〇時近くまで熱のこもった稽古が続けられた。祭の当日が近づいてきたせいもあってか、さすがに全員ともに真剣にとりくんでいる。なお、西谷が用意した定尺は、このときに東谷に手渡されていた。

ここで、いくつかの印象的なできごとについて記しておこう。まず、東谷の三番尉と四番尉との間でひそかに交わされたと思われる会話の内容についてである。報告者の見たところでは、どうやら三番尉が四

番尉に対して、芋の長さを計測するさいに寸法をかせぐ秘策を伝授していたのではないだろうか。芋の計測に直接的に関与している両者としてみれば、これは重大な関心事であったにちがいない。三番尉が芋に押しつけた定尺の位置を四番尉が扇で示しておき、それをつぎつぎと継ぎたしてゆくのが計測の方法であるが、そのさいに扇の位置を微妙にずらすのが常套手段であるらしい。ただしこの反則わざは、どうやら西谷の山若にも用いられているようであった。

このほか東西の勝負に関わるべきこととしては、ナラシが終わったあとに、双方の三番尉が台詞のやりとりについて入念な打ちあわせを行っていた。どうやら談合している気配もうかがわれるが、詳しいことはわからない。そのうち、東西の山子に撮影班もくわわって、深夜まで盛大な宴会が続いた。

八月三十一日（水）

芋の選定（東西の山若）

撮影班は、東谷の山若を追った。東谷の山若は午前八時に東谷の会所に集合することになっていたが、前日に夜ふかしをしたためか、集まりはきわめて悪い。午前八時四五分になって、ようやく二組にわかれて出発した。山若たちは集落をざっとまわって、候補の芋をいくつか選定しておく。計測には竹の棒が用いられて、四番尉がこれを担当していた。午前九時すぎには会所に戻る。西谷の山若は午前九時に集合して、同じように芋の選定を行う。

準備全般（続き）（東谷の山若）

午前九時四〇分から、会所で杓子などに最後の飾りつけを施して、仕上げにとりかかる。午前一〇時半になると、一番尉と四番尉は自動車に乗せてもらって野神山に出かける。まず一番尉があらかじめ作っておいた竹の棚を神座にのせ、続いて四番尉がサカキ・アセビ・ビシヤコ・フクラソウの四種類の枝葉を神座にさす。この作業は午前一時五〇分までには終わった。

また、カワセノハンギリは東西とも四番尉の家が担当することになっているが、ダシと呼ばれる飾りの部分については、その方面に秀でた人に頼んで作ってもらう。この年、東谷の四番尉は西谷の野田さんに依頼していた。野田さん

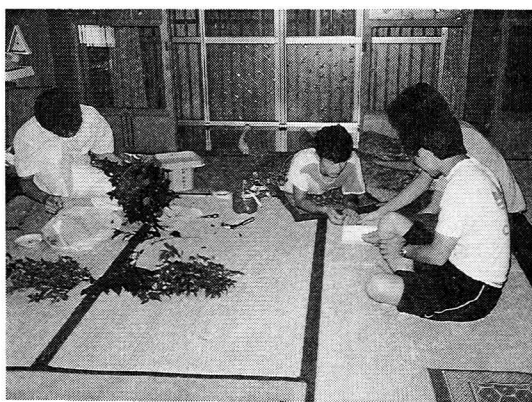


写真3 祭の準備に余念がない東谷の山若

宅が熊野神社前に位置しているせいもあったのだろうか、四番尉が野田さん宅にカワセノハンギリを受けとりに行ったのは、芋くらべ祭の当日のことであった。九月一日の午前十一時すぎ、彼はカワセノハンギリを受けとると、そのまま熊野神社に出むいている。



写真4 ムカデ道を作る東谷の山子

ムカデ道を作る（東谷の山子）

作業は午後三時半からはじまった。野神山の頂上にいたる道に、栗の葉をならべてムカデ道を作る。これは東谷のみのならわしである。栗の葉は野神山の向かいにある雨乞いの山からとってくることになっている。このとき、山に入った山子のうち最年少の⑪が泣き出すハプニングがあった。事情を察するに、栗のイガをぶつけられたりしたのではないだろうか。本来ならば葉を一枚ずつならべることになっていくらしいが、この年は手間を省いたのか枝ごとならべていた。午後五時、ようやくムカデ道が完成する。

以上、芋くらべ祭の当日にいたる準備の過程を、時間を追って記してきた。今回は諸般の事情から、東谷を中心にして撮影することを余儀なくされたために、とくに西谷についてじゅうぶんな記述を展開することができなかった。また東谷についても、撮影を直接の目的として情報を収集していたために、いざ準備の過程を記述しようとすると、未確認の部分が多

すぎることに気づかされた。その結果、調査報告としてはあまりにも偏った内容になってしまったのではないかと恐れている。

しかしその反面、いくつかの興味深い事実も明らかになった。とくに東西のちがいが芋くらべ祭の当日のみならず、準備の過程でもさまざまな局面に表出していることがわかったのは、大きな収穫であったといわなければならない。また本節では、撮影にまつわる現場の雰囲気や可能なかぎり再現しようとする、それじたいできわめて重要な試みにとりこんでいる。準備の過程において、撮影班の行動はいろいろのように認識されていたのだろうか。そのような問いにそくしながら、ここでは撮影班との相互作用によって生じる微妙な推移を描き出すことによって、撮影という行為が現地におよぼすさまざまな影響の所在を提示しようとしている。おそらくこうした関心は、民俗誌的記述のありかたを再考するためにも、きわめて有効な手がかりを提供してくれるはずである。

しかしながら、撮影のために収集した情報を再構成して、それをさらに文字化するという試みは、はたして民俗誌的記述を可能にしてくれるものであろうか。この問題については即断を避けなければならないが、ほかでもない撮影という方法によって明らかになった事実を文字化して記録しておくことにも、それなりの意義は存在するにちがいない。本節を記述するさいには、このような認識を徹底させることを心がけたつもりである。したがって、ここでの記述はすべて、準備の過程を撮影するために必要とされた情報を下敷きにしており、それ以

外の情報をまったくといってよいほど含んでいない。このことは、あらためて強調しておきたいと思う。

なお、準備の過程についてさらに詳しく知りたいむきには、安井吉史編『芋くらべ祭調査報告書』（芋くらべ祭保存会、一九五八年）、坪井洋文「芋くらべ祭——滋賀県蒲生郡日野町中山——」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第十五集、一九八七年）、岡本信男『近江中山芋くらべ祭』（芋くらべ祭保存会、一九八九年）ほかを参照されることをお勧めする。

（橋本裕之）

四、芋くらべ祭の周辺

(1) 祭の社会的背景

①中山の地理的・地誌的概況

芋くらべ祭の行われる滋賀県蒲生郡日野町中山は、琵琶湖湖東の滋賀県南東部に位置する、東西合わせて、世帯数一一六ばかりの集落である。彦根市米原より近江鉄道で南に約一時間、日野駅からさらに車で西に約二〇分、日野町でも最西端にあって、同郡の蒲生町鑄物師・麻生や甲賀郡水口町松尾と山林にて集落境を接している。近年は近江八幡市・八日市市、さらには大津市や京都市への通勤者も急速に増えてきてはいるが、基本的には水田と野菜の促成栽培を中心とした兼業

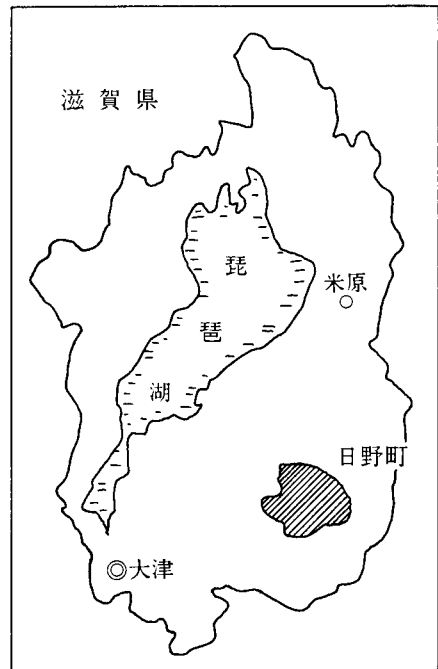


図4 日野町の位置

農家が大半を占め、集落内は未だ農村的景観を強く留めている。

地勢は総地所面積の約六〇パーセントを山林が占めているが、平均標高は約一六一メートルであって、どちらかといえば山深いところにある山村というよりも、丘陵地といった方が適している。東谷の集落の端、丘の稜線からは、日野町の全景や遠く鈴鹿山地が一望されるが、集落はちょうどこうした丘陵の山裾・山腹に位置している。集落内の地形は概ね平坦ではあるが、南北に緩い勾配の谷が幾本か走っており、この谷沿いに棚田が山林を侵食するように拡がっている。一九七七年に蒲生カントリークラブが、集落南方に共有地等の委譲を受けて造成されたが、中山はまさにこうしたゴルフ場に適したような、なだらかな丘あり谷ありの地形にあるといつてよい。

現在、行政的という中山は、小さな用水を境にして隣接する、中山

四、芋くらべ祭の周辺

二集落間で行われるものであり、また二集落の名称も、本稿では、歴史的な呼称である東谷・西谷を用いることにした。

しかし歴史的な概況の説明には、徳谷も含めた三集落で紹介した方がよいので、以下そうするが、一九八八年現在、世帯数は東谷が七三、西谷が四三、徳谷が二三、また人口はそれぞれ二五二人、一六六人、

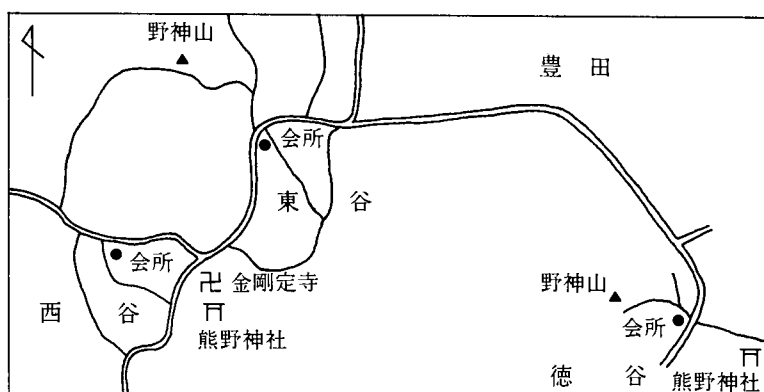


図5 西谷・東谷・徳谷の概略図

東・中山西と称する二つの区で構成されているが、自治的に自治単位の「部落（ムラ）」を呼ぶ場合、東谷・西谷、あるいは単に東・西という方が一般的である。

また歴史的には、この東西中山から東へ約一キロメートル離れた、日野川沿いにある徳谷も含め、この三集落を合わせて、中山と称することも多い。現在でも徳谷を含めて中山全体をいう場合、大字中山とか、中山三谷^{また}といった表現がよく用いられるが、本稿で扱う芋くらべ祭は、徳谷を除いた

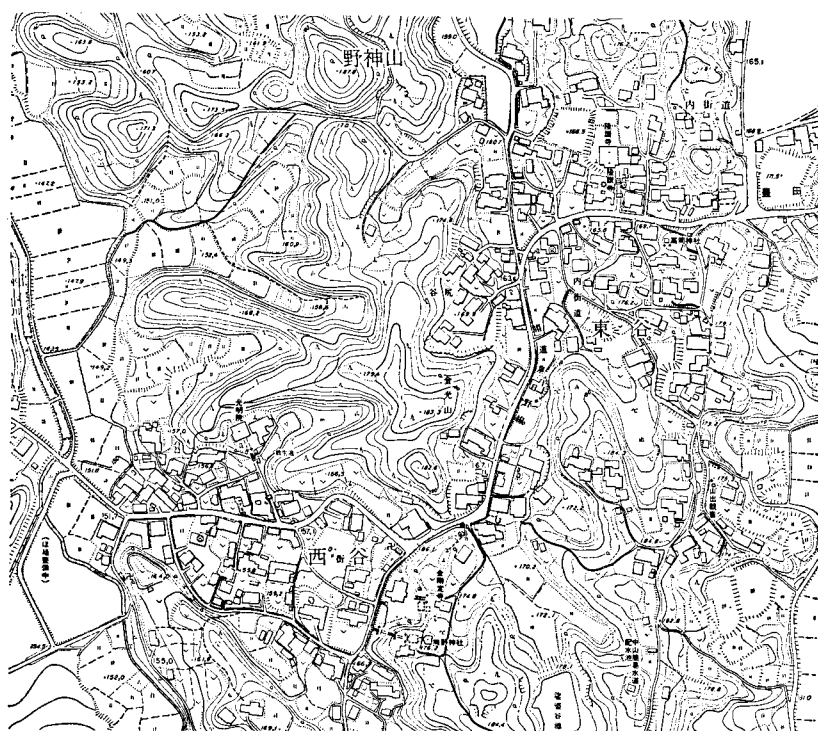


図6 中山の集落地図（この地図は日野町が建設省国土地理院の承認を得て作成した2,500分の1の地図です）

八五人となっている（また表3に一九八〇年の農林業センサスの統計を載せておいたので、参照されたい）。徳谷は慶長年間に東谷・西谷の住人によって開かれた分村といわれ、かつては出屋敷とも称されたという。この徳谷も、現在の地理的区分でいえば西谷区域に鎮座する、

表3 中山三集落の業態別農家数および土地利用状況

	年度	総農家数	兼業別農家数			経営規模別農家数(ヘクタール)				
			専業	第一種兼業	第二種兼業	〇・三未満	〇・三〇・五	〇・五〇・一	一・〇〇・二	二・〇〇・三
中山西(西谷)	一九七〇 一九七五 一九八〇	三九 三九 三九	一 二 三	二 二 四	一六 三三 三六	一二二	六六六	一八四	二〇二	一四一
中山東(東谷)	一九七〇 一九七五 一九八〇	五九 五四 五〇	四 二 三	三 二 一	二〇 三〇 四六	一七〇	四八七	一七八	二二二	二五三
中山徳(徳谷)	一九七〇 一九七五 一九八〇	二〇 一六 一六	一	九 六 一	一一 一〇 一四	三三三	四四二	三三九	一五六	一一一

一九八〇年	集落の土地面積(ヘクタール)			土地利用(経営耕地・アール)			作物別収穫面積(アール)						
	田	畑	山林原野	田	畑	樹園地	稲	麦類	いも類	豆類	茶類	野菜類	飼料 その他
中山西	四七	二	一九二	三三三四	五六九	六	二八二〇	五九	一〇七	一四〇	三〇五	八七	
中山東	六四	一一	一九四	四七三二	八六	六	三七二七	四一	二九	一四〇	三〇五	八七	
中山徳	二四	一一	六六	一一〇〇	五〇	六	一〇二九	二	一	二九	六	一九	一

(農林水産省、一九八〇年世界農林業センサス「農業集落カード」に依る)

中山の総社熊野神社の氏子であって(徳谷では総社の方を大宮と呼んでいる)、例えば四月二五日の春祭り(大例祭)は、徳谷の神主・氏子総代以下責任役員も加わって、三集落全体で挙行される。が、芋くらべ祭はあくまで東谷・西谷の二集落のみで執行される行事であって、それは以下で述べるような様々な歴史的な経緯に基づいていよう。

また東谷に連なった戸数二二〇余戸の豊田は、明治以降に形成され

た集落であり、以前は口中山と呼ばれたこともあるが、鎮守も別であって、普通中山には含まれない。東谷・西谷・徳谷・豊田は、各集落毎に区長以下の役員がいて、行政的にはそれぞれの自治組織として運営されているが、ただ今日でも、三月上旬の物寄り(村寄合)の惣勘定の際に、ソウブセン(惣賦銭)と称する、各集落共通の経費を互いに分担する慣行等も存在する。東谷と西谷二集落の共通会計を二ヶ

谷勘定、徳谷も含める際は三ヶ谷勘定、さらに豊田も含める場合には四ヶ谷勘定と称するが、例えば四ヶ谷勘定の場合、戸数の大小を規準に、徳谷一・西谷二・東谷三・豊田四の割合で負担する習わしとなっている。

② 祭の歴史的背景

西谷の東谷と接した台地の上には、金剛定寺（こんどうじょう）と称する寺院がある。

この寺には、康永元年（一三四二）九月廿三日の「東大寺別院（近江国蒲生郡西生郷）龍護西中山金剛定寺伽藍之絵図」という、当時の中山を描いた絵図が残されている（以下「伽藍絵図」と記す）。金剛定寺は現在、天台宗比叡山延暦寺の末寺であるが、天平勝宝四年（七五二）聖徳太子が創建した古刹と伝えられ、この「伽藍絵図」で見ると、かつては東大寺の別院として、中山一郷に広大な寺領を有し、七堂伽藍が配されるほか、領内には多くの僧坊堂宇の建ち並んでいたことがわかる。郷土史の誌するところによれば、その威容を誇った金剛定寺も、その後幾度かの兵火に遭って、中世の初めより既に衰退の一途にあった。そして元亀二年（一五七一）、ついに織田信長の天台宗弾圧によって全山焼土と化したといわれ、またその廃虚を興して築かれたのが、今日の中山のムラの始まりであると伝えられている（岡本信男一九八九）。

この「伽藍絵図」を見ると、境内の柵の外には「民屋」が立ち並ぶほか、「東谷衆徒」「西谷衆徒」の名もあり、既にこの当時から東谷・西谷の地名が使用されていたこと、また南谷・北谷といった名もあって、今日の中山区域が四つに区分されていたらしいことがわかる。ま

たそこに描かれた金剛定寺本堂や熊野神社の位置をはじめ、道路や地形の位置や状況は、現況と基本的にほとんど変わっておらず、この絵図との比較は多くの推測を可能ならしめる。

例えば今日西谷の会所（集会所）がある地点に、弥勒堂の名が記されているが、この会所の座敷奥に現在も祀り継がれている仏像は弥勒菩薩であって、おそらく西谷の会所の前身は、この弥勒堂であったろうと考えることは、他の史料の裏付けには乏しいけれども、そう間違っているとは思われない。この「伽藍絵図」を見ながら推定していけば、東谷の会所の位置に相当するところには長楽寺と称する寺堂があったほか、芋くらべ祭の祭場である野神山に相当する部分には、赤い鳥居と大山祇神社の名称も見えて、野神と山の神との関連性なども窺うことができる。

ところで、今日東西の宮座が守りをし、芋くらべ祭も直接的に関与している、中山の総社熊野神社は、この「伽藍絵図」では別当熊野神社とあるように、かつては金剛定寺の境内守護社として祀られていたらしい。創建は永和三年（一三七七）、紀伊の熊野権現より勧請したとされるが（その伝承だと「伽藍絵図」の年代とは矛盾するが）、幾度かの火災で焼かれたのち、現在の社殿は貞享初めに再建されたものと伝える。明治四十一年に東谷の日吉神社、西谷の護王神社（牛王）、徳谷の熊野神社と愛宕社の四社が、ここに合祀されたが、現在でも春の大祭には、この熊野神社から東谷の日吉神社跡と徳谷の熊野神社まで渡御がなされる。

またこの神社合祀以前には、芋くらべ祭も、現在のように熊野神社の宮座が直接関与することはなく、山若の当屋制によって行われていたとされる。当屋は東谷・西谷の双方に設けられ、祭祀に奉仕する山若全体の取り締まり役の主神と副神主には、山若の年長者二名が順次当たり、この内の神主の家が当屋を務める習わしであったという。この山若による当屋制は、神社合祀の際に東西とも廃されて、以降、祭祀の準備や総取り締まりは、熊野神社の宮座、すなわちオトナ（大老人）が当たり、また餅つき等、祭祀に必要な様々な準備を行う当屋も、宮座筆頭が神主となって務めるようになったといわれている。

なお、芋くらべ祭に関する最古の記録は、郷土史の誌するところによれば、『金剛定寺縁起』のなかの「高倉院の御宇嘉応元年己丑年大山祇神の靈告に任せて恒例初穡山神乃祭をはじむ是を芋競と称せり」であり、また続けて「蒲生貞秀紀日於西中山毎月一日村預祭礼新儲神座於山中之壇上神供調膳三献九度之礼（中略）以芋長大相交比量長短勝負別東西是称芋競為祭礼又当日近郷会集于此而角力遊戲是為神事之一也往古起高倉帝嘉応元年盖大山祇神之祭祀也（後略）」という記事もある。嘉応元年は一一六九年に当たるが、この縁起書は江戸中期に平群海石榴真人懷英が、それ以前より寺に伝わった古記録に基づいて綴ったものだと推定されている（安井吉史編一九五八）。

③ 祭と村落組織

芋くらべ祭の祭祀組織を述べる前に、その基盤となっている東谷・西谷の各村落組織について、祭祀組織を理解するための最小限の情報

を提供しておこう。

〔区役員〕

次節で述べるように芋くらべ祭の祭祀組織は、年齢階梯的に编制されているが、それと並行するように、実質的な村落の運営組織も、基本的には年齢階梯的な構成を示している。

東谷・西谷とも、区長・農業組合長・代理者を、「村の三役」と称している。もちろん、これは村落自治を代表する政治的な役職であって、個人的な資質や職業等、年齢以外の要因も働くが、これらも務める年代というものが、ある程度決まっており、また年齢順に務め上げていく。一九八八年度の東谷の三役をみると、区長と農業組合長は一九三七年生まれの五三歳、代理者はいわゆる副区長に相当するが、東谷ではその見習いの期間ということで、一九四七年生まれの一〇歳年下の者が務めていた。なおこの三役に、副長（農業組合副組合長・受検（米の統計主任）を加えて、五役というが、東谷の場合、他村から婿養子に入った者は、この内の役を必ず何か一〜二年務めなくてはならないという。

〔成員資格と年齢秩序〕

東谷の会所には、二枚の宮座順番位を掛け板が掛かっている。うち一枚は一九七六年に作成されたもので、それ以後に亡くなった者の名前には黒墨が引かれ、これを書き改めたものが、一九八八年の宮座順番位の掛け板である。これにはオトナの筆頭（神主）以下、東谷の一六歳以上の山若入りした経験のある男子全員、八八名の名前が記され

ており、婿入りをした者を除けば、それがまた全て年齢順に並んでいて、このムラの社会のあり方を、極めて象徴的に表している。

山若入りできる男子は、東谷の場合、次のような資格が必要である。すなわち、このムラで生まれた長男であること。宮参りに際するハナノトウ（花の頭）と五年間の初穂料を納めた者であること。さらに数え八歳から一四歳までの山子を経験した者であること。この三つが絶対的な必須条件であり、かつては山子の経験がない他村からの入婿は、山若入りもできなかったとされる。戦後、一九五五年頃より婿入りした者も年齢に関わらず、山若の末筆に加わることで参加が可能になったが、東谷の場合、将来も永住する可能性の高い、一家の相続者だけに限られることは、今日でも変わっていない。

一方、戸数の少ない西谷の場合、かつてはこの三条件が同様に厳守されていたが、一時山子の数が二～三人までに減少し、祭礼に支障を来したことから、一九五八年、規約を改めて、入婿を認めただけでなく、次三男以下であっても、将来分家等で永住する予定のある者、さらには希望者であれば、参加が認められるようになった。このように現在戸数の倍も異なる東谷と西谷では、様々な点で微妙に異なるところもあるが、以下は基本的に東谷を中心に記述していくことにする。

「子ども組」

祭祀組織の中心となる山子・山若・オトナに関しては、次節で改めて述べるが、これらはいくまで祭祀の組織であって、これとは別に、ムラの社会には、実質的な村落運営を担う集団が存在し、これも年齢

階梯的に組織、編制されている。

例えば、男児は長男次男の区別なく、小学校に入ると、正式な名称はないが、一種の子ども組に参加して、ムラの年中行事の一端を担うようになる。主たる行事は、八月一日と一六日の雨乞いと八月二三日の地蔵盆、そして一二月の終わりの「地蔵さんの門松」と呼ばれる行事であるが、これは小学校に入学すれば参加できるため、一年生から参加できる。しかし山子は数え年八歳、ほぼ二年生からであり、したがって、八月に入ると雨乞いの準備のため、子どもたちは山に入って集団行動をとり始めるが、一年生が許されるのは、地蔵盆までであって、二四日からの芋くらべ祭の準備には、加われない。

なお、ここである雨乞いとは、他の地方でいう精霊迎え・精霊送りの行事であり、中山でも「オショライさんの行事」と呼ぶこともあるが、その準備は八月に入ると直ぐに始められる。特に四日をザンバラの盆行事といい、男の子は全員で各戸を回って女竹をもらい集め、これをもとに一三日の前日までに、高さ一・九メートルの円筒形の松明を二基作り上げ、これを一日と一六日に一基ずつ燃やすこととなる。また地蔵盆は、東谷では戦後、昭和三〇年代に、女の子の地蔵盆が別に組織されたが、西谷の場合は女子も含めて一緒に行われるようになった。また東谷の女子の地蔵盆は、隆讃寺の前の地蔵堂で行われるが、参加者は男子と違って数え年ではなく、幼稚園から中学一年生まで、またかつてはこの地蔵堂では年配の婦人たちによる、数珠繰りの行事が行われていた。この数珠繰りは、西谷では現在でも会所において、

子どもたちの地蔵盆とは別に催されている。

〔青年会〕

次に青年会も、今日ではほとんど活動が見られなくなったが、山若とは全く別な組織として存在する。山子は長男・次三男の区別なく加入できるが、前述したように山若は長男だけに限定される。これに対し青年会は、一五歳になれば、長男・次三男の区別なく、居住者全員が参加し、かつてはもっぱら山林の管理に携わったという。

その仕事とは平たくいえば、山荒らしの見回りであって、毎年七月はじめの半夏至に、丸一日かけて、領マワリあるいは半夏至マワリと称して、区長と共に、中山の地内の集落境を行列して見て歩く行事があった。ほかに山マワリと称して、冬の期間、年三〜四回、山林を見回ることも、青年会の役割であり、これらは両方とも昭和三〇年頃まで行われていた。この青年会に加入したばかりの一五歳を新役と呼んだが、その加入に際しては、新役の挨拶のほか、会則の朗読等があったという。入会は一五歳と明確であるが、脱会は一五歳ぐらいというだけであって、あまりはつきりしていない。

〔熊野会〕

老人も今日では老人組合の組織がある。これは男女一緒であり、以上述べてきたものとは原理が異なるので省略するが、このほかに比較的新しいものと思われるが、オトナを引退した者たちで構成される、男だけの熊野会という組織もある。

宮座を抜けた者をオオオトナ（大大老人）とも呼ぶが、熊野会は基

本的には親睦会的なもので、特に目だった活動はない。一月二日の山の神起こしの準備が終わったあとの、宮座の新年会にこの熊野会のOB連を招待することになっているが、実際に来るのは前年の暮れに抜けた前神主一人ぐらいのものという。またこれが神主が宮座を抜ける、オトナヌケの儀式ともなっているが、以上、このように中山の基本的な社会の構成原理は、結局、年齢階梯制であって、男子の場合、その一生が次のような階梯を踏んでいるといえよう。

ムラに生まれるとハナトウを納め、まずは氏子入りをする。山子に入り、抜けるまでは長男・次三男の区別はないが、山若入りする際に、ほぼ将来の担い手が選別され、それを終えると、初めてムラの正式な一人前の構成員としての資格が生まれる。青年会の活動や、さらにムラの三役あるいは五役といった実質的な村落運営の現場を経て、宮座入りをして、ムラを宗教的な面から指導する神事に携わり、特に最後の年、神主を務め上げることで、ムラの一構成員としての義務を果たし終え、ようやく引退となる。こういった人生のコースが、あらかじめ年齢を規準に設定、用意されているのが、中山に限らず、この地方の社会的な編成の大きな特徴となっている。しかしこのような階梯を経ることは、詳しくは後述するが、一つの理想であって、現実には極めて困難なことであった。

④ 芋くらべ祭の祭祀組織―山子・山若・オトナ―

さて、芋くらべ祭の祭祀の中心的な役割を担うのは、山子・山若・オトナであるが、その個別の具体的な役割については、二、三で触れ

表4 芋くらべ祭一九八八年度名簿

西谷										東谷									
山子					山若					オトナ					山子				
⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	⑥	⑤	④	③	②	①	⑪	⑩	⑨	⑧
小谷恒介	落合直樹	杉村辰雄	小谷隆介	小西重雄	高岡敬央	落合康弘	小西正義	岡崎健一	瀬川順久	高岡晴規	瀬川裕道	瀬川晶道	小西勝久	瀬川知弘	高岡峯男	岡本信久	西村直人	西村宗次	瀬川輝
五六年	五五年	五四年	五四年	五三年	五三年	五三年	五一年	五一年	昭和五〇年	昭和四六年	四六年	四六年	四七年	四七年	三三年	五六年	五五年	五四年	五三年
三月一六日	三月一七日	八月一五日	八月一四日	九月一〇日	六月一六日	五月二五日	二月二三日	一月三日	七月一〇日	四月一六日	八月二〇日	八月二〇日	九月六日	一月一九日	二月一四日	三月一六日	六月一四日	六月一四日	四月一四日
山子					山若					オトナ					山子				
⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	⑩	⑨
岡本信久	西村直人	西村宗次	瀬川輝	古川章博	岡本武志	西村育大	石山一清	高岡雅彦	高岡透	西村貴久	岡本毅	杉浦哲也	岡本忍	岡本昭彦	岡本忠	月原一郎	西村茂	岡本幹雄	高岡新治
五六年	五五年	五四年	五三年	五三年	五三年	五二年	五二年	五一年	五一年	昭和五一年	四八年	四六年	四六年	四六年	四五年	四五年	昭和四四年	一四年	大正一三年
三月七日	二月二九日	六月一四日	四月一四日	九月七日	三月一九日	二月一五日	二月一五日	四月五日	二月一四日	二月一四日	二月一六日	一月一三日	九月一日	三月一六日	五月七日	五月九日	一月一日	五月九日	六月一日

たから、ここではその祭祀組織の組織・構成面に限定して、紹介していくことにする。

〔山子〕

既に述べたように山子は、数え年八歳から一四歳の男子全員で構成される。人数の限定はなく、表4でみるように、一九八八年の場合、東谷が一人、西谷は一〇人であった。山子になることを、山入り、山子入りというが、特に儀式めいたものはなく、各家で赤飯を炊いて祝うぐらいであるという。東谷にはこの年、山入りの子どもが一名あったが、彼の場合、八月二日の雨乞いの準備から参加し、以後、九月一日の芋くらべ祭の当日まで、ほぼ毎日朝から晩まで、山子の仲間と行動を共にした。それ以前は、同級生の他のムラの子どもと遊ぶ方が多かったという。

また彼の場合、三月生まれであり、山子の⑨⑩（以下、○に数字は表4に対応）とは学校では同級生であるが、数え年であるため、山入りは一年遅れた。これはかつては山子に限ったことではなかったが、同じ年生まれの方が多数いた場合、月日の早い者が上位にくるため、次のような役を飛び越すような事態も起こり得る。例えば表2の山子①②は、生

まれが三日違うだけの同級生であるが、山子仲間の頭である一番には、集団を全体的に統率する役目があり、その命令は絶対的であって、それに逆らえば制裁が加えられることも、ある程度大人たちからも黙認されている。その統率方法を観察していると、祭場の準備等で、身体を動かし実際に作業を行うのは三番以下の山子であって、一番と二番はそれを監視するだけであり、山子の二番は一番から相談を受けることもあるが、あくまで監視と相談役であって、命令と指示を直接下すのは一番に限定されている。東谷の①②は、もう一年翌年も山子の一番と二番を務め、その年の一二月の地藏さんの門松を最後に、二人とも山子を辞めることになるが、結局②は山子の一番に上がれないまま、抜けざるを得ない。

こうした事態は、子どもの多かった戦前には、しばしば見られた。一九三五年頃は、東谷には山子が三〇人もいたといい、例えば一九二五年生まれのオトナ②の場合、当時同じ年が六人いて、山子の一番になれなかったばかりか、六番のままで脱会した。以前は山子が夜に山から戻る際には、火振りと称して、松明を灯し、大きな円を描くように振り回しながら、皆で「ソーライ、ワーライ」と斉唱して下山する習わしであったが、この火振りも、一番から五番までの特権であって、結局オトナ②は、正式には松明を一度も持つことができなかったという。

このように年齢階梯的とはいっても、必ずしも下から役を順々に繰り上がっていくわけではなく、役を飛び越すような事態は、山子に限

らず、かつては山若・オトナにもしばしば存在した。が、オトナの場合、それまで山子から務め上げてきて、神主を飛び越すことは、あまりにもひどいということもあって、規約の改定が何度か繰り返されているが（これについては後述する）、山若の場合には、これとは逆のケースが以前しばしば起こって問題となった。それを紹介しながら、次に山若の組織を概観、検討してみよう。

〔山若〕

山子を数え年一四歳、満でいえばほぼ一三歳の中学校一年生で抜けると、二年間の空白があったのち、数え年一六歳で山若に加わる。これを山若入りと称するが、前述したように、東谷の場合、山子とは違って長男だけに限定され、また定員が七名と限定されていることから、次のような編制が施されている。すなわち、新加入者を山若の最下位七番尉に加えるが、その新加入をもって、他の者が順次地位が繰り上がるというもので、したがって、山若入りがなければ、翌年も順位が変わらず、また山若を務める年限は、新加入者次第ということになる。例えばある年に三名の山若入りがあれば、一挙に三つ地位が押し上がることになるが、ゆえに四年で山若を終える人もある一方、昭和二〇年代後半以降には、次のような事態も発生した。

戦後経済が復興すると、戦前までとは違い、それまで家で農業に従事していた青年層が、中学校を卒業すると、長男であっても、都会に出る者が増えた。山若入りする者が激減し、先の一九八八年の宮座順番位でいえば、一番に相当する一九三六年生まれのあるインフォー

マントの場合、自身の山入り後、三年間新加入がなかったため、七番尉を三回行ったほか、計一年間山若を務めたという。現在は自宅から高校に通う者が増え、それほど深刻な事態はなくなったが、後継者難は今でも続き、事実、表2でもわかるように、一九八八年の西谷は、一人欠員の六名で行われ、六番尉が七番尉の役を兼任した。

この問題は戸数の少ない西谷においてより深刻であるが、東谷においても、その状況はさして変わらない。元もと東谷には、万一の事情がある場合、義務金を負担することで山若の奉仕が免除される、「座」と称する制度があったが、一九八八年も実は二名の免除者があった、毎年八月一日に奉仕者選定会議を催して、山若の確保に努めている。義務金は昔から米一俵が相場とされ、それを五年間納めれば、のちに宮座入りする権利は確保される。

「オトナ」

さてオトナ、すなわち宮座衆は、十二人衆とも呼ばれるように、東西六名ずつ一二人で構成される。それぞれの筆頭を神主といい、昭和六三年の場合、東谷の神主が正神主であり、西谷の神主は副神主といって、その補佐に当たる。また正神主をミヤモリ（宮守り）とも呼んだが、東西が一年交替で、これを務め合い、正神主は一年間の祭祀に關する一切の総括の任に当たる。

一月三日の山の神起こしから始まり、春例、芋くらべ祭り、秋の大例ほか、毎月の月次祭等を行い、一二月一二日頃行われる月次祭を最後に、神主を終えて宮座を抜けるが、そうすると前年の副神主が正神

主に昇格、また一二月二三日頃、宮座入り、オトナ入りと称する新たなオトナを、神主の抜けたムラの側から補充する。結局、宮座入りから一二年間務め上げて、オトナヌケすることになるが、山子や山若と違って、加入の年齢が決まっているわけではなく、同じムラの神主やオトナが死亡等で抜けることによって、加入が行われる方式をとっている。表2でみるように、東谷の神主より年長者の西谷の神主が副神主であるのは、こうした事情によるのであって、年齢の序列はそれぞれのムラのなかでのみ貫徹されている。

この宮座入りの加入の儀式を、一二人振舞いと称し、毎年一月六日頃に行われる。熊野神社にまず集まった先輩のオトナの一人を、家に招待して御馳走するものであるが、新入者が仲間入りの挨拶をする、と、神主が「オトナになって、お宮さんに仕えることができて、おめでたいことです」といった祝いの言葉を向ける。この一二人振舞いのほかに、六年経って六番目になると、上位六人を六人衆と呼ぶが、今度は六人振舞いというものを行い、また神主になれば神主振舞いというものもあって、このように段々と上に昇っていくのである。また三番目をクラモト（蔵元）と呼び、神社の鍵を預かり会計を担当する役を務める。

ところで宮座入りは、山若の経験者あるいは座を納めた者のなかから、先の宮座順番位にしたがって、一二月一日にその該当者に対し新たな加入を薦めに行くが、その場で一度でも断ってしまうと、永久に宮座入りはできない習わしとなっている。戸数の少ない西谷の場合、

山若も半強制的であり、宮座入りも断れない仕来たりとなっているので、この慣行はないが、東谷の場合、かつては入婿も、山若入りした際の順番で、宮座順番位が決まっていたため、七〇歳過ぎの者に対してオトナ入りを誘うこともままあった。その年齢から一二年務め上げることが無理だとして断る者が多く、また家庭や職場の事情等、様々な事情で断る者は現在でもそうめずらしくない。

〔祭祀組織の改編〕

このように戸数の多い東谷は、山若でみた後継者難とは全く逆の問題を、システムの抱え込んでしまっている。一九五五年頃には一時宮座の定員を変え、東谷のみオトナを七人としたり、またこの頃それまで二年制であった正神主の任期を現行の一年に改正したり、入婿に対しては山若の順位とは切り離し宮座入りを年齢順に改めるなど、様々な改編が試みられていた。

しかし、正常ならば宮座入りは二年に一人であって、戸数が倍近くも多い東谷には、どうしても構造的な無理が生じてくる。東谷のオトナ①が宮座入りしたのは五五歳のときであったが、近年は六〇歳前後となってきたおり、現状のままでは益々遅れていく傾向を示している。単純計算すれば、この年の山若一番尉が宮座入りできるのは、現在宮座順番位が八一番であるから、何と一四九年後という数字が出てくるが、こうした構造的矛盾を内包してしまった一番の要因は、元来別々にあった東西の宮座を、明治の神社合祀に際して、一本化したことに起因していると考えられる。

前述したように、神社合祀以前は、総社としての熊野神社は存在したが、東谷は日吉神社、西谷は牛王神社を崇敬し、それぞれ別の宮座を有していた。熊野神社の祭祀は、それが西谷にあった関係から、主として西谷が従事していたらしい（北原真智子一九五六）。宮座を一本化した理由はよく分からないが、芋くらべ祭もそれまでは山若の当屋制であったわけであるから、この頃村落の祭祀面に関して大きな構造的変革が行われたことだけは確かである。東谷で聞くと、昔は金持ちでなければ、宮座入りはできず、今はいい時代になったといった話をよく聞いたが、それらもこうした歴史的变化の中で捉えなければならぬ。

このように「伝統」をそのまま継承しているように見える芋くらべ祭も、その時々状況に応じた改編が行われて、維持されてきているのであって、決して古くからの「伝統」が固執されてきたのではないことを、ここで改めて確認しておきたい。

(2) 芋くらべ祭の日の中山

① 一九八八年九月一日の中山

映像の第三部には、「九月一日の中山」というシークエンスを設けたが、これは次のような視点によっている。それはすなわち、現在の中山の人びとにとつての「祭」の意味であり、芋くらべ祭の当日、祭以外の、中山で起こっているさまざまな現実を、映すことによって、現代における祭の意味と実態を、描き出そうと試みたものである。

たしかに、芋くらべ祭は、前章までに見たような「伝統」に支えられた、かつ村一番の祭礼ではあるが、今日の現代日本の社会システムの中では、宮座衆・山若・山子といった関係者以外の多くの村びとは、当日、祭場にも行かずに、会社や学校、農作業、家事等に出て、普段とほとんど変わらない日常生活を送っているのも、ひとつの現実である。したがって、視点を変えれば、芋くらべ祭も、ある意味では、昭和三年に指定された県の文化財保護条例や、あるいは現代の技術文明や教育制度等に支えられているともいえ、そうした現代における祭りの一つの典型として、一九八八年の中山の現実を、「映像」という新たな手段によって、資料化、定着化するのが、当初構想した目的であった。

芋くらべ祭を直接的に表裏で支えている人だけでなく、こうした祭とはほとんど無関係に暮らしている人々によっても、祭は支えられているのであって、さまざまな角度から、その姿も描くことで、一九八八年という日本の歴史のある一段階における中山を、丸ごと把握しようとしたのである。またこうした「俗なる部分」に視点を当てることによって、いかなる部分が祭と係わり、またいかなる部分が普段とは変わらない生活が維持されるのか、そうした多様な人間の交錯のなかで続けられている「祭の現実」を、明らかにすることも目的とされた。

映像では、野神山や熊野神社といった、いわば「聖なる空間」を撮影するカメラのほかに、こうした視点から別に一台のカメラを配し、

九月一日の中山の「俗なる空間」を、そこに入ってくる現実をありのままに撮影し、偶然映し出されたこの「日常」を、四つ割りの画面で編集した。ここには、洗濯物を干す主婦や内職で電線を配線する主婦、農作業をする女性や草を焼く女性、広場の草むしりをする老人や縁側で雑談する老女たち、また公園で祭に飽きた幼児を遊ばせる若い嫁や乳母車を押す老女、さらには新築の建設現場の様子や瓦を葺く職人等、さまざまな「日常」が描かれたが、本稿では特にポイントを絞って撮影した、三つの光景を紹介することで（基本的には、中山における異なる三つの家族の状況を、家族ごとに撮影した）、「聖なる空間」以外で繰り上げられる「九月一日の中山」を代表させることにする。

②仕出し屋家族の一日

中山は東西合わせて一一〇余戸の集落であるにもかかわらず、東谷・西谷にそれぞれ一軒ずつ、現在二軒の仕出し屋がある。近畿地方では一般に、冠婚葬祭には仕出し屋から料理（オツクリやオードブル）を注文するのが慣習化されているが、中山でもそれは同様である。

今日の中山では、祭といっても一般家庭では、バラスシ（ちらし寿司）を作るのがせいぜいであって、個々の家レベルの祭への対応は、日常生活も同様であるが、現代においては既に、市場経済（商品経済）によって補われている部分が大きく、料理の仕出しや酒等のほとんどを、こうしたムラの商店に依存しているのが、実情である。また料理等の準備は、各家で女性たちが当日までに進めておくものの、不意の来客など、当日の急な状況の変化に対処するときには、こうした商店

に依頼するので、個別の家のいろいろな緊急事態の情報が集まる場としても、仕出し屋の動きは注目された。

したがって現在の祭において、当日最も忙しいのは、この二軒の仕出し屋であって、祭をこうした形で脇から支えている裏方の、行動を追跡することで、近年大きく変貌した、中山の集落の実態も描かれよう。

中山にこうした仕出し屋が登場するのは、もちろん昭和になってからのことである。戦前には高岡商店という「地の人」が魚屋を始めて、直会等の、村の行事の賄い一切を行うようになっていった。その後古川という仕出し屋が現われたが、戦時のどさくさで祭どころではなくなり、いつの間にか廃業に追い込まれたという。戦後、昭和二五年に、戦前までは魚を扱っていた、東谷の丸茂商店が仕出し屋業も始め、後に西谷にも現われた小西屋の二軒で、競って冠婚葬祭の料理を扱うようになる。かつてはどの家でも、隣村の親戚や知人を招いて、盛大に祭を祝っていたので、祭の当日はほとんどの家が仕出し屋に、オツクリやオードブルを注文していたという。それが昭和五〇年頃より、祭といっても、オトナや山若・山子といった祭直接の関係者以外の家では、新戚も呼ばないようになってきて、現在では招待客を呼ぶような家は（すなわち仕出し料理を注文する家は）、三分の一にも満たない状況であるという。

こうした変化の要因は、もちろん現代日本の置かれた社会状況の変化が大きいが、また祭日が九月一〇日から、一日に移行したことで、

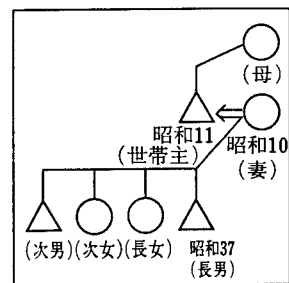


図7 仕出し屋の家族構成

いたが、現在では翌日が日曜でないかぎり、宴を張っても、翌朝の出勤等に差し障るため、遅くとも夜八時頃には解散してしまうのが、普通であるという。

さて、われわれのカメラが追った、東谷の丸茂商店の一日を紹介していくが、この家の家族構成は、図7のようになっている。丸茂商店は、一九七〇年より緑山荘の名で会席兼結婚式場もオープンしたが、普段は魚をはじめ食料品全般を商う店を、もっぱら世帯主の妻が切り回し、魚の仕入れや仕出しを世帯主及び長男が行うほか、世帯主の母もときどき店の方を手伝っている。長女以下は職場を外に持っているが、祭当日は長女らも職場を休んで、一家挙げての仕出しの料理・配達に追われることになる。

前日までに注文を受け付け、また焼き魚等の仕入れは前日に用意しておいて、当日は朝の六時から、焼き魚の準備から始める。調理師の資格を持った世帯主と長男が、マスやブリを焼きはじめるが、その他のオツクリ（お造り）用の刺し身魚は、午前七時、世帯主がいつもの

盆の招待との間隔がなくなったこと。これが芋くらべ祭の日に宴を張ることを、相互の遠慮も手伝って、以降、極端に小さくさせた要因であると、中山の多くの人たちはそう理解している。かつては前日から、あるいは当日も夜遅くまで、酒を呑みあつて

の子たちが、軽トラの後ろにちゃっかり乗って戻ってきた。それから待つこと、二〇分ばかりして、東谷の男の子が徒歩で集団下校して来た。東谷の入り口にある高岡神社のところで、別れてそれぞれ自宅に向かうが、一二時前には、熊野神社にまた集合しなければならないので、家に帰ると直ぐ様、昼食をとり、木綿がすりに兵児帯の山子の衣装に着替えさせてもらって、祭に向かう。以下、祭礼中の山子の様子は省略するが、祭場での祭がはじまった二時過ぎに、山子の母親も妹たちを連れて、演じているわが子の晴れ姿を見物に訪れた。ただ妹たちは祭に飽きてしまつて、しばらくすると、祭場の脇で遊びはじめ、それを別々に見物に来ていた祖父や祖母が交互に見守っていた。また山子の父親は、普段通り会社に出勤し、夕餐にならないければ帰つてこない。

午後四時半過ぎ、芋の長さが接近していて、いつもより長引いた祭りが終わると、山子たちが芋を担いで、それぞれの神主の家まで運べば、ここで山子は解散となる。解散するや否や、年少の山子は駆け出して家に戻って行ったが、信久君の場合も、家まで駆けて戻り、普段着に着替えるや否や、直ぐに母親をせかして、妹たちと一緒に、東谷の会所の前に出ている出店の玩具屋に駆け出して行った。子どもたちにとっては、この日は祭自体より、この祭に集まる露店で買い物をするこのの方が、楽しみだったのはいうまでもない。

④祭を支える女性たちと初ヨビ

芋くらべ祭も、個々の家のレベルで捉えれば、かつては親族や知人等との交流の重要な機会でもあった。各家の女たちは、そのレベルに

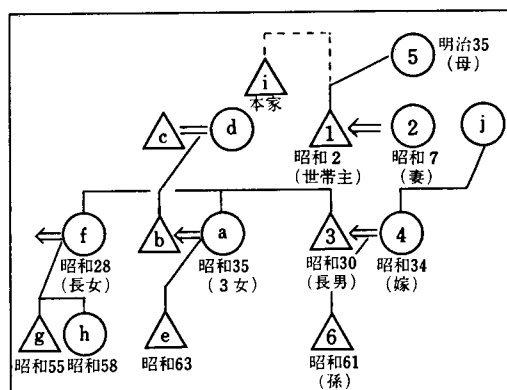


図9 初ヨビの家族構成と招待客

おいて、料理等の準備を
 たり、来客のもてなし・接
 待係として、交流の場を責
 任をもって取り仕切る、重
 要な役割を果たしており、
 男たちが祭の表立った「公」
 の役割を演じるとすれば、
 隠れた形で「私」的な部分
 で裏側から祭を支えてきた
 のが、女たちであったとい
 えよう。

たように、この一〇数年来、極端に招待客を呼ぶことが減ってしまつたが、初ヨビ（初呼び）と称し、その年通婚のあつた家では、新たに姻戚関係を持った親族を招いて、接待の儀式と宴を催す習わしだけは現在でも続けられている。映像では、前年三女が同じ日野町の駒月へ嫁いだ、東谷の久保孝三氏宅を対象に、その準備や接待の様子を撮影し、こうした祭を裏で支えている女性たちの姿も、積極的に描こうと努めた。その久保家の家族構成、およびその際に接待された招待客の親族構成は、図9の通りであり、また久保家も基本的には同じであるが、中山の一般的な家屋の間取りを、概略的に図10で示した。

この初ヨビは、新婚の年あるいは前年の、芋くらべ祭以降に結婚が

四、芋くらべ祭の周辺

さて、久保家の場合、世帯主の孝三氏がオトナでもあったため、宮座の方の奉仕もあって、多少変則的に行われた。本来なら祭場へ招待客を案内するのは、その家の主人の役目であるとされているが、妻が

初ヨビは省略されるという。

	カッテ口 カッテ (オクドリン)	ダイドコ	へ	ヤ
	ササラド	カミタナ	ブツダン	
ウシゴヤ	カドドマ	デイノマ	オクノマ	
	玄 関			

図10 中山の家屋の間取り

なされた家で開かれるが、この芋くらべ祭が、珍しい祭礼であるということもあって、この祭見物を兼ねて催される。嫁の実家か娘の嫁ぎ先と、向こう方の親戚を招待して、カマドミセ（竈見せ）の儀式をはじめ、結婚式では簡略化された、双方の親族紹介を行うために、こちら側の親戚も集めて催される。なお中山同士の縁組の場合には、

それを代行して務めたので、その他も含め、妻の占める役割が一般の初ヨビよりは、少々多かったといえるかもしれない。が、初ヨビにおいては、妻や嫁といった女性が、主となって活躍するのが、そのひとつの特徴であって、また家の事情がない家などないのが普通であろうから、この事例を中山の現代における初ヨビの典型であるといっても別段、差し支えはないだろう。

料理の準備は、前日から始められるが、孝三氏がオトナであったため、前日の午後は御鯉づくりに忙しく、近所のやはり御鯉を作らねばならない役の家の女性と、共同で御鯉が作られた。結局、初ヨビの本格的な準備は当日の朝から始められたが、しかし当日の朝もカモウリなど、供物の方の料理もあるので、妻と長男の嫁だけでは手が足りず、先に同じ日野町の松尾に嫁いだ長女の協力も仰いで行われた。また招待客の現われる少し前、仕出し屋からはオードブルと焼き魚も届けられた。

今日の主役である三女の嫁ぎ先の両親が到着したのは、予定通りの午前一一時半ちょうど。三女の手には生まれたばかり、四か月半の赤ん坊がだき抱えられている。玄関を入ったところのカドドマで、まずはササラドから出てきたその家の主婦との間で、土間において丁寧な挨拶が何度も繰り返される（孝三氏宅は改築してしまい、ササラドの部分は壁になっているので、主婦はカッテからササラドの左側を通して出る）。しばらくすると、デイノマの障子襖が開き、今度はその家の主人との間で挨拶が交わされたのち、主人がどうぞと言って、客を

中に上げる（孝三氏もこのときには熊野社から抜けて戻って来ていたから、この最初の挨拶だけは、主婦では代行できない重要な主人の役割といえよう）。

デイノマの上座（右側）に主人、上がり鼻のところに招待された嫁ぎ先の両親が座し、改めてまた何度も丁寧な挨拶が繰り返される。その間に、三女の祖母に当たる隠居や長男の嫁、また長女がダイドコの側から、次々と挨拶に現われる。しばらくして、孝三家のおモヤ（本家）の主人が来訪し、先ほどに比べれば簡単ではあるが、同様な丁寧な挨拶が交わされる（挨拶が簡単なのは、初ヨビの対象が、あくまで三女の嫁ぎ先の両親であるからであろう。また予定ではおモヤの主人ではなく、妻の実家の兄を招くことになっていたが、その急な事情で、当日変更となった）。そのおモヤの主人がデイノマに上がると、主人が双方を簡単に紹介するや否や、それではどうぞと言って、今度はオクノマの襖を開けて、料理が綺麗に並べられたオクノマへと案内する。

オクノマでは先ほどとは違い、招待客の方を上座に据え、主人はデイノマを背にするようにして座る。ビールが注がれ、昼食が始まるが、しばらくして遅れてきた長男の嫁の実家の母も、オクノマに通される。上座は結局、その中心に三女の嫁ぎ先の両親を据え、向かってその左側にオモヤの主人、右側に嫁の母が並び、主人の孝三氏は下座の中央で、ビールを注いだり、その接待を行う。ヘヤの方から、妻や嫁や長女、また次女も手伝って、次から次へと新しい料理が運ばれて、昼食

の宴が賑やいでいく。

午後二時少し前、芋を祭場に担ぎ上げる山子の掛け声が聞こえてくると、招待客も家の中から出てきて、その一行の通り過ぎるのを家の前で見送る。一旦、家の中に戻ってから、しばらくして、妻の先導の下に招待客のみが祭場の野神山に登っていく。残った嫁や長女、三女が昼食の跡片付けをして、三時を過ぎてから、子どもたちを連れて、長女や三女も祭見物に向かう。家の留守番は、嫁と祖母の役割であった。また祭にすぐに飽きてしまった子どもたちを連れ、山を下りて、下の児童公園に連れて行って遊ばせたのは三女であった。

午後四時半過ぎ、祭見物を終えた一行が戻ってきて、まずはデイノマでくつろいで、祭の話題に花を咲かせている。祖母も加わって、昔の祭の様子を聞かせている。しばらくして孝三氏も宮座から戻ってくると、そのどうぞという挨拶

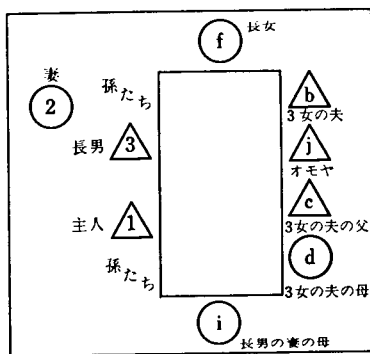


図11 初ヨビの座席順

で、オクノマの襖が開けられ、中に通される。既にそこには夕飯の用意が綺麗にされていて、先ほどとはほぼ同じ座順で席につくが、夕食が始まってしばらくすると、会社が終わって駆けつけた、長女の夫や長男も加わって、最終的には図11のように並んだ。ただし

主婦と嫁は、食事の運び下ろしに忙しく、また三女はもっぱら子どもの相手を務め、ほとんど席につくことはない。また六時過ぎ、今日来られなかった妻の実家に、料理のお裾分けを自動車で運んでいったのも、三女であった。こうして当日八時過ぎまで、初ヨビの宴は続けられ、散会となったのは午後九時頃であった。

(3) 周辺農村の野神祭

基本的には中山の芋くらべ祭も、中山周辺の農村一般で行われている、野神祭のがみまつりと称される行事と同種の農耕儀礼である。このことは、例えば祭場のある山を野神山と呼ぶこと、また周囲の農村の野神祭と比較した場合、行われる時期や神饌、また儀礼等が極めて類似していることから、ある程度断定できよう。すなわち中山における野神祭が芋くらべ祭であって、映像記録に際しては、その相対化の意味で、隣接する集落である上三十坪の野神祭と、また東西中山の分村であると伝える徳谷の野神祭も、併せて記録した。

ここでは一九八八年に行われた、その二つの野神祭を、特別な解釈を加えず、儀礼の過程に沿って、その行程を中心に記述し、またそこで得られた必要最小限の情報のみを加えるだけとした。さらに第三節として、今回映像には時期的な関係で記録できなかったが、芋くらべ祭と関連の深い、一月三日に行われる山の神起こしの行事も併せて記述し、芋くらべ祭の根源的な意味を浮彫りにするための、資料に供したいと考える。

① 上三十坪の野神祭

日野駅から中山に向かう道の途中にある上三十坪かみそつでは、毎年八月二三日が野神祭の祭日である。この上三十坪で行われる野神祭は、ズイキ祭とも呼ばれ、祭礼当日、野神に奉納する鳥居を、里芋の茎すなわちズイキで作るところに、その特徴がある。

上三十坪の野神は、集落内に三カ所祀られており、野神講と称し、それぞれ講中が別に組織されている。各講中はそれぞれカミ（上村）の講中、ナカ（中村）の講中、クボ（久保）の講中と呼ばれているが、これは集落内を内部区分する地域的呼称のうちの三つと重なっており、講中は近隣を規準に地域的に構成されているといつてよい。八月二三日当日の朝から準備が始まり、午前中それぞれ別個に野神祭が行われるが、午後は三つの講中が一同に会して、会所で合同の直会が行われる。以下は三つのうちナカの講中を中心を追って観察した、昭和六三年の祭礼当日の、朝の準備からの行事次第である。

〔祭の準備〕

午前八時より祭場づくりが始まる。ナカの講中は一四軒で構成されているが、今年の当屋とその手伝い一人を除く、一二人が祭場の準備を行う。各戸から一人ずつ戸主が出るが、代わりに女が出て構わない。

まずは前年の竹ヤライを片付け、野神境内の草を刈り、これを脇の川原で燃やす一方、竹割りを行って、新しい竹のヤライで神域を囲ったり、のちに供え物を載せる竹の神膳をこしらえたりする。しばらく

するとズイキの鳥居づくりが始まる。高さ一メートル強の鳥居が二本作られるが、後述する理由で本来鳥居は一本だけでよかったという。

かもし（横木）の部分に二本のズイキを用い、竹の柱をこれに挿して作るが、これに初穂を三カ所下のかもしの部分に逆さに挿して、二本の御神木の前に立て掛ける。また御神木の一方の松の上方に飾ってあった前年の御幣を外し、これを燃やせば、ほぼ祭場の準備は終わり、一同脇にある倉庫で休憩となる。

これと並行して、当屋の家では御神木に飾る、新しい御幣づくりが行われる。一メートルほどの孟宗竹に、幣束を切り、洗米をくり付けてこしらえる。この竹や芋のズイキを採ってくるのも当屋の役目である。また台所では神饌づくりが行われるが、餅・塩・洗米・しん粉の団子が供えられる。しん粉の団子供えるのは、野神が牛の神様でもあるからだという。

〔祭礼〕

午後一時過ぎ、当屋から御幣を先頭にして、行列が祭場に向かう。一四人の行列は、昔は草履を脱いで、はだしで行ったものだったという。

祭場に着くと、まずは二本ある御神木のうち、左の方の松の上方に、御幣をくり付け、続いて二本の御神木の根元に、先ほど作った竹の神膳に神饌を載せて、それぞれに供える。このあと、二本の御神木の根元に酒を撒き、倒れて根だけが残る古い御神木の跡にも酒を撒いたのち、当屋の音頭で一同拍手を打って、三回礼をした後、各自で参拝

する。ほどなくして、供物を下げ、御神酒を飲み回し、余った御酒を御神木に振り撒けば、一同祭場から退場する。

このように祭の儀式自体は、至って簡素なものであり、到着から退場までに要した時間は、わずか五分ぐらいであった。戦前は参拝の後、子どもたちの奉納相撲があり、また直会もこの祭場で行われたという。戦後奉納相撲は、子どもたちの綱引きに変わったが、この日は地蔵盆とも重なっているので、一九六五年ぐらいから、次第に現行の大人だけの形式に変わっていったという。また御神木が二つあるのは、以前御神木であった松の老大樹が、一九五五年頃台風で倒れてしまったため、そうしたことへの予備として、二本植樹したことによるだけだとされる。

〔直会〕

祭場から退場すると、一同、上三十坪の会所（公会堂）に移動し、正午から三つの講中合同の直会となる。このような合同で直会をやるようになったのは、ここ一〇年来のことというが、直会の前に区長の挨拶があり、また区の担当の役職者から道普請や草刈り、麦刈り等の連絡事項があつて、一つの村寄合いの意味も有している。こうした区の連絡や協議が小一時間ほどあつて、ようやく区長がもう一度、今年の野神講も無事済んだことに対する挨拶を行ったのち、その音頭で乾杯し、飲食が開始された。

なお、三つある野神のうち、クボの講中の野神には石碑が建っているが、そこには農乃神という字が刻まれており、カミの講中の野神は、

大きな樺の老樹が御神木になっている。また各講中は、正月にも惣年頭の前に、野神へ参拜に行くが、これは昔は山の神様まで行っていた行事の、その代わりだと言っている。

② 徳谷の野神祭

東西中山の分村であるといわれる徳谷では、野神祭は九月一〇日に行われる。一九七〇年までは中山でも、この日を芋くらべ祭の祭日としていたように、上三十坪の野神祭に比べて徳谷の儀礼には、中山の芋くらべ祭と類似した要素が極めて多い。もちろんそれは、伝承の通り分村だとすれば、母村の儀礼を引き継いで始められたものであろうから、むしろ類似していることは当然である。が、一方異なる部分もまた多く、ここではこうした要素の共通や相違に注意しながら、以下、一九八八年九月一〇日に行われた徳谷の野神祭を、その準備から順次記述していこう。

〔ホコモトの紙集め〕

祭日当日の午前五時ちょうど、徳谷の集落のほぼ中央にある会所前に、小学校一年生以上中学校一年生までの男子が全員、ホコモトの紙集めのために集合する。区長も来てその様子を覗くが、男子全員といってもわずか八名である。

まだ暗闇のなか、五時三分、全員で会所前を出発、南側の家から一軒ずつ回り、各戸の玄関先で「ホコモトの紙おくんな」と皆で斉唱して、お金と和紙や半紙を集めていく。わずかに二〇余戸の集落であるから、会所に戻ってきたのは、五時三〇分少し過ぎた頃、全戸回るのに

三〇分とかからない。このあと会所の一室で、一番の年長の子(中一)の采配で、参加した子どもたち全員にお金と紙が分配されるが、年長者の取り分が多く、均等ではない。この年、最年長の中学一年生が四、三〇〇円、二番目の同級生が四、一〇〇円、小学校五年生の三番目になると二、三〇〇円、八番目の一年生は八〇〇円であった。これも五時五〇分には配り終えたが、山分けが終わると直ぐに解散となる。子どもたちは家に戻って、その後、この年は日曜日であったが、平日であれば学校に行く(徳谷の子どもたちだけ、午前中までで早退する)。

〔祭礼の準備〕

当屋である神主の家では、当日も、芋のくくり付けや神饌の煮炊きなど、祭儀の準備で早朝から忙しい。この祭が終われば神主に昇格する、相当(アイドウ)あるいは相役(アイヤク)と呼ばれる副神主も夫婦で手伝う習わしであるが、それだけでは足りず親類縁者の協力も仰いで、準備が行われる。

もちろん祭礼の準備は、その前から徐々に行われている。祭日一〇日前の九月一日から、神主と相当の二人で、祭場の清掃がはじめられ、八日には祭祀で使用する神の膳、芋竹、定尺などの祭具づくりが行われる。定尺と笏は、前日までにムラヤブ(村藪)から、ネムノキを採ってきて(中山では樫の木)、三〇センチメートルに切った木を二本、二つ割りにして乾燥させておく。笏にする一本はこの八日に、片方にムカデ、片方はマムシの絵を墨書きし、もう一本の定尺の方は何も書

かず、当日芋と一緒に二本の竹にくくり付ける。九日には神の箸と餅台を作り、また相当と二人で餅つきも行われるが、残りの準備は一日の当日、朝からはじめねばならない。

〔芋の飾付け〕

午前八時三〇分、まず最初に、神主は相当を伴って芋掘りに行く。自分の家の畑で普通に育てた里芋のうち、長めのものを二株選び、家に運んで芋洗いを行う。長さを較べあうわけではないので、特に一番長いものを選ぶ必要はない。丁寧に洗うため、二本洗うのに一時間近くはかかる。一〇時頃から芋の飾付けを行うが、その方法を熟知した年長の氏子総代も来て、これを手伝う。

八尺竹と称し、長さ三メートルほどの孟宗竹二本に、芋を飾り付ける。芋は根から葉先までよく伸ばし、これに何も書いていない方のネムノキの半割りと、半紙に二〇〇円ずつ包んだ賽銭を合わせ、芋の紐でしっかりと縛り付ける。飾り付けるのにも、また一時間ほどかかるが、この飾り付けた芋は、祭儀が終了したあと、縁起物として、中山でいえば山子の一番と二番に相当する子どもに（徳谷では山子に相当するような名称は特にない）、土産として持たせる習わしである。

〔神饌・御鯉〕

また当日の朝は同時刻より、当屋の家では神主の妻が、相当の妻の協力を得て、神饌の準備に取りかかる。カモウリ・センバ・ササゲを煮て、若干の味付けを行うが、これらはほとんど中山ものと違わない。異なるのは、生姜の梅酢漬けが加わることで、ブト（伏兎）を中

山で使う里芋の葉ではなく、バラシ（葉蘭）の葉に米の粉を塗って作ることである。このブトを作るのは、当日手の空いた時間を使って、神主と相当の男二人が行うが、水で棟った米の粉を、バラシの葉の上に薄く塗って引き伸ばし、少し乾いたところで、五センチメートル四方の碁盤目に切って作る。

また御鯉は、中山とは違って役のあるなしに関わらず、全戸が三五枚ずつ奉納する。かつては七〇枚献納するのが仕来りであったという。御鯉は前日に作っておき、当日の午前中重箱に詰めて、各自で会所に持参するが、それを当屋の手伝いの者が、祭儀のはじまる少し前までに野神山に運び上げておく。あとで子どもたちや見物人に分配されるが、御鯉を奉納すれば、交換に神饌が与えられるといっている。

この全戸の御鯉のほか、会所には数え年一四歳までの男子全員の膳が用意される。朝のホコモトの紙集めに集まった子どもだけでなく、男の子であれば赤ん坊から全て膳が宛がわれている。例えば一四歳までの男の子が二人いる家では、戸主の分を含めて三膳あって、三人分の神饌の配分を受けられることになる。これらを当屋の手伝いの者らが、御神酒などと合わせて、順次野神山の祭場に運び上げ、相当や氏子総代らが子どもの膳を年齢順に並べて、それが全部済めば、祭の準備はようやく整ったことになる。

〔野神山への行列〕

飾り付けられた芋が、当屋の家から会所前に運ばれ、午後一時四五分、会所の軒に吊るされた大太鼓を、袴を羽織った神主が打ち鳴らす

と、三々五々、村人が集まってくる。出発の合図であり、午後二時ちょうど、区長の短い挨拶のあと、芋の飾り付けを担いだ年長の子ども二人を先頭に、子どもたち、神主、区長、相当、以下一般の村人の順で、野神山の祭場まで行列をなす。

野神山は集落の西側に位置する山で、会所の裏の山道を五分ばかり登れば、祭場に到着する。祭場の広さは中山の四分の一度度であるが、中心部は平たい石で石畳が敷き詰められ、見た目は実によく似ている。祭場の正面には二本の神木があり、その間に小高く土饅頭になった神座が一つ設けられ、また祭場の周囲を取り巻くように子どもたちが座る石の腰掛けが置かれている。また以前は祭場を囲う竹矢来も築かれたという。神木は右側が松、左側が檜の太木で、男神と女神を表しているといい、ムカデの笏は松に、マムシの笏は檜に立て掛ける。また年長の子ども二人が担ぎ上げてきた芋も、それぞれの神木に供えられる。

〔祭儀次第〕

祭場に到着した一行のうち、区長や神主また戸主たち大人の男のみが、神座の前まで行って、銘々柏手と拝礼ののち、祭場の左側の奥に設けられた、真座が敷かれた席につく。二時一〇分過ぎ、ここに全員並んだところで、区長の挨拶がはじまり、それに続き、神主の一年間無事に務め上げた旨の挨拶が行われる。つづいて御神酒を下げてこれら一同で飲み直し、また洗米を少しづつ口にする。

御神酒を回している最中、続けて、相当や氏子総代らが神饌を下げ、カモウリ・センバ・ササゲ・ブトを並んでいる子どもたちの膳に少し

ずつ分配し、また神の膳にも供える。二〇分頃、これも終わると、居並ぶ子どもたちにも御神酒が回され、また餅が切られて、これも分配される。つづいて御鯉が五枚ずつ、子どもたちだけでなく、祭場の脇で見物する女たちにも配られて、神饌の分手が全て終わる。

午後二時三〇分、子どもたちの奉納相撲がはじまる。相撲といっても中山のものとは違い、正式の取り組みを行っていく。祭場の左側手前に設けられた土俵で、年少の男の子から二人ずつ順に取り組み、勝った方にはさらに御鯉が五枚配られる。見物人の視線が相撲の方に注がれているなか、二時三三分、大人の座から神主が立ち上がり、神座の前に向かい、参拝をはじめ。

〔神籤〕

これが翌年の神主を選ぶ神籤の儀式である。柏手を打ち三礼した神主は、草履を脱ぎ、神座に上がって、そこに用意された名前の書かれた紙のなかから、一枚を箸で引いてくる。神籤を箸で持ったまま座に戻り、区長に渡し、それを区長が開き、名前を読み上げる。それが明日から相当になる者で、一年間神主の見習いとして、神主のさまざまな補助を務める。それと同時に今の相当が神主に押し上がる。

この神籤の紙には、忌みの掛かっている者と在所のオモ役を除いた（代理者は構わない）、満四〇歳以上の者の名前が記されるが、戦前までは今と逆で、四二歳以上の者は神主になれる資格がなかったという。神主を務め上げ、世代（イエヌシ）が交替することを、徳谷ではハナガワリとかハナガエリと称するが、かつては親が神主を終えれば子ど

もの名前が記されたため、小学生でも神主になることがあったという。一四〇五歳でやる者ならかなりいたが、一般に神主は二〇代、三〇代のシヨタイザカリ（所帯盛り）のとき務めるものとされていた。戦後それが不都合だということで、ハナガワリをした家は、最低五年間空けてから名前を入れたり、さまざまな改編が漸次行われて、現行の形式に至ったという。

選ばれた相当の挨拶が終わると、つづいて区長が新たな山入りの紹介をする。この一年の間に生まれた男の子を紹介するものであるが、代わりにその父親が挨拶する。ここでの紹介があつて初めて山入りが認められるわけで、この日はまだその子の膳はない。その紹介が終わるや否や、直ぐに解散となるが、その日お開きとなったのは、午後二時三六分、子どもたちがまず山を下り、その後三々五々見物人、大人たちが下山する。

〔直会〕

午後三時ちょうど、山を下りると、直ちに会所で直会が行われる。参加するのは各戸一名ずつ大人のみであるが、上三十坪と同様、区長の挨拶から始まって、さまざまな区の連絡事項が報告されてから宴食となる。三〇分ぐらい経過したところで、山入りの紹介のあつた父親のみ座を外し、家に戻ってから、夫婦で山入りの赤子を連れて、山入りの挨拶回りに出掛ける。父親が玄関先で挨拶をして、座敷までは上がらずに、御鯉などを配り物にして各戸を訪ね歩く。道に沿って順々に訪問するが、親戚縁者の家だけで、全戸は回らない。

③山の神起こし

今回の映像では制作期限の関係で撮影できなかったが、当初計画に乘せていたのは、野神祭と関連性が深い、正月三日の山の神起こしの行事である。これは毎年三日の早朝に行われるが、昭和六四年正月になされた東西の中山の儀礼を実見したので、その観察記録を比較のため掲載する。

〔山の神と野神〕

この行事を一般に古老たちは、「山の神様を目覚めさせて野の神様にする」ための行事だと解釈している。この日各家から一人ずつ参詣する戸主は、それぞれにツト（苞）を携えてくる。田んぼ一反に一〇俵の作が欲しい人は、このツトを一〇個奉納するが、このように山の神は豊作の神として認識されており、この行事が豊穰祈願の予祝儀礼であることは確かであろう。

ただ、山の神が野の神様に交替するとはいうが、これを野神（ノガミ）とは言っておらず、野神祭の野神とはどう関係するのか、いま一つ明確ではない。しかし第一節で紹介したように、中山の場合、「伽藍絵図」には現在の野神山に大山祇神社の名があり、また「金剛定寺縁起」には、明らかに芋くらべ祭を「山神乃祭」あるいは「大山祇神社之祭祀」とする記載があり、簡単に答は出せないが、充分考察に値する問題であろう。

なお、この山の神起こしも、古くは山若の当屋が主催する行事であったといわれ、明治四一年の神社合併のち、熊野神社の宮座が取り

しきるようになったと伝えている。以下の記述は、あくまで昭和六四年現在の宮座主催の行事であり、聞き書きで得たかつての情報は、複雑になるので必要最小限にとどめたい。また三日の朝は東西別れて催されるが、内容はほぼ同じであるので、断りのないかぎり、記述は東谷の行事が中心である。

〔縄打ち・餅つき〕

行事の前日、一月二日の午後より、宮座衆が熊野神社の拝殿に集まり、山の神起こしの祭場に張る注連縄をなう。長さ六く七メートルにもなる大きな縄で、シテと称する飾りを、中央に三カ所垂らす。これができる山と山の神の祭場に運び、山の神様がやって来るといわれている方向に向けて、二本の松の木に結んで、張り渡す。また縄の中央には榎の棒を結び付け、注連縄を揺らしやすいようにしておく。東谷の場合、注連縄を張った向かって右側の松の木が、御神木であったが、西谷では御神木とは違う木に注連縄を張っていた。

その御神木の前には、神饌を戴せるための神座が設けられており、ここに置く竹製の神の膳も、この前日にオトナによって作られる。神座は石を高さ二〇センチメートルほどに積み上げた六〇センチメートル四方の台であり、また御神木に立て掛ける、男と女を象徴する二体の人形も、この日オトナが榎の木で作り上げる。男女の生殖器をシンボリックに型どったこの人形は、特に名称はなく、単に人形あるいは山の神様の人形と呼ばれている。

また行事の準備としては、神主を中心に神饌の餅つきが行われる。

直径二〇センチメートルほどの鏡餅を三〇個ほど作り、神饌のほか、直会として祭場で焼いて食べる餅に用いられる。なお、こうした準備はかつては山若の一番尉が神主となって行われたという。その神主は行事の一週間前、前年の一月二七日より、自宅の井戸端に、行場と称する、忌み竹と注連縄を張りめぐらした潔斎場を設け、物忌みと称して、水垢離を当日まで続け、さらに当日は山若全員も水垢離をとって、祭場に向かったが、当時は注連縄はこのとき担いで運ばれるものだったという。

〔儀礼次第〕

さて当日、山の神起こしは、早朝というよりは午前三時には、オトナの一人が先に来て、篝火が焚かれて用意がはじまる。次第に他のオトナも集まって来るが、ほかの村人が参詣に訪れるのは、午前四時から五時半くらいまでの間である。

先に来たオトナたちは、篝火をつけたのち、まずは御神木に男と女を象徴する二体の人形を立て掛ける。これを東谷では二対並べて飾るのに対し、西谷では別の木に向かい合わせるように立て掛ける。また神座に神饌を供えるが、中央に鏡餅を置いて、その左に塩、右に洗米を添えるほか、稲穂が一束供えられる。さらに篝火の回りでは、餅を竹串に刺して焼きはじめておく。

次第に訪れる参詣者は、順次、各自それぞれに山の神起こしの儀礼を行う。その方法は、注連縄に持参したツトのうち半分を逆さにして掛け、つづいて「山の神起きやった、早稲もよかれ、晩稲もよかれ、

四十四のつくりもの、皆よかれ」という唱え言葉を唱えながら、樫の棒をもって注連縄を大きく数回揺らすものである。その後、神酒を御神木に振り撒く人もあったが、あとは篝火の回りにやって来て、焼いた餅を食べ御神酒を飲みながら談笑し、一段落した者から、それぞれに自宅に戻っていく。持参したツトのうち半分は持ち帰るわけだが、これに神座にあった稲穂と、山に生えている榊かシキビ・フクラソウの小枝を折って挿し、自宅の玄関前の庭木に吊るしておく。これのちに田んぼの肥にすると、願った通りの作になるという。

行事は参詣者が来なくなるのを見計らって、日が明けはじめる頃にはオトナたちも片付けの準備にかかり始める。今は農業を行う家だけが参拝するが、山若が主催していた当時は、全戸が参加し、また明け烏の声を合図に儀礼が始められたという。山若全員で山の神起こしの縄揺すりを行い、その後、参拝者各自の縄揺すりが行われたといわれている。

(岩本通弥)

五、結 論

この報告は映像化されたデータをもとにして芋くらべ祭と中山の社会構造を再検討し、さらにこの民俗研究映像の制作過程で得られたさまざまなデータを提示して、これまでの芋くらべ祭の調査報告を補充し、さらに調査者と被調査者の関係など、映像民俗誌制作をめぐるさ

まざまな問題について考察することが主たる目的であった。本稿では映像民俗誌『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』の構成、すなわち「芋くらべ祭の儀礼」「芋くらべ祭の準備」「芋くらべ祭の周辺」に沿いながらこうした課題について検討をすすめ、とくにこの報告では坪井洋文（一九八七）を中心とする従来芋くらべ祭の報告を補充することに力点を置いて記述してきた。「芋くらべ祭の儀礼」では従来報告では明らかでなかったさまざまな所作の分析を加え、また東谷、西谷の差異については従来報告に大幅に追加し、さらに芋くらべ祭儀礼の全体的構造についてはじめての分析を試みた。「芋くらべ祭の準備」では一九八八年の芋くらべ祭の準備のほぼ全体を観察し記録した。芋くらべ祭について、その準備から当日の儀礼に至るまで研究者がその全体を観察しえたのは、おそらく初めてのことで考えられる。「芋くらべ祭の周辺」では、芋くらべ祭当日の中山の様子と、芋くらべ祭に関連すると思われる周辺村落の野神祭について観察し記録した。とくに上三十坪と徳谷の野神祭を中山の芋くらべ祭と比較して記述するのも初めての試みであった。

一九八八年の芋くらべ祭の観察記録はこれまで個々に記したので、ここでは芋くらべ祭の全体を通じた問題として、東西の双分的対立と農耕儀礼としての芋くらべ祭の二点について総括的に述べてみたいと思う。芋くらべ祭が東谷・西谷の双分制的組織を背景として行われていることは、周知の事実である。東西の差異と対立の諸相はすでに「芋くらべ祭の儀礼」の結論部分で詳細に検討したが、東西の対立は

芋くらべ祭の当日の儀礼のみならず、準備の過程においても、また芋くらべ祭の背景をなす社会組織でもきわめて顕著に認められる。「芋くらべ祭の周辺」で分析したように、芋くらべ祭を支える組織である山子、山若、オトナ（宮座）の組織は東西の双分制原理の上に成立している。また中山の村人の意識においても東西の対抗心は著しく、何事につけても東西の差異をことさらに強調する傾向がある。中山にみられる双分制は、芋くらべ祭の儀礼的な行動のみに顕著にみられるものと当初われわれは想定していたが、今回の映像民俗誌の制作を通じて明らかになったことは、これが儀礼的行動にとどまらずに中山の人々の日常的な行動にも深く浸透しているという事実であった。芋くらべ祭はこうした東西の対立を自己再生産する機会として重要な意義をもつと考えられる。

農耕儀礼としての芋くらべ祭の性格の問題は、つまり芋くらべ祭が畑作儀礼の象徴として理解しうるかどうかの問題である。この問題をめぐっては中山の芋くらべ祭と周辺村落の野神祭の比較考察が有効である。そこでこの報告では「芋くらべ祭の周辺」において、上三十坪と徳谷の野神祭との比較を試みた。上三十坪の野神祭は八月二三日に行われるきわめて簡素な祭であるが、この祭の畑作儀礼的な特徴は、村はずれの野神に芋茎でつくった鳥居を奉納することにある。しかし畑作物のみの豊作を祈願するわけではなく、また芋茎の鳥居には初穂も供えられるから、稲作儀礼としての性格も濃厚であるといえる。つまり上三十坪の野神祭はこれを純粹に畑作儀礼として解釈するには無

理があると考えられるのである。また中山の分村である徳谷の野神祭は九月一〇日に行われる。この野神祭はいっそう中山の芋くらべ祭との共通点が多いが、異なる点もある。徳谷では中山と同じように飾り付けた芋が二本、多くの供物とともに野神に供えられる。供物のなかにはササゲ、ブトなど中山と共通するものが多い。しかし徳谷には双分制的な組織がないから東西の競争や対立の要素がまったくない。東西の双分制がないにもかかわらず二本の芋が供えられるのは中山のやり方を継承したものであろうか。徳谷の野神祭も畑作物のみの豊作を祈願するものではなく、一般的に穀物の豊作を祈願する祭であるから、これを畑作儀礼の象徴として理解することにはやはり無理があるように思われる。中山の芋くらべ祭も芋打ちを通じて米の豊作を占うことに中心があるから、芋くらべ祭自体の分析によっても、また周辺村落の類似の祭礼の分析によっても、中山の芋くらべ祭はこれを単に畑作儀礼としてのみ理解することには問題があると思われる。

この報告は従来の芋くらべ祭の研究を土台としながら映像民俗誌を制作し、その過程で得られた四〇時間余におよぶ映像記録から、またあらためて芋くらべ祭を考察するというおそくはじめての試みの記録である。可能なかぎり客観的な映像記録を作成し、それをもとに分析したので、映像を用いない従来の芋くらべ祭研究にながしかのものを加えることは出来たと思うが、映像記録を駆使した本格的な祭礼研究は今後の課題である。

〈参考文献〉

- 日野観光協会（年欠）『芋くらべ祭』、日野観光協会。
 平山敏治郎（一九五二）『史料としての伝承』、『民間伝承』一五卷三号、二一九頁。
 岩井宏實（一九八九）『鹿島様の村の映像記録―羽後岩崎民俗誌の製作―』、『歴博』三八号、二二―二三頁。
 門屋光昭（一九八九）『岩手の『こころ』と『かたち』を撮る』、『月刊文化財』三十三号、一四―二二頁。
 北原真智子（一九五六）『双分制の一例―滋賀県中山の芋まつり―』、『東京女子大学』、『史論』第四集、二二三―二三八頁。
 北比都佐国民学校編（一九四三）『芋くらべ祭』、『北比都佐郷土読本』、二二三―二四頁、北比都佐国民学校。
 明治大学坪井ゼミナール（一九七九）『滋賀県蒲生郡日野町中山の社会と宗教』、『明治大学政経学部社会学関係ゼミナール報告』一四、一一九―一六三頁。
 中川泉三（一九一六）『江州中山の芋競べ祭』、『郷土研究』第四卷第四号、二二―二三頁。
 岡本信男（一九八九）『近江中山芋くらべ祭り』、中山芋くらべ祭保存会
 岡本信男（一九九〇）『近江の芋くらべ祭―蒲生郡日野町―』、『民俗文化』三二三号、三六〇―三六六頁。
 大間知篤三（一九五八）『民俗調査の回顧』、『日本民俗学大系』一三卷、四―一二頁。
 大森康宏（一九八二）『映像人類学―民族誌映画を中心として―』、祖父江孝男編『現代文化人類学』二、八五―一三一頁、至文堂。
 大森康宏（一九八四）『民族誌映画の撮影方法に関する試論』、『国立民族学博物館研究報告』九卷二号、四二―四五七頁。
 関 敬吾（一九四九）『民俗学方法の問題（上下）』、『民間伝承』一三卷六号、一五―二二頁、一三卷七号、三九―四八頁。
 滋賀県市町村沿革史編さん委員会（一九六二）『滋賀県市町村沿革史』（全六巻）、滋賀県市町村沿革史編さん委員会。
 杉山晃一（一九六〇）『芋』、泉靖一・中根千枝編『現代文化人類学』四、二六七―二七五頁、中山書店。

- 坪井洋文（一九七九）『イモと日本人―民俗文化論の課題―』、未来社。
 坪井洋文（一九八二）『稲を選んだ日本人―民俗的思考の世界―』、未来社。
 坪井洋文（一九八七）『芋くらべ祭―滋賀県蒲生郡日野町中山―』、『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五集、二二―三〇〇頁。
 上野和男（一九八〇）『御上神社秋祭の構造と親族組織』、『近江村落社会の研究』第五号、三七―五一頁、社会伝承研究会。
 上野和男（一九八一）『御上神社秋祭における頭屋の役割―昭和五四年東座頭屋の『神事記銀帳』から―』、『近江村落社会の研究』第六号、四六―六三頁。
 上野和男（一九八七）『近江湖東における宮座の組織と儀礼―滋賀県愛知郡愛東町青山の事例―』、『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五集、三〇―三三頁。
 上野和男（一九八八）『芋くらべの村の映像記録―『近江中山民俗誌』の制作―』、『歴博』三三号、一〇―一一頁、国立歴史民俗博物館。
 牛島 巖（一九八七）『日本の大学における映像人類学の現状―映像制作へ踏み込んだ一人の人類学者の試行と提言―』、『族』三、一一―一八頁、筑波大学民族学研究室。
 安井吉史編（一九五八）『芋くらべ祭調査報告書』、芋くらべ祭保存会。
 （上野和男）

〈附属資料〉

六、芋くらべ祭関係資料

- 一 『滋賀県物産誌』（明治十二年、一八七九年）
- 二 「古式慣例による神社奉仕心得（写）」（昭和五十四年、一九七九年）
- 三 「山若規約」（昭和三年改正、一九五七年）
- 四 『芋くらべ祭』（パンフレット）
- 五 「芋くらべ祭」北比都佐国民学校編『北佐都佐郷土読本』（一九四三年）
- 六 民俗研究映像『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』の構成
- 七 芋くらべ祭の写真記録（一九八〇年）
- 八 徳谷の野神祭の写真記録（一九八八年）

ここに掲げるのは中山の芋くらべ祭の関係資料である。坪井洋文（一九八七）にもいくつかの資料が掲載されているが、ここにはそれ以外の重要な資料を載せることにした。『資料一』は『滋賀県物産誌』（明治十二年、一八七九年）における中山村の部分の抜粋である。これによって中山が水田を中心とする農村であり、戸数も現在とほとんど同じであることなどが明らかである。『資料二』は熊野神社の「古代慣例による神社奉仕心得（写）」（昭和五十四年、一九七九年）である。これは現在の熊野神社の年中行事における宮座の役割や神饌について記載されたものであり、現在でもこれにもとづいて神社の行事が行われている。『資料三』は中山西谷の「山若規約」（昭和三年改正、一九五七年）である。ここには西の山若は一六歳以上の男子七人で構成すること、七人の定員制であることなどが規定されているのが注目される。『資料四』は日野観光協会が最近、芋くらべ祭の際に観客に無料配布している

パンフレット『芋くらべ祭』である。芋くらべ祭の由来や組織、および祭の次第が簡単に紹介されているこれは最近の芋くらべ祭を知ることのできる資料である。『資料五』は北比都佐国民学校が一九四三年（昭和十八年）に編集発行した『北比都佐郷土読本』から「芋くらべ祭」の部分の抜粋したものである。この記述によれば当時も現在とはほぼおなじように芋くらべ祭が行われていることがわかる。中山の芋くらべ祭についての報告としては中川泉三「江州中山の芋競べ祭」（一九一六）があるが、この報告には祭の詳細の記述はなく、したがって『北比都佐郷土読本』が芋くらべ祭のもっとも古い記述である。『資料六』は民俗研究映像『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』の構成である。ここには一〇〇分のこの映像記録の詳細なシークエンス、シーン、ショットを示した。『資料七』は一九八〇年当時の芋くらべ祭の写真記録である。現在とほとんど変わっていないが、一九八八年の芋くらべ祭については映画撮影の関係で写真が十分に撮れなかったため、これを補う意味で掲載した。さらに『資料八』は一九八八年の徳谷の野神祭の写真記録である。徳谷は中山の分村と伝えられる村であり、野神祭に芋を二本供えるなど中山の芋くらべ祭と共通する部分が多い。しかし芋くらべをしない点や祭祀組織などにおいて異なる点も多い。これらを含めて中山の芋くらべ祭と比較するために、ここに載せることにした。原文には誤字もあるが、ここではそのまま掲載した。なおこの資料作成は一、四、五、六、七、八は上野和男が、また二は橋本裕之、三は岩本通弥が担当した。（上野 和男）

『資料一』『滋賀県物産誌』（明治十二年、一八七九年）

○中山村 距県庁一
里三三町

東ハ日野河ヲ隔テ、内池村ニ対シ北疆ハ鑄物師村ト相接シ西南ノ二面ハ一帯ノ山脈綿々トシテ疆域ヲ囲繞ス地勢頗ル崎嶇通路狹隘車馬ヲ通スルニ便ナク

此ヲ以テ物貨ノ運輸極メテ難シ地味瘠鹵ニシテ百穀ニ適セズ加之水利ノ宜シカラザルヲ以テ往々旱魃ノ禍ニ罹ルコトアリ又水害ヲ被ムルコト少ナカラズ本村ノ如キ水旱ノ二害ヲ受クルノミナラズ其地味ノ膏腴ト運輸ノ便トヲ併セ欠クハ実ニ不幸ト謂フベシ東海道水口駅ニ達スル一里余ニシテ本村日常ノ物品ハ渾テ其地ニ於テ購求ス幅員概ネ東西二五町余南北三〇町余

○人口 五五四人 但平民

○人戸 一三三軒

農 一三三軒 農間大工ヲ職トスル者一名桶職ヲ業トスル者一名其他飲食ヲ嚮クモノ六名アリ

○反別 五四四町三反三畝二步

○地価金 七一、九二〇円一七銭

旧高 一、五九三石七斗八升八合

田地 一五〇町四反四畝四步 地価金六四、四七二円三五銭 播スモノハ

米穀ニシテ中稲最モ多シ

畑地 一五町三反三畝一一步 地価金二、六九七円二二銭 播スモノハ種

々アフリト雖トモ就中麦及ヒ甘薯多シ

宅地 六町三畝一二步 地価金二、六〇八円六八銭

山地 二二二町二反八畝二八步 地価金一、三二八円三八銭 楮山多シ又

生スルモノハ松樹多シ

雑地 一四五町四反七畝四步 地価金八一三円六四銭 社寺地或ハ藪草山

草生地等ナリ

除税地 四町七反六畝三步

○備荒金 一七九円六四銭三厘

○牛馬 三三頭 肉牛三〇頭 馬二頭 専ハラ耕作ニ使役ス其数漸々増加セ

○農業上産物第一

物 名	播種地反別	肥 料	産 額	近世比較	費 消	残 (不)	売 (買)
粳	町反畝歩 140. 3. 4. 04	餅・白子	石斗 1,543. 7	石斗	石斗 875. 3	石斗 668. 4	中 野 村
糯	10. 1.	同	111. 1	-30.	78.	33. 1	同
大 麦	5. 0. 5.		78.	-26.	90.	(12.)	(三十坪村)
大 豆	2.		16.	-9	26.	(10.)	(中 野 村)
蕎 麦	2.		39.		39.		
蜀 黍			1. 6		1. 6		
甘 薯			貫 3,750	貫 1,350	貫 160	貫 3,590	八 日 市 村

○農業上産物第三

物 名	産 額	総 価 格
製 茶	斤 187	円 銭 37. 40
繭	貫 匁 8. 200	10. 50
干 瓢	32. 400	12. 96

〔資料二〕 古式慣例による神社奉仕心得（写）（昭和五四年）

古式慣例による神社奉仕心得

熊野神社

一月二日 元旦祭

宮守（神主）正副は午前三時起床若水に身を清め神社に参拝（新役二人同行）年越徹夜奉仕する宮座一同と共に神饌品の奉献を行ふものとする。

神饌品

神酒、洗米、肴、野菜、糰一重（二疋）

水、塩、昆布の順

表」

氏子よりの神饌品供進終れば宮座一同本社に詣で神霊を拝し氏子の平安を祈願する。

宮守正副は素袴を着用し氏子の年賀を受けるものとする。

宮座一同は神饌品奉献后退社し自宅に於

て家族と共に新年を祝ふものとする。

宮座一同は午後四時神社に参集し神饌品の微饌^{ミヅマシ}を行ふ

神饌糰

裏」

大神一重、山の神用、^{東一重}東一重床の間一重神

棚小糰二重

一月二日 縄打祭

宮守は稲葉十束と稲穂五束を^{ミヅマシ}順備し、東西の七五三縄を六人以下の大老が祝歌を奉納しつつ作成するものとする（東西二本）

神の膳も同時作る

六人以上の大老は牛頭を作る。

東西の宮座は山の神に^{ミヅマシ}縄を張り山の神起の準備をするものとし完了后直会を催す。

表」

直会には前神主を招待する。同時に御鏡開を行ふ。

当日年間当番表も決定する。

一月三日 山の神起し

東 宮守、倉元

西 宮守、倉元

は未明に各々山の神に

詣で本年の四十四の五穀豊穡を祈願氏子の山の神起しに奉仕する。

山の神の神饌品

餅二重（男神一重、女神一重）

神酒五合 稲穂二束

裏」

男女の性器の形（檜の木使用）

一月下旬 月次祭

宮司 大祓詞

神饌品 神酒

宮座一同奉仕

こわ飯白

初老、還暦者招待

洗米

感謝状授与

肴

野菜

塩

一月上旬

神主振舞

六人〃 合同にて社務所に於て催す。

表」

二月下旬 祈年祭

宮司宮守正副は素袴着用

六人、氏子總代羽織、袴着用

三ヶ谷区長、農業組合長参席

牛頭祈禱

神饌品、眞榊

糯一重、神酒、肴、野菜、洗米、塩、稲穂（一巴）

三月中旬 春季彼岸祭

宮司、巫女、奉仕 神楽、湯の花献上

裏

神饌品

糯一重（二疋）神酒、肴、野菜、洗米、

塩、昆布、水

旧神主招待

四月二十二日 大祭準備大掃除

四月二十四日 宵宮祭り

松明準備 氏子よりの神饌品受取り

浦安の舞の練習

祭場の整備 のぼり立て（青年会）

灯ろう奉納（青年会）

表

宮一同午后十時散会火の用心注意

四月二十五日 大祭

午後一時半祭神饌品奉献

祭司祭詞

祭礼参列者

区長、氏子總代、宮座全員、玉串奉献

巫女舞一、浦安の舞奉納

御旅所徳谷之渡御

神饌品、眞神

神酒、肴、野菜、糯一重（紅、白）、塩、

洗米、昆布

裏

宮守素袴着用

六人以上紋付羽織袴着用

神は渡御用芯付を用意

四月二十六日 祭礼後片付け直会

五月中旬 月次祭

宮司、宮座一同参拝

神饌品 神酒、肴、野菜、塩、洗米、強

飯（年により早苗振り祭を五月にする）

六月中旬 早苗振り祭

宮司、宮座一同、農業組合長参拝 表

神饌品 強飯、神酒、肴、野菜、洗米、

塩、水、苗一束（麦穂一巴）

七月中旬 大赦 人形祈禱

宮司、宮座一同

神饌品 神酒、肴、野菜、洗米、塩、水、

黒豆入り強飯

八月十四日 千杯水

午前八時半神社に集合神に千杯の水を供

水して氏子並に我が身の平安を祈願する
午前中にて祭事終了

裏

八月中旬 月次祭

宮司、宮座一同参拝

神饌品 神酒、肴、野菜、洗米、塩、水、

強飯

八月廿五日 初作

宮座全員、山若全員、野神山参拝

八月廿八日 神饌糯米かし 六人以上

八月三十日 餅搗き

宮座全員午前八時より神主宿元に集合神

饌用の餅搗きを行う

表

九月一日 芋競べ祭り

宮座全員午前八時神社に集合

祭礼準備

神饌品 肴、糯一重、御鯉一重、野菜

宮守素袴着用

九月中旬 彼岸祭

宮司、巫女、宮座全員参拝

旧宮守招待

神楽、神湯奉納

神饌品 神酒、肴、野菜、塩、水、昆布

六、芋くらべ祭関係資料

宮守正副素袴着用

裏

十月中旬 月次祭

宮司、宮座全員参拝

神饌品 神酒、肴、野菜、洗米、水、強飯

十一月下旬 新嘗祭

宮司、宮座、区長、農業組合長参拝

眞神神饌品 神酒、白酒、肴、野菜、洗米、水、餅一重(二升分)、稲穂

宮守素袴着用六人以上羽織袴着用 表

十二月中旬 月次祭

宮司、宮座全員奉仕

交通安全祈願、交通安全役員参列

神饌品 神酒、肴、野菜、洗米、水、塩、強飯

本日をもつて正宮守任期終了退座

續いて新宮座入りの十二人振舞

十二月下旬 年末大掃除

宮座全員午前八時神社に集合

宮飾りを行う

裏

十二月三十日 除夜祭

宮座一同参集し氏子よりの神饌品の受付

神饌の供え方

首尾あるものゝ供え方

海魚

洗米

神 神酒

餅又は強飯

塩水

神

神



表

昭和六十二年六月

寫

昭和五十四年一月一日

高岡一己謹書

〔資料三〕 西山若規約（昭和三十三年改正、一九五七年）

昭和参拾貳年改正

山 若 規 約

日野町中山西

一、山若は当区在籍の長男にして数へ年十六歳に達したる者は必ず是れに加入し野神祭礼に登山するものとする 弟にして爾后当区に在住する予定のある者若くは希望のある者は数へ年十六才に達したる時は是れに加入し登山出来得るものとす

二、山若は七人詰を以て組織し新加入者を下位とし順次逆り七人に満員するを以て任期満了するものとす 但し已むを得ざる場合は大人詰を以て代行するも差支なきものとす 任期中他に転出するものある時は漸次繰下るものとす此の場合転出者は責任を以て変り役者を依頼するものとす この場合変り役者の繰下りは新登山終了者よりとす

三、入贅養子入夫婚姻せし者は山若に加入し登山する義務を有するものとす

四、芋競祭礼に関する費用は毎年区の予算に計上しその内三割を区の補助とし残りの費用は山若七人（若くは六人）が負担するものとする 但し変り役者についてはその義務を有せざるも当該者の負担は登山義務者が負担するものとする 尚変り役者の繰り下りで当該者の下に義務会員終但し経験者の場

合を除くものとす

五、前項以外に已むを得ざる事態が発生したる場合は区、山若、宮座合議の上処置するものとす

付則

本規約は昭和三十三年九月一日より施行するものとす

小西清之助	小西利三郎
西村益次郎	高岡開太郎
高岡富次郎	津田 栄助
野田 良一	高岡 平次
落合 満夫	高岡 元三
落合 二郎	望月 善助
高岡祐次郎	高岡 一巳
山上 昭三	岡崎 英夫
安田 賢造	高岡 宗一
平野松三郎	高岡 丈夫
高岡要之助	澤田菊次郎
瀬川 義雄	吉村 正夫
小谷源之助	池田 芳松
杉村 一枝	岡崎 直次
小西 正助	高岡安三郎
小谷 良平	瀬川 治雄
杉村 孝一	岡崎 正治
高岡 睦男	瀬川 英一
落合藤四郎	瀬川延次郎

岡本 傳治 高岡 治
落合 輝康

〔資料四〕 滋賀県指定無形文化財・芋くらべ祭

九月一日 日野観光協会

天下の奇祭といわれます「芋くらべ祭」によるこそお出で下さいました。

このお祭りは約八百年以上の伝統をもって此処中山東西の両部落の親から子へ子から孫へとうけつがれて参りました。素朴な農民の野神を祀るお祭りなのであります。且精こめて作り育てた大きな里芋の長さを競べあう奇観には、私達日本民族の遠い遠い親達の生活の様式がうかがわれて見る人の興味は尽きる所なく深まって参ります。

昭和三十二年滋賀県文化財保護条例によってこの祭が無形文化財に指定され、民族資料文化財として末長く保護されることになったのです。

どうかこの古い古い歴史の流れと共に伝わって参りました芋くらべ祭を余す処なくご覧下さい。

起源にまつわるその伝説

こんな伝説があります。

昔むかしの事です。「だだぼし」と言う大男がありました。それはそれは想像もつかない程の大男だったのです。ある日「だだぼし」は、もっこに土をもって西の方からヨイサヨイサと運んで参りました。その天秤棒と言うのは里芋の芋茎でした。処がどうした事かこの中山までやって来ますと、芋茎で作った天秤棒はボキリと折れてしまいました。さあ困った。「だだぼし」は代わりの芋茎は無いものかと、あちら、こちら深して歩いたのですが、と

うとう天秤棒にするような芋茎は見付ける事が出来ませんでした。もっこに盛られた土はそのままになり、今の水口の城山ともう一つは佐久良川添いの日野町大字北脇にある丸山となっていました。「だだぼし」が一生懸命に里芋の芋茎を探した事がそのままこの中山に伝わり今の芋くらべ祭になったのです。

.....

伝説はともあれ、この祭の古い事は想像もできないくらいの昔から伝わっているものでしょう。

祭儀にたずさわる人々

山若 かみしもを着ている青年を山若（やまわか）と呼び東西よりそれぞれ七人づつ出しています（西側は人口が少なく該当者のない時は六人で勤める）。十六才を最低とし順次年長へ七人が当ります。又年長者より一番じょう、二番じょう、三番じょう……と呼んでいきまして、今日の祭儀の一切がこの山若によって行われます（年令は数え年、西は一年若くから勤める）。

山子 かすりの着物を着て祭に参列する子供達を山子（やまこ）と呼び、八才以上十四才までの部落中の子供達です。これも同じく年長より一番、二番と全部に番で名が付けられます。又この山子達は、山の上の祭場を作る係をうけもって、祭場の一切を八月下旬から前日までかけて作り上げるのです。

宮座 熊野神社の社務所で山若達の上座に座る人々を宮座と呼びます。かつて山若であった村の長老十三名がこれに当り、通称「おとな」と呼ばれ祭儀の元老のような位置をしめております。

勝手 勝手（かつて）の人々は、山若を上がった人から選ばれ、紋付の羽

織に袴を着け、神事が進むにつれて必要な品々を祭場へ繰出す人の事をいいます。

祭儀の順序

午後一時よりこの祭りは始まります。先ず太鼓の合図と共に東西それぞれ競べ合う為の芋を山子にかつがせて熊野神社へ参ります。神社に詣でて後、社務所で三三九度の盃を行い、その後「そうらい、わあらい」と掛声を上げ乍ら野神山の祭場へ到着した一行の祭儀は、次のように進められます。

○山若、山子、所定の座につく。

○水廻し。

○神を拝する。

○芋を供進する。

○神を拝する。

○神の膳を奉る。

神へ供えられるものには、餅、をり（米の粉でこねて魚を型どった赤い色の付けたもの）、せんば、ぶと、かもうり、ささげの六つです。

○神を拝す。

○神の三三九度の盃。

この作法は小笠原流の作法ということです。

○神を拝す。

○吾々の膳を出す。

膳へ出されるものは神へ供えられたものと同じ。

○「かわせのはんぎり」を出す。

「はんぎり」の中に作られた人形の交換をします。

○神を拝す。

○神の膳を撤す。

○吾々の三三九度の盃。

○芋打ちの酒肴を出す。

○釣石を切る。

切り落とされる石は金石（かねいし）と呼んでいます。

○神の角力を取る。

三番丈が行司役となる。

これが今日の神の角力。

大角力始まり、大手よし。

かーち一番、今度の勝負で突倒せ。

これが今日の関分けの角力。

大角力始まり、大手よし。

かーち一番、今度の勝負で打ち倒せ。

これが今日の関の角力。

片や谷風、片や小野川。

かーち一番、今度の勝負で振じ倒せ。

○芋を出す。

○芋を打つ。

三番 「じょうじゃく」を改めましょうか。

「じょうじゃく」とは樫の木で作った芋の長さを測る物指です。

三番 同じ木が二つに割れました。見事に……。

二番 芋打ちいざ立って打ちたまえ。

双方手振り身振り踊るようにして芋を打ちます。

二 番 双方打たっしゃったか。

両三番 打ちましてござる。

二番東 双方打ったと申しますれど神事の芋の儀なれば互いに長短を争う次第芋打ち立ち替えらせて打たせては如何でござる。

二番西 如何にも左様、芋打ち立ち替わって改めよ。

(東西入れ替わって芋を打っていく)

三 番 打たっしゃったか。

三 番 打ちましてござる。

二 番 何と打たっしゃったか。

三番西 東の芋より西の芋は、一丈も二丈も三、四丈も五、六丈も長う打ちましてござる。

三番東 西の芋より東の芋は、一丈も二丈も三、四丈も五、六丈も長う打ちましてござる。

二番東 双方長い長いと申しますが、互に欲目もあること、今一度改めさせては如何でござるか。

二番西 如何にもよろし、芋うち今一度改めよ。

(もう一度自分の組の芋を打ち、西の方が勝ったとすれば、西の方から発声します)

三番西 東の芋より西の芋は、一丈も二丈も三、四丈も長いかと思いましたが、只今の儀につきましては僅か一尺ばかり長う打ちましてござる。

三番東 私も先程は欲目もござったか、西の芋より東の芋は一丈も二丈も三、四丈も長いかと思いましたが、只今の儀につきまし

ては、僅か一分ばかり短こう打ちましてござる。

二番西 芋の長短も相わかれば、芋を取り替えさせては如何でござる。

二番東 如何にもよろし。

二番西 双方芋を取り替えよ。

○東西芋を交換する。

○神を拝す。

○山を下る。

昔から西が勝てば豊年、東が勝てば不作という言い伝えは今も残っております。

〔資料五〕 芋くらべ祭(北比都佐国民学校編『北比都佐郷土読本』、

一九四三年)

「ソーライ」

「ワーライ」

「ソーライ」

「ワーライ」

と両谷から、山登りの人達が掛壁勇ましく上って来る。山の子供(中山東西谷の九歳以上の男子)の後から山若(十六歳以上の長男七人宛)と呼ばれる青年達が古めかしい姿で續いてゐる。先頭の大紋置く素袍に烏帽子を着け麻と笏を手にしてゐるのが神主であり、これを一番丈と稱へて今日の上座役を勤めるのである。次を二番丈、三番丈といふやうに呼ばれる五人は麻袴の姿で、中で中でも今日を晴と丹精こめて作りあげた里芋が大きな青竹に縛りつけられて列に加わり、下役の者達は神酒・餅・御鯉・白餅・大角豆・センバ・瓜等の神饌を携えて登って来る。後から後からと見物人がひしめきあひ

乍ら續いてゐる。

中山東・西の參道から村を離れると「むかで折」にかかる。ここから急な坂道になって聲の愈々高く、村はづれの祭庭と定められた山の頂上へ両谷からの祭の行列が練りこむ。額がじつとり汗ばんで參道の道々見下される一面の青田も清々しく今日、九月十日は名高い山の芋競べ祭である。

祭庭は山の頂で廣さは一アールもあらうか。神の木を中心に美しく清掃されてゐる。この祭は既に九月一日から始められてゐるので、今日まで山の子供達が毎日未明から、「石めぐり」「石つき」「竹あつめ」などの行事に従ひ、祭場の準備に忙殺されてゐたのである。祭場の周囲は割竹で垣作りがしてあつていよいよ神々しく、庭一面に敷きつめた平な小石にも何か古風な感じがする。東西から登りつめた祭使の人達は、丁度中央から左右に一番丈から順々に居並び、山若に次いで山の子供の席さへ設けられてゐる。

準備が出来あがると、愈々古代めいた神事が繰り廣げられる。先づ水廻しがあつて口を清め、神拝をして丹精の芋を供へこゝで神酒を獻じ諸員の直會がすむと芋打ち（芋の長さを計ること）にかかる。

最初に三獻九度の芋打ちの盃が交され、神の角力が奉納される。その行事が面白い。得意の美聲を張上げて

「これが今日の神の角力、大角力始まり、オットヨシ カーチ一番 今度の勝負で捻り倒せ」

「これが今日の關脇の角力、紅葉山に花車」

「これが今日の關の角力、方や谷風、方や小野川」

と納め終る。

間もなく双方から芋が持ち出され、丈尺と云つて檜の木二つ割の物差を持つて計り手が東西に分れて足どりもおおしく調子を揃えて計るのである。さ

て今年ではどちらの芋が長い。神の前に努力を競ふ晴の場所である。計る者も見物する者も固唾をのんで見守つてゐる。

一先づ計り終るとその結果の發表がある。東の者は

「東の芋は西の芋よりも一丈も二丈も三四丈も五六丈も長う打つてござる」

と言へば、西の者も負けてはゐない。

「西の芋は東の芋よりも一丈も二丈も三四丈も五六丈も七八丈も長う打つてござる」

と互いに言い張るのである。すると一番丈は聲嚴めしく、

「芋打ち、心して打て」

と改めさすが、相變らず自分の方を長いと言ひ張る。

「双方長い長いと申さるるが互いに慾目も在れば、今一度立替つて改めよ」との言葉に、今度は計り手が互いに代わりあつて相手相手のを打つのである。

「打たつしやつたか」

「打ちましてござる」

「何と打たつしやつた」

「東の芋は西よりも三四丈も五六丈も長いと思つたが、僅かに一分程長う打ちましてござる」

と申し聞けば、西方も僅かに一分ほど短かいと自認して勝負が決まる。勝負が決められると見物人はほっとする。勝つた方ではそれを自慢して威張るといふのでもない。次の一番丈の言葉がうれしい。

「芋の長さも決まつたやうだ。互いに取り代へては如何でござる」

とあつて、東西の芋が交換される。丹精の芋を神前で競ふと言つても、最後まで見苦しく相争ふのではない。互に來年の豐作を神に誓つて別れるといふ

和やかさである。

この祭禮は嘉應年間（紀元一八三〇年頃）に起ったものと傳へられ連綿七百七十餘年の今日に及んでゐる。以前は山若も大小を帯びたといふが、昔ながらの作法そのままに現代に傳へて尊く、誠に農村に適した奥床しい神事である。

シー	ク	エ	ン	ス	シ	ー	ン	シ	ョ	ッ	ト	担	当	
[プロローグ]														
1 タイトル					1 これは、滋賀県蒲生郡日野町中山の人々の生活を、昭和63年（1988年）9月1日に行われた芋くらべ祭を中心に記録した映像民俗誌である。 芋くらべ祭は、中山が東谷・西谷の2つの地区にわかれて、その年収穫した里芋の長さを野神の前でくらべあう祭である。この祭は畑作文化を象徴する儀礼として、また典型的な双分制の一例として多くの研究者の注目を集めてきた。この映像は、芋くらべ祭に見られる東谷と西谷のさまざまな違いに注目しながら、中山という近江の一村落の現在を、3部にわけて記録したものである。 なお、この映像で表記する日時はすべて昭和63年のものである。 製作 国立歴史民俗博物館 民俗研究部 坪井 洋文 上野 和男 岩本 通弥 橋本 裕之 製作協力 毎日映画社								—	
2 芋打ちのクライマックス														
3 タイトル					1 芋打ちの最後の勝敗が決する場面 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> 芋くらべ祭の村 ー近江中山民俗誌ー </div> （背景は野神山の祭場）									
[第1部]														
芋くらべ祭（60分）														
1 芋の掘出しと飾りつけ					1 会所から芋を掘りに行く山若の行列 [9月1日 早朝、祭の主役となる山若が神にそなえる一番長い芋を掘り出す] 2 掘り出す芋の根元にスコップを入れる 3 芋を掘り出して道にひとまず置く 4 芋を会所まで運ぶ								山 若	
2 芋の飾りつけ（西谷）					1 会所の脇の倉庫で、芋の飾り付けを始める。ひとりの村人が山若たちを指								山 若	

		<p>導して作業を始める</p> <p>[芋は竹にくくりつけられ、東西それぞれの紙のかざりがつけられる]</p> <ol style="list-style-type: none"> 芋の根元に藁の玉の飾りをつける 見にきた村人が「東の方が長いな」と話す ものさしとなる丈尺を芋にくくりつける 紙のひもの飾りをつけて、飾りつけが終わる。長さが相手にわからぬように葉で芋をおおう 芋を倉庫から会所の中に運びこむ 	大人
	<p>3 芋の飾りつけ（東谷）</p>	<ol style="list-style-type: none"> 丈尺を縄で芋の根元にくくりつける 紙のひものかざりを根元につける 飾りつけを終わった東谷の芋。西谷と飾りが違う 西谷の山若と芋打ちの回数を打合わせる山若 <p>[相手の芋の長さを確認しようと、あらかじめ情報交換が行われる]</p> <ol style="list-style-type: none"> 東谷の山若どうして、芋打ちの回数について打ちあわせる。かけひきがおもしろい 	山若大人
<p>2 熊野神社と祭場の準備</p>	<p>1 社務所の朝の準備風景</p>	<ol style="list-style-type: none"> 熊野神社の棟札 祭の当日朝の熊野神社社務所の全景 社務所前の黒板、宮座の役割分担が書いてある カワセノハンギリを社務所に運びこむ村人 <p>[熊野神社ではオトナ（宮座）が供物などの準備にいそがしい]</p> <ol style="list-style-type: none"> ハンギリに進上者の名を書いた紙をはりつける ブトを作るため芋の葉を洗うオトナのひとり 拝殿で芋の葉をハンギリに敷きつめる 祭場用のイスを車に積み込むオトナ 米の粉を葉の上にのばしてブトをつくる 餅の数をたしかめる神主（オトナの一番年長） 供物の御鯉と祭場で使う膳を持ってくる山若 御鯉とズイキを持ってくるオトナ 縁側に出された御鯉の型。家ごとに型が異なる 観客向けの芋くらべ祭報告書・パンフレット類 ひと休みしてくつろぐオトナたち 東のカワセノハンギリが到着 	宮座勝手

シーケンス	シーン	シヨット	担当
2 熊野神社と祭場の準備 (つづき)		17 昼食に自らつくったうどんを食べるオトナたち 18 神主が正装して本殿にあがって、神酒をさげる 19 社務所にならべられた供物の全景(右, 左) 20 ササゲ, カモウリ, ズイキ, ブト, 御鯉, カワセノハンギリなどの供物 21 祭場に運ぶ供物を天秤棒で自動車に積み込む勝手。カワセノハンギリを運ぶオトナ 22 供物を載せて野神山の祭場に出発する車	
	2 祭場に運ばれる供物	1 オトナが天秤棒で供物を祭場にはこぶ(西谷) 2 つづいて餅を入れたハンギリを祭場にはこぶ 3 東谷も天秤棒で供物を祭場にはこぶ(東谷)	宮 座
3 会所より熊野神社へ	1 情報交換	1 東の山若三番尉に電話して再度情報収集する西の山若。「計りなおしたら、ぼくらが長いよ。やっぱり負けとうないしょ。」 [相手の芋の長さを確認しようと、あらかじめ情報交換が行われる]	山 若
	2 会所より神社までの行列	1 芋を会所から運び出す。村外からきた女性がめずらしそうに芋にさわる 2 西の会所でオトナが出発の合図の太鼓をたたく [午後1時頃、太鼓を合図に山若と山子は芋を担いで神社に向かう] 3 山子が芋を担いで神社に向けて出発する。山子は全員紺の着物、山若は袴を着る。山若一番尉はほかの山若と違って代々伝わる黒服 4 山子はハダシに黒い鼻緒の下駄ばき 5 前方からみた行列。黒服は山若の一番尉 6 儀礼に使う銚子, 酌, 刀を持って行列する山若 7 西の山若の履物は黒足袋に下駄である [山若・山子は、西は黒足袋に下駄、東は白足袋に草履を履く] 8 熊野神社の正面階段下まで行く西谷の行列 9 階段を登る東西の行列 10 芋はひとまず東西別々に本殿脇に供えられる 11 供えられた芋のそばで待機する山子たち 12 本殿にそろって参拝する東の山若	山 若 山 子 勝 手
4 熊野神社での儀礼	1 熊野神社での儀礼	1 社務所の遠景。観客のほとんどは村外の人 [芋は神社の本殿に供えられ、社務所で簡単な儀礼が行われる]	山 若 山 子

5 山のぼり	1 山のぼり	2 神主が本殿から下げた神酒を注ぎ、儀礼開始	宮 座 観 客
		3 社務所内の全景、われわれの三三九度を始めるにあたってのいいつぎが行われている	
6 祭場の儀礼	1 山のぼり	4 われわれの三三九度の盃。東西で少しずつ所作をずらしながら、盃をすべての山若にまわす	山 若 山 子
		5 給仕役の六番尉が西の一番尉に酒を注ぐ	
		6 社務所裏の窓から見た三三九度の盃。東西で所作がやや異なり、時間もすこしずつずらす	
		7 黒服の一番尉とその脇に座る紋付きの勝手	
		8 芋くらべ祭を見にきた観客に酒を注ぐオトナ	
		1 本殿から運び出される西谷の芋	
		2 鳥居下で芋を持ちかえる山子。芋は山子が担ぐ 〔神社での儀礼の後、東西それぞれの道を経て野神山の祭場に向かう〕	
		3 重そうに芋をかついで野神山に向かう山子	
		4 青々と広がる田のなかの道を行く西谷の行列	
		5 「ソーライ」「ワーライ」と声をあげる山子	
	1 水まわし	6 野神山を登る芋。西谷側の坂は急である	山 若
		7 西谷の芋が祭場に運びこまれる	
		8 緊張しながら祭の開始をまつ山若	
		9 祭場に集まったおおぜいの観客	
		1 水まわしの開始を告げるいいつぎ 〔「水まわしをしてはいかがでござるか」〕	
		2 三番尉どうしの対面から一番尉に水を注ぐまで	
		3 つぎに二番尉に水を注ぐ。この所作も異なる	
		1 神を拝する儀礼の前のいいつぎ	
		2 神を拝する（二分割画面） 〔「神を拝してはいかがでござるか」神を 拝する形は東西で違う〕	
		（二分割画面）	
	2 神を拝する	1 神の膳を供える儀礼の前のいいつぎ 〔「神の膳を供えてはいかがでござるか」〕	山 若
		2 山若全員が神の膳を供える配置につく	
		3 まず餅を入れたハンギリが山若の間で手渡しされ、最後に一番尉が神に供	
	3 神の膳を供える		山 若

シーケンス	シーン	シヨツト	担当
6 祭場の儀礼(つづき)	4 神の三三九度の盃	<p>える(東谷)</p> <p>4 神の膳を供える所作は東西で異なる [神の三三九度の盃。黒装束の山若の一番じょうが神に酒を注ぐ]</p> <p>1 二番尉が一番尉に酒を注ぐ。二番尉は三番尉から酒を受け、さらに一番尉に注ぐ</p> <p>2 一番尉はこの酒を神座に注ぐ(西谷)</p> <p>3 東谷の神の三三九度。西谷とほぼ同じ</p>	山 若
	5 われわれの膳を出す	<p>1 われわれの膳を出す前のいいつぎ(西谷) [われわれの膳を出す]</p> <p>2 一番二番へ餅その他の膳を出す。所作も東西で異なる。東は女性的、西は男性的とされる</p> <p>3 山若全員につぎつぎに膳を出す(東谷)</p>	山 若
	6 カワセノハンギリ	<p>4 東の勝手が山子に箸を出す。山子にも膳が出る</p> <p>1 祭場の全景。カワセノハンギリの前のいいつぎ</p> <p>2 西から東にハンギリを贈る。東西の境の線を越えるときは、山若は軽く頭を下げた挨拶する [カワセノハンギリ(為替の半切)を出す。贈物の交換である]</p> <p>3 祭場につめかけたたくさんの観客。村人も多い</p> <p>4 受けた東谷の山若がこれを一番尉の前に運ぶ</p> <p>5 東の一番尉が西のハンギリをほめる [みごとに出来ましてござる]</p> <p>6 真剣な表情で祭を見守る山子たち</p> <p>7 返礼として東から西へカワセノハンギリを返す。さきほどと同じ所作がくりかえされる</p>	山 若
	7 われわれの三三九度	<p>1 われわれの三三九度の前のいいつぎ [われわれの三三九度の盃]</p> <p>2 六番尉どうしが祭場の中央で向かい合う</p> <p>3 一番尉に酒を注ぐ東西の六番尉</p> <p>4 つぎに西の六番尉が二番尉に酒を注ぐ</p> <p>5 われわれの三三九度の全景。東西の違いがわかる</p>	山 若

<p>8 一番二番の流れ盃</p>	<p>1 一番二番の流れ盃の前のいいつぎ（西谷） 東は「一番二番の酒と肴を出すこと」といいつぐのに対して、西は「一番二番の流れ盃を出すこと」といいつぐ。場内アナウンスは「酒と肴を出す」と説明する [一番二番の流れ盃。肴を出す山若の所作がおもしろい] 2 流れ盃。酒を出す山若が腰をかがめたまますばやく歩みよる所作が独特である 3 西の流れ盃がつづく</p>	<p>山 若</p>
<p>9 芋打ちの酒肴を出す</p>	<p>1 芋打ちの酒肴を出す前のいいつぎ [芋打ちの酒肴を出す。芋を打つ山若が何杯も酒を飲み続ける] 2 六番尉が三番尉に芋打ち酒肴を出す。飲む量は三番尉が決める 3 西三番尉が何杯も飲みつづける。荒々しい所作</p>	<p>山 若</p>
<p>10 吊り石を切る</p>	<p>1 吊り石を切る儀礼のいいつぎ [吊り石を切る。この石を山子の一人が翌年まで預かる] 2 東西の四番尉が神座の四方の葉を取った後吊り石を切る 3 山子の四番尉が切られた吊り石を取りに行く</p>	<p>山 若 山 子</p>
<p>11 神の相撲</p>	<p>1 神の相撲を取る前のいいつぎ 2 山若三番尉が扇をかかげて、2人の山子を両側に従えて相撲をとる。西谷の関脇の相撲 [神の相撲を取る。しかし実際に勝負を決することはしない] 3 東の相撲。東西で順番に相撲を取る。三番ずつ</p>	<p>山 若 山 子</p>
<p>12 芋を出す</p>	<p>1 芋を打つ山若三番尉の裾を勝手がまくりあげる 2 一番二番をのぞく山若全員で「尋常、尋常」のかけ声とともに芋石を境に芋を祭場中央に出す</p>	<p>山 若</p>
<p>13 芋を打つ</p>	<p>1 芋打ちの前のいいつぎ 2 芋打ちに先立って丈尺が同じかどうかを改める。「芋打ち、いざ立って打ちたまえ」と二番尉 3 芋打ちがはじまる。まず自分の側の芋を打つ。 [芋を打つ。この時ドンジョフミと呼ばれる独特の所作をする] 4 芋打ちが終わるごとに芋石に丈尺をあてて結果を確認するが、第1回は簡</p>	<p>山 若</p>

シーケンス	シーン	ショット	担当
6 祭場の儀礼 (つづき)		<p>単に済ます</p> <p>5 第2回目の芋打ち。相互に入れ替って芋を打つ</p> <p>6 真剣に芋打ちをみつめる女性と山子</p> <p>7 東の芋の長さ確かめる西の山若</p> <p>8 芋打ちのドンジョフミの所作</p> <p>9 芋打ちをみつめる東の山若一番尉</p> <p>10 東の山若のドンジョフミ。尺数だけ踏む</p> <p>11 第2回目の結果確認。双方とも長いと主張する</p> <p>12 祭場の芋打ちをみつめる観客</p> <p>13 第3回目の芋打ち。自分の芋を打つ</p> <p>14 3回目の結果確認。同時に双方とも長いという</p> <p>15 4回目の結果確認。またも双方長いと譲らない</p> <p>16 第5回目の芋打ち。またまた双方譲らない。</p> <p>17 勝負がなかなか決まらないのを喜ぶ観客</p> <p>18 第6回目の芋打ち。ふたたび相手の芋を打つ</p> <p>19 ドンジョフミがくりかえされる</p> <p>20 東の三番尉の額から汗が垂れる</p> <p>21 6回目の結果確認。東がさきに発声して1尺長いという。西は短いことを認める。東が勝つ</p> <p>22 どよめき拍手する観客。「いいぞいいぞ」の声</p> <p>23 芋打ちが終わったあと芋を交換する [この年、東の芋は7尺6寸7分、西の芋は7尺6寸6分]</p>	
	14 神を拝する。	<p>1 神を拝する儀礼のいいつぎ</p> <p>2 最後に神を拝して祭場の儀礼は終わる</p>	山 若
	15 山を降る。	<p>1 山を降りるいいつぎ</p> <p>2 祭場からひきあげる観客たち(東谷)</p>	山 若
7 山く다리	1 山く다리	<p>1 芋を祭場から運び出す西の山子。「正確に計ったら、勝ってたのに…」とくやしがる</p> <p>2 村の道を経て副神主の家に運びこまれる芋 [祭が終わると、交換した芋は神主と副神主の家に届けられる]</p>	山 若 山 子

<p>8 熊野神社での直会</p>	<p>1 直会</p>	<p>3 山子に御礼の金を渡す副神主の妻「ごくろうさんやな」。お礼の金包みは2つ山子に贈る 1 神社の階段を登る山若。服はかなり乱れている 2 社務所に入る山若。祭場からの道具を積んだ車 3 全員社務所の座敷に着座する 4 直会の全景、オトナが山若たちにお茶を出す [社務所でのオトナと山若の直会。これで祭はすべて終わる] 5 神主が東西の一番尉にお礼の酒を配る 6 神主がかんたんに挨拶して直会は終わる 7 膳を持って社務所を出る山若たち 8 神社の階段をおりて自宅へ向かう山若</p>	<p>山 若 宮 座</p>
<p>[第2部] 芋くらべ祭の準備(20分)</p>			
<p>1 石めくり 8/24</p>	<p>1 西谷の石めくり</p>	<p>1 野神山の全景。野神山は町の西北にある 2 祭場と西谷の石めくりの風景。大人が手伝う 3 祭場の石をはがして投げつける山子 [8月24日 西谷と東谷の山子が、野神山でそれぞれ石めくりを始める] 4 石めくりが行われている祭場の全景</p>	<p>山 子</p>
	<p>2 東谷の石めくり</p>	<p>1 静かに石を運ぶ山子。東谷では大人が手伝わない。山子の口数も少なく、黙々と作業する 2 石めくりの全景一西はすでに終了。双方とも中央の境は絶対に越えてはならないとされる</p>	<p>山 子</p>
<p>2 野神山参り 8/25</p>	<p>1 野神山参り</p>	<p>1 東の山若3人が酒を神石にかけて手を合せる。神石の上にはすでに茗荷が供えてある [8月25日 山若がはじめて野神山に参る。東谷はオトナも加わる] 2 神主とひとりのオトナがつづいて参拝する 3 西谷では山若のひとりひとりが茗荷を供えて参拝。酒はかけない。神を拝する所作をする</p>	<p>山 若 宮 座</p>
<p>3 山の草刈り 8/25</p>	<p>1 山子がカボチャを食べる</p>	<p>1 倉庫のなかでカボチャを食べる山子たちの全景 [8月25日 野神山の草刈りの合間にカボチャを食べる東谷の山子] 2 カボチャが山子たちに配られる 3 食べる場面。「おいしいやろ」と一人が言う</p>	<p>山 子</p>

シーケンス	シーン	ショット	役割
4 菱垣の竹集め 8/26	2 草刈り	4 カップラーメンを食べる一番尉 1 祭場では一番尉が山子に作業を指図する 2 カマで草刈りする山子たち	山 子
	1 菱垣の竹集め	1 早朝、道具を持って会所に集まる山子たち [8月26日 菱垣の竹集め 早朝に山子が家家をまわって、竹やお金を集める] 2 作業場に集まった山子たち 3 あるオトナの前で山子がかけ声をかける。「菱垣の竹おくれんか…」 4 オトナが家の前の竹藪に入って竹を切り倒す 5 3人の子供が竹をひきずって会所に運ぶ	山 子
5 ナラシ 8/26	1 東谷のナラシ	1 夜の闇のなかに明るく浮かびあがる会所 2 カワセノハンギリの練習。オトナも参加する [連日東西の会所では、山若によってナラシ（練習）が行われる] 3 オトナと山若のやりとり。オトナが指導する 4 一番二番の流れ盃の練習風景 5 神の角力の練習。この時は山若だけでやる 6 芋打ちの練習。ドンジョフミもやる 7 芋くらべ祭の調査報告を見ながら相談する山若 8 オトナがこれに加わって、あれこれと指導する	山 若 勝 手 宮 座
	2 西谷のナラシ	1 西谷のナラシの風景。ここでもドンジョフミ 2 報告書を見ながら打ちあわせる山若	
6 道具と祭場の準備 8/28	1 作業場での準備	1 山若と大人が集まって準備が始まる 2 山若が藁を打つ。ウオークマンをしている 3 大人は竹を割る。割った竹を揃える 4 芋を竹に縛る縄をなう大人。3人がかりである	山 若 山 子 大 人
	2 会所での準備	1 扇風機で紙のかざりをつくる山若一番尉 2 刀にかざりの金紙を巻きつける山若 3 山若の一番尉が持つ笄。表はマムシ、裏はムカデ [山若の一番じょうが持つ笄 表にマムシ、裏にムカデが描かれている] 4 器用な手つきで水引を準備する山若	山 若

7 石洗い・石つき・ほこもとの紙集め 8/29	3 祭場の準備	1 女性たちの手で行われる野神山の草刈り 2 石を敷きつめる東谷の山岩・山子・大人。おおぜいの人が参加して祭場の準備が行われる 3 神の箸をつくる大人2人 4 祭場の竹やらいの入口にあてる竹板をつくる 5 足りない石は下からリレーして運びあげる 6 神座と吊り石の準備。吊り石を吊す 7 ほぼ準備が終了した祭場 8 そのあと山若が山子に石を並び替えさせる	大 人 山 子
	1 石洗い（祭場）	1 山子の一番尉が山若のすわる石を洗う [8月29日 山子が祭場の石を洗う。これで野神山の準備はすべて終わる] 2 山子が祭場の敷石をひとつひとつ丁寧に洗う。一番尉が山子に指示する声かとぶ 3 石洗いが行われている祭場の全景（西から東） 4 一番尉の指示に従わなかった山子への制裁。膝の上に石を積み上げられ、必死にこらえる山子	山 子
	2 ある山子の帰宅	1 つづいて入りたての山子にも制裁が加えられる 1 制裁をうけてふてくされながら家に向かう山子 2 戸をあけて「ただいま」といって家にはいる 3 台所で母親がイナリズシをつくっている 4 寿司などを重箱に入れて皿・箸とともに風呂敷で包む母親（山子は紺の着物に着替えている） 5 重箱をもった山子が玄関を出て会所に向かう	山 子
	3 会所での石つき	6 道で出会った4人の山子が会所にそろって入る 1 一番尉を上座にして着席。「全員こい」と呼ぶ [8月29日 石つき 山子は各家でつくった寿司などを会所に持ち寄って食べる] 2 神主へ届ける寿司を選択したあと山子に指示する一番尉。「おまえら 持って行け」 3 一番尉二番尉が寿司や海老フライを食べる 4 持ちよった弁当を交換しながら食べる山子	山 子
	4 ホコモトの紙集め	1 村の家の前で「何というの」と相談する山子	山 子

シーケンス	シーン	シ ョ ッ ト	役 割
8 餅搗きと御鯉づくり 8/30	1 餅つき（神主家）	<p>[8月29日 ホコモトの紙集め 各家をまわって、山若の御幣に使う紙を集める]</p> <p>2 最初に訪ねた家。「ホコモトの紙ちょうだい」</p> <p>3 家からでてきた女性が山子に金包みを渡す</p> <p>4 山子が「ありがとう」とお礼をのべる</p> <p>5 別の家で山子がそろって「ホコモトの紙おくん」と声をかける。この家でもお金をもらう</p> <p>1 餅搗きが行われている神主家の全景</p> <p>2 餅搗き前に酒で清めるオトナ</p> <p>3 オトナが交代で餅を搗く</p>	宮 座
	2 山子の餅食い	<p>[8月30日 オトナが神主宅で餅をつき、山子が餅食いに招待される]</p> <p>4 別のオトナが餅を台に載せて廊下に並べる。</p> <p>1 山子が神主家の座敷にあがって席につく</p> <p>2 神主が東西の山子一番尉にお礼の金を渡す</p>	
	3 御鯉づくり	<p>3 餅を食べる山子たち。甘い餡をよけている</p> <p>1 あるオトナの家の全景。前の畑に里芋がある</p> <p>2 御鯉は米の粉をまらめて型に入れてつくる</p> <p>[オトナと山若の家では、神饌として御鯉（オリ）がつくられる]</p> <p>3 型から出して箆に並べられたたくさんの御鯉</p> <p>4 つぎにハゲイトウで御鯉を赤く染める</p> <p>5 出来あがった御鯉</p>	
9 あわせナラシ 8/30	1 ナラシの風景（西会所）	<p>1 神の角力の練習（西と東ひとりずつ）</p> <p>[8月30日 東西の山若が西の会所に集まって、合同で最後のナラシを行う]</p> <p>2 神を拝することの練習。東西で間合いをとる</p> <p>3 芋打ちの練習。オトナもナラシをみまもる</p> <p>4 ナラシが終わったあとの東西の山若の打合わせ</p>	山 若 山 子 宮 座
10 芋の下調べ 8/31	1 芋の下調べ	<p>1 棹をもって村中の芋をはかりに行く山若</p> <p>[8月31日 山若が畑をまわって、一番長い芋の検討をつける]</p> <p>2 芋の長さをはかると竿にしるしをつけておく</p>	山 若

11 ムカデ道づくり 8/31	1 ムカデ道づくり	1 栗の葉を野神山に敷いていく山子 [8月31日 東谷では、祭場に通じる山道に栗の葉を敷いてムカデ道をつくる] 2 栗の葉を敷いてムカデ道をつくる山子。裏がえしに置いた葉をひっくり返して敷きなおす 3 延々と祭場までムカデ道がつくられる	山 子
[第3部] 芋くらべ祭の背景(20分)	2 完成した祭場	1 準備がすべて整った祭場の全景(西から東へ) 2 祭場の中央に置かれた芋石 3 祭場正面の遠景。セミの鳴き声がきこえる	
1 中山の概況	1 中山の概況	1 地理的位置。中山の地図。バックは中山の畑 [滋賀県日野町の位置図] 2 中山の集落地図。バックは中山の家並 [中山の集落地図] 3 東谷の全景 [中山東(東谷) 世帯数73] 4 西谷の全景 [中山西(西谷) 世帯数43]	—
	2 伽藍図と主要施設の対照	1 金剛定寺の伽藍絵図 [中山の金剛定寺に残された康永元年(1342)の伽藍絵図には、祭場のある野神山は大山祇神社と記されている] 2 絵図の大山祇神社が現在の祭場である 3 祭場の野神山の遠景 4 絵図の熊野神社と現在の熊野神社社務所 5 社務所内に掲げられた宮座の揭示物。板に書かれた歴代の熊野神社氏子総代の氏名 6 昭和63年度当番表。芋くらべ祭の神饌品 (昔の農業や食生活についてのあるオトナの語り) 1 カンピョウ・カキ・イモ・茶・栗・桑など 2 水田で草とりをする村人。畑を耕す女性	—
2 村と村人の風景	1 耕地と作物	1 会所近くの広場での行商の車と買う村人	—
	2 行商のくるま	1 仕出し屋丸茂商店の全景とその料理場 [この日は、仕出し屋にとっても多忙な一日となる]	大 人
3 9月1日の中山 9/1	1 仕出し屋の仕入れ		大 人

シーケンス	シーン	ショット	役割
3 9月1日の中山 9/1 (つづき)	2 山子の登校	2 軽自動車で仕入れに出発する主人 3 料理場で魚を焼く従業員 4 仕入れた魚を車からおろして、料理場に運ぶ 1 始業式の日の朝、朝食をとる山子 2 学用品を持って家を出る山子 [二学期が始まり山子も登校するが、まもなく祭の支度に戻ってくる] 3 集団登校の集合場所の会所に向かう山子 4 集団登校する東の男の子たち	山子
	3 朝の中山の風景 <div data-bbox="564 528 743 607" style="border: 1px solid black; width: 93px; height: 58px; margin: 5px auto;"></div>	1 家の新築現場 2 洗濯物を干す主婦 3 御鯉をもって社務所にはいるオトナ 4 草を焼く女性 5 内職の電線をつくる主婦 6 乳母車を押しながら道を行く老婆 7 社務所で餅をととのえる神主 8 御鯉の準備をする主婦 9 ササゲを重箱にいれる主婦 10 高岡神社で草むしりをする村人 11 ブトをつくるオトナ 12 農作業をする村人 13 榊を神社の鳥居につける神主 14 初呼びの家で料理の準備をする主婦 15 下校してきた子供	一
	4 仕出しの配達	1 仕出し屋の料理場。刺身をつくっている 2 船形に盛りつけを終わった刺身 3 配達車がある家に着いて、料理を家の中に運ぶ	大人
	5 昼の初呼び(あるオトナの家)	1 三女が子供を連れて実家に帰ってきて母に挨拶 [初呼び 最近結婚式をあげた家では、はじめてその親戚を招待する] 2 つづいて三女の夫の両親が挨拶。長々とつづく 3 デイノマでこの家の嫁が客に茶を出す	大人

																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									</
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----

シーケンス	シーン	シ ョ ッ ト	役 割
5 徳谷の野神祭 9/10	1 徳谷の全景 2 はこもとの紙集め 3 準 備 4 野神祭	2 橋をわたって村はずれの野神に到着 3 野神への膳を2本の松の根元に供える 3 一同参拝, 神酒でさかずき 4 三十坪ではこの他の2カ所でも同様に野神祭が行われ, ズイキで鳥居がつくられる 1 徳谷の全景 1 祭の日の早朝, 子供たちが各家をまわって紙やお金をあつめる [はこもとの紙おくんな] 1 神主の家では芋の飾りつけが行われる。参加するのは神主・相当(来年の神主)・氏子総代 2 完成した道具と供物。餅, ムカデとヘビを書いた笄, ブト, ササゲ, カモウリなど 3 各家でつくられた御鯉が会所に集められる 4 会所から芋を持って祭場に向かう神主と子供 [9月10日 中山の分村である徳谷でも, 野神山に芋が供えられる] 5 祭場に芋を供える子供。その他の供物 1 柏手を打ってつぎつぎに参拝する村人 2 直会での神主のあいさつ 3 オミクジ用の紙を折る(神主の声をかぶせる) 4 野神祭を見にきた観客と子供に膳を出す大人 5 子供の角力。土俵は小さく, 倒すまでやる 6 野神の前でオミクジを引く神主 7 クジに当たった人を読みあげる。区長とクジに当たって苦笑いする村人 8 祭場での祭が終わって山を降りる村人たち	神 主 相 当 氏子総代 大 人 子 供 観 客 一
[エピローグ] 芋くらべを支えた人々	1 芋くらべ人物スケッチ	1 社務所の縁側でこやかに話をする神主 2 餅を食べる山子 3 カボチャをたべる山子 4 祭場で所作を演じて見せるオトナの一人	

	5 顔から汗を流す東の山若三番尉	
	6 悔しそうな顔で負けを認める西の山若三番尉	

(注) [] 内は画面上のテロップ文字もしくは地図。

担当欄の山若・山子・宮座・勝手については、本文四を参照。大人はここではその他の村人を意味する。

Imokurabe Festival in Nakayama

UENO Kazuo IWAMOTO Michiya

HASHIMOTO Hiroyuki

The main purpose of this report, which is based on video recorded data concerning Imokurabe Festival in Nakayama in Hinomachi, Gamo-gun in Shiga Prefecture and the social structure of Nakayama, is to supplement the past research reports concerning Imokurabe Festival by presenting various data acquired through the process of producing video recorded report of this event, and also to study the problems concerning the production of report in video including the relationship between the researchers and the researched.

These problems are presented in the report in correspondence with the order of each part of the video recorded report entitled "A village of Imokurabe Festival-- Ethnography of Omi Nakayama--"; "Rituals of Imokurabe Festival", "Preparations for Imokurabe Festival," and "Surrounding conditions of Imokurabe Festival," Special focus of this written report was on supplying additional data to supplement the Imokurabe Festival report made in 1987 by Hirobumi Tsuboi.

In "Rituals of Imokurabe Festival," further analysis was made on various performing gestures that have not been defined in the previous report, substantial addition was made on the differences between Higashitani and Nishitani, and analysis was made for the first time on the overall structure of Imokurabe Festival.

In "Preparations for Imokurabe Festival," preparations made for Imokurabe Festival in 1988 were fully observed and recorded.

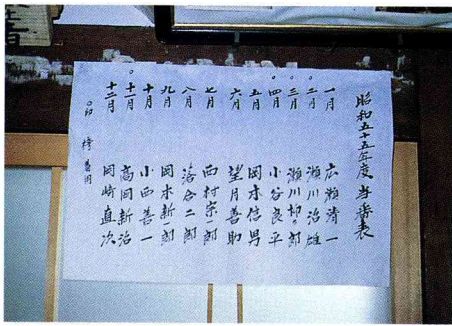
In "Surrounding conditions of Imokurabe Festival," observations and recording were made about the circumstances surrounding the festival including the Nogami Festivals that are celebrated in the neighboring villages, which are considered to be associated with Imokurabe Festival.

In conclusion, the following points were revealed concerning the Imokurabe Festival in Nakayama.

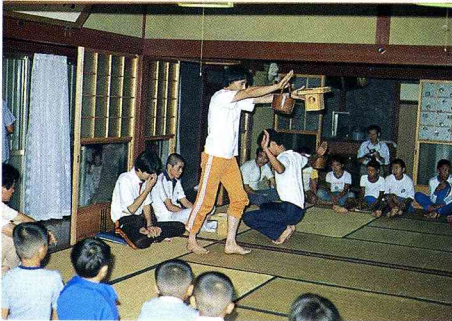
1. The differences and rivalry that can be observed on the day of Imokurabe Festival between the eastern and western parts of Nakayama do exist not only during the festival season but also in their ordinary life in the other seasons. The Imoku-

rabe Festival is an opportunity to regenerate those differences and rivalry between the two groups.

2. The Imokurabe Festival is locally accepted as a ceremony for foretelling the year's harvest of rice by comparing the length of Taros between the east and west of Nakayama. Therefore it should be considered an dry field farming ritual associated with a wet field farming ritual, and not as a purely dry field farming ritual.



④. 「昭和55年度当番表」。行事の毎月の分担者が書かれている。中山の宮座はオトナ12人で構成され、1人が1月ずつ分担する。



⑤. 8月30日午後8時、東谷の会所で東西合同のナラシが行われる。東谷、西谷のそれぞれで行われた後、最終的に合同のナラシを行う。



⑥. 角力の練習の場面。この時には山子もオトナ、勝手も参加し、総仕上げのナラシとなる。山若・山子ともこの時は普段着である。



⑦. 芋くらべ祭の前日。東西の山若が長い竿を持って、それぞれの谷のもっとも長い芋を村人の情報をもとにさがしまわる。

〔資料七〕

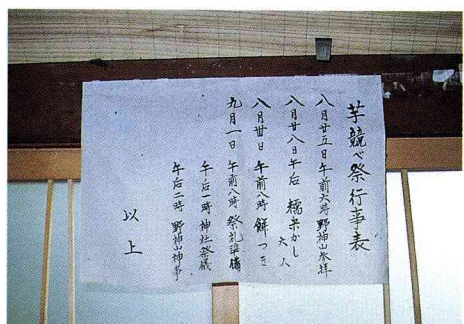
近江中山の芋くらべ祭 (1980年)



①. 中山の村の風景。これはカラスから萱をまもるためあわびの貝殻を屋根に乗せている家。家の前の畑では里芋がつくられている。



②. 熊野神社。中山の東谷西谷の境にある中山の氏神である。芋くらべ祭はまずここでの儀礼からはじまるが、熊野神社の祭礼ではない。



③. 熊野神社社務所内部に掲げられている芋くらべ祭の行事表。8月25日早朝の野神山参拝から書かれている。



⑫ 供物の御鯉。宮座のメンバーであるオトナと山若の家でつくられる。米の粉を型に入れて、ハゲイトウで赤く染める。



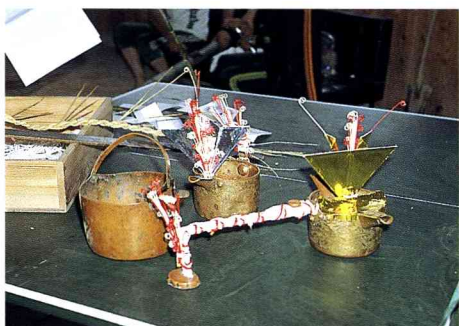
⑧ 芋くらべ祭は芋の根元から葉の先までの長さを競べるから、葉が大きいことも選択には重要である。山若が埋もれる程の長い芋が多い。



⑬ 9月1日早朝、前日選んでおいた長い芋を山若が掘り出す。祭に使うのは1本であるが、予備のためにもう1本掘り出しておく。



⑨ 野神山にある祭場の掃除は山子たちの役割である。雨が降るなか祭場のすべての石を水洗いする西谷の山子たち。



⑭ 芋くらべ祭の儀礼に使う柄杓、銚子と水さし。これらには水引のかざりがつけられている。この飾り方は東西で異なる。



⑩ 8月31日、芋くらべ祭の前日のすっかり準備の整った祭場。中央の二つの石は山若一番尉がすわる石。その両脇は神石。



⑮ 会所近くの作業場で始まった芋の飾りつけ作業。山若が中心となってやるが、これに経験豊富な大人が1人加わる。



⑪ 山若四番尉が用意するカワセノハンギリ。東西で交換される唯一の供物である。昔話や歌舞伎の舞台をあしらってつくられる。



⑳、会所を出発して熊野神社に向かう西谷の行列。先頭で御幣を手に持ち、黒い神主服を着ているのが山若一番尉である。



㉑、熊野神社の階段をあがる西谷の行列。芋はふつつは山子がかつぐが、このような場所では山若がかわって担ぐ。



㉒、熊野神社につくと芋は本殿の脇にひとまず供えられる。社務所で簡単な儀礼がおこなわれる間、山子がこの芋の番をする。



㉓、社務所には野神にそなえられる供物が並べられている。餅、ブト、御鯉、カモウリ、サササゲ、カワセノハンギリなどが見える。



㉔、芋には本番ではかりやすいように、丈尺にあわせて印がつけられる。この数によってあらかじめ東西の長さが比較できる。



㉕、西谷では根元の荒縄で三つの結び目をつくり、これに紙でつくった飾りをつける。この飾り方も東西で違う。



㉖、ほぼ飾りつけが終わった西谷の芋。最後の芋の上に水引で丈尺をくくりつける。また芋の長さがわからぬように芋の葉で覆う。



㉗、芋が会所から出発する前の記念撮影。山子は緋の着物、山若は袴、羽織、袴姿、山若一番尉は黒服、勝手は紋付、羽織袴である。



⑳ 東谷の道のりは短いので、東谷の芋がいち早く祭場に運びこまれる。祭場の石はきれいに整えられているのがよくわかる。



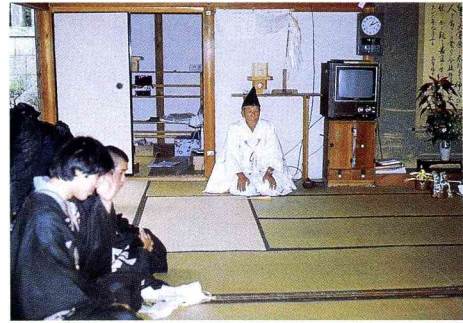
㉑ つづいて到着した西谷の芋。西谷の野神山への道は東にくらべて坂が急で、芋を運び上げるのが大変である。



㉒ 祭場に着座した山若。この年は東谷の山若は7人であったが、西谷は1人少なく6人であった。西谷はしばしば山若の数が不足する。



㉓ 二番尉以下とは反対に着座する山若一番尉。一番尉は神に向かっては村人の代表であり、また村人に向かっては神の代理人でもある。



㉔ 社務所の座敷に東西にわかれて山若が着座したのち、神主と副神主が席につき、神主が簡単なあいさつをしてここでの儀礼が始まる。



㉕ 社務所でおこなわれるのは三三九度の儀礼だけである。山若五番尉と六番尉が中央に出て、まず山若一番尉に酒をつぐ。



㉖ そのあと山若全員に盃をまわす。野神山での祭にさきだって熊野神社でこの儀礼がおこなわれる意味は不明である。



㉗ 熊野神社での儀礼が終わると、東西はそれぞれ別の道を通って、村の西北部にある野神山にむかう。これは東谷の行列。



③⑥. 最後に山若一番尉が神座の屋根の上の膳にひとつひとつ供物を捧げる。東はおとなしい作法、西は荒々しい作法で供物を供える。



③②. 天科棒を使って運びあげられた供物の数々。右上の竹で編んだものは神の膳、中央の白いものはカモウリを煮たものである。



③⑦. 〔7〕神々の三三九度。神に酒を供する儀礼である。これは山若一番尉が用意した三方の上の盃に山若が酒を注ごうとしている場面。



③③. 〔1〕水まわしの儀礼。すべての儀礼の開始にあたって、まず口をすすぐ儀礼である。最初に東西の山若が向かい合っている場面。



③⑧. 山若が注いだ酒を神座にかける山若一番尉。この儀礼もまた東西でやや時をずらして行う。すべての儀礼にこのような東西の差がある。



③④. 〔2〕神を拝すること。東西の山若がそろって神を拝する。この儀礼はたびたび行われる。東西の拝し方はこのように異なる。



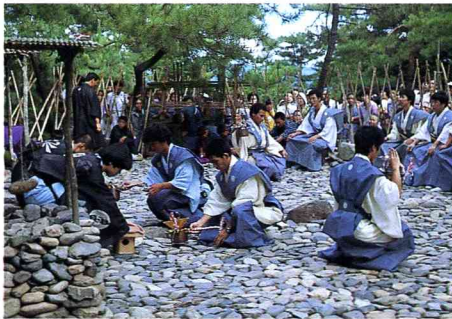
③⑨. 〔9〕われわれの膳を出すこと。これは山若たち自身の膳を出す儀礼である。このとき西は膳を投げる荒々しい所作をする。



③⑤. 〔5〕神の膳を奉る儀礼。これは用意した供物を神に供える儀礼である。祭場中央に山若全員が出て、手わたして渡して行く。



⑭、〔15〕我々の三三九度の盃。祭場中央に柄杓と銚子をもつ二人の山若が出て、銚子から柄杓へ酒を注ぐ。



⑮、まず山若一番尉に酒を注ぐ。そのあとまた銚子を持った山若から酒を注いでもらった後、山若全員に酒を出してまわる。



⑯、〔16〕一番二番の流れ盃。山若の一番尉と二番尉だけに酒肴を出す儀礼。肴を出す所作が他の儀礼にはない。



⑰、酒を出した後、受ける側の山若が膳を箸でコンコンと叩くと、控えていた山若が腰を屈めたまま足早に肴を持っていく所作がおもしろい。



⑳、まず一番尉に膳を出した後、すべての山若に膳を出す。このとき勝手に山子にも簡単な膳が出される。



㉑、〔10〕カワセノハンギリ。これは東西での贈物の交換である。山若一番尉が相手相手のハンギリ褒めた後、山若全員に御鯉を配る。



㉒、〔12〕神の膳を徹すること。供物を捧げる時と同様のやり方で神の膳をはやばやと徹する。神と山若との儀礼的直会はこれで終了。



㉓、同時に山若たちの膳もこのとき徹する。芋くらべ祭では出された料理に手を出すことはない。山子も同じである。



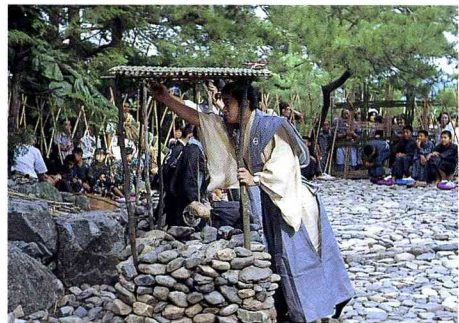
⑤②. この角力は土俵もなく、山若を中心にして山子が二人組むだけで、実際に相撲を取って、勝負を決めることはない。



④⑧. [17] 芋打ちの酒肴を出す。これからいよいよ芋を打つ山若三番尉に酒を出す儀礼。酒を何杯でものんでよいことになっている。



⑤③. [21] 芋打ち。祭の最後が芋打ちとよばれる芋の長さをはかる儀礼である。芋をはかる前にまず丈尺が同じであるかが確かめられる。



④⑨. [18] 吊り石を切る。神座に吊してある石を山若四番尉が刀で切り落とす。神座の柱の四方につけてあった枝も取り払う。



⑤④. まず自分の側の芋の長さをはかる。芋打ちは三番尉が行なうが、はかるたびにドンジョフミとよばれる独特の所作をする。



⑤⑩. この吊り石は山子四番尉がとって家に持ち帰り、翌年の芋くらべ祭まで大事に預かる。このときはじめて山子が儀礼に登場する。



⑤⑤. 芋をはかったあと祭場中央で丈尺を互いに立てて、芋の長さを言う。最初は東西とも自分の側の芋が長いと主張する。



⑤⑪. [19] 神の角力を取る。山若三番尉が山子二人を両脇にかかえて儀礼的に角力の所作をする。東西で3番ずつ取る。



⑥①. [24]祭場での芋くらべ祭の儀礼がすべて終わって、交換された芋はふたたび山子に担がれて山をおりる。



⑥①. 交換された芋は山子の手によって神主か副神主の家に届けられる。神主は宮座のなかでそれぞれの最年長者がつとめる。



⑥②. 野神山での芋くらべ祭が終わって、宮座と山若全員は熊野神社社務所で簡単な直会をして、山若は結果を宮座に報告する。



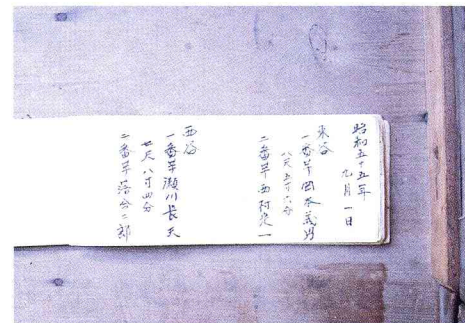
⑥③. 中山の近くの三十坪という村の野神祭でも里芋の茎でつくった鳥居が野神にそなえられる。この鳥居には初穂がかけられている。



⑥④. つぎに二番尉からの指示で相手側の芋を同じようにしてはかる。この際東西の境界線を越えるときには軽く頭をさげる。



⑥⑦. こうして3～5回芋打ちを繰り返し、その度に祭場中央でその確認がおこなわれる。最後はどちらかが短いことを認めて勝負が決まる。



⑥⑧. 芋の長さは毎年記録される。この年勝った東の芋は8尺5寸6分、負けた西の芋は7尺8寸4分であった。



⑥⑨. [22]長さを競った芋はこのあと東西で交換される。芋くらべ祭での儀礼的交換はこれとカワセノハンギリの二つである。



④. 飾りつけが終わった芋。徳谷では二本の芋が野神に供えられるが、二本とも神主の家で飾り付けられる。丈尺も見える。



⑤. プトはバランの葉に米の粉を塗ってつくられる。乾燥したのち四角に切る。里芋の葉を敷いてつくる中山の作り方とは違う。



⑥. その他の供物。おもに神主の妻がつくる。カモウリ、センバ、ササゲは中山と同じであるが、ここでは生姜の梅酒漬が加わる。



⑦. 祭りの道具は毎年つくりにかえられる。ここに見えるのはヘビとムカデを書いた笏、と箸。それに左上に丈尺が2本見える。

〔資料八〕

徳 谷 の 野 神 祭 (1988年)



①. 9月1日早朝、子供たちがほこもとの紙集めで村の家々をまわる。子供たちはお金をもらってくる。この行事は中山と全く同じ。



②. 貰ってきたお金は会所で子供たち自身で分配する。年長の子供ほど多く取り、年少の子供がもらうのはわずか。年輩序列が厳しい。



③. 神主の家での芋の飾りつけ。相当、氏子総代が加わる。中山にくらべて芋は小さく飾りも簡単である。



⑫. 祭のおわりの頃、神主が神前でクジを引いて来年の相当(再来年の神主)を決める。中山では年齢順であるがここではクジで決める。



⑬. 中山の人がはじめて徳谷の野神祭を見にくる。かつては日が同じであったので、中山の人もこれがはじめてだという。



⑭. 雨が降ってきて祭場ではできなかった直会を会所にもどって開く。この直会は祭の直会の性格ばかりでなく区の会議も兼ねる。



⑮. 祭の前1年間に生まれた子供は野神祭のときに、山入りの儀礼をおこなう。直会がおわったあと徳谷の各家を親が挨拶にまわる。



⑧. 野神山の祭場に供えられた供物。酒、御鯉、笏が見える。徳谷では各家からたくさんの御鯉が供えられる。



⑨. 野神祭には徳谷の全戸から世帯主が参列し、祭場の脇で直会が開かれる。これはまず神主が酒をのむ場面。



⑩. 徳谷には中山の山若に相当する組織がない。したがって祭は大人と子供とでおこなわれる。これは席についた子供に供物をくばる大人。



⑪. 子供の相撲。徳谷の土俵は極めて小さく、相撲は相手を倒すまで行われる。中山では勝負はつけないが、ここでは相撲を取る。